

村内遺跡発掘調査報告書 1

—「具志原貝塚」内容確認に係る試掘調査概報—

2020(令和2)年

伊江村教育委員会



図版1 具志原貝塚南地区遺構及び埋葬人骨検出状況（平成29年度）（西より）



図版2 具志原貝塚南地区遺構及び埋葬遺構検出状況（平成30年度）（南西より）



図版3 具志原貝塚東地区遺構検出状況（東より）



図版4 具志原貝塚北地区（指定範囲外）遺構検出状況（東より）

序

本報告書は、文化庁補助を受け実施しました具志原貝塚試掘調査の報告書です。

今回調査を行った具志原貝塚は伊江島の南岸、伊江港の北側に所在する砂丘上に立地している遺跡で、1986（昭和61）年に国の史跡に指定されております。これまで実施された発掘調査ではイモガイなどの集積遺構や埋葬遺構、弥生土器やガラス玉など、沖縄先史時代の文化や交流の様相などを知る上で貴重な発見がなされている遺跡です。

此度の試掘調査は、遺跡の範囲確認、史跡の内容確認などを目的に試掘調査を実施し、本村のみならず沖縄県の歴史及び文化を理解する上で貴重な調査成果が得られました。

本報告書が具志原貝塚に関する調査研究の基礎資料の一つとなり、本村は下より、沖縄県の歴史・文化研究の一助となれば、幸いです。

末尾になりましたが、今回の試掘調査及び資料整理、報告書刊行等に御指導、御協力いただきました方々に感謝申し上げます。

令和2（2020）年3月30日

伊江村教育委員会

教育長 宮里 徳成

例 言

1. 本報告書は伊江村教育委員会が平成28年度から令和元年度に実施した村内遺跡発掘調査事業において、国指定の史跡「具志原貝塚」の史跡内容確認等を目的に行った試掘調査の成果を収録したものである。
2. 本調査は文化庁及び沖縄県の補助を受け、伊江村教育委員会生涯学習課が実施した。
3. 現地調査は平成30年1月30日～3月31日、平成30年12月3日～平成31年3月29日の期間に実施した。
4. 本書の作成は平成29年度から令和元年度に行い、執筆は玉榮飛道、大城弘也が行い、第6章は株式会社文化財サービスが作成した分析結果報告書を掲載した。第5章4節の動物依存体の項に関しては、名古屋大学博物館の新美倫子氏に御寄稿いただいた。編集は玉榮飛道が行った。
5. 出土資料及び図面、写真等は伊江村教育委員会において保管している。

凡 例

1. 本書に表示している北は座標北を示す。
2. 標準工は全て海拔高を用い、特に記載がある場合を除きメートル単位で表記する。
3. 遺構実測図は適宜縮尺を変えて掲載し、図ごとにスケールを表示した。但し、原則として縮尺を1/2としている。
4. 試掘坑の層序番号はローマ数字としている。
5. 引用文献、参考文献は各章、各節の末尾に記載している。

目 次

1. 調査の経緯	1
2. 調査体制	2
3. 調査地の地理的・自然的・歴史的環境	5
4. 対象地のこれまでの調査について（具志原貝塚 調査研究略史）	10
対象遺跡の概要	
昭和38（1963）年調査概要	
昭和59（1984）年調査概要	
平成7（1995）年調査概要（指定地外）	
5. 試掘調査の概要	11
第1節 北地区	
試掘調査地区の概況	
試掘調査時層序	
試掘調査時検出遺構	
試掘調査時出土遺物	
人工遺物	
・土器	
・石器・石製品	
・貝製品	
自然遺物	
・貝類	
第2節 南地区	
試掘調査地区の概況	
試掘調査時層序	
試掘調査時検出遺構	
・埋葬遺構	
試掘調査時出土遺物	
人工遺物	
・土器	
第3節 東地区	
試掘調査地区の概況	

試掘調査時層序
試掘調査時検出遺構
試掘調査時出土遺物
人工遺物
・土器
・石器・石製品
・貝製品
・ガラス製品
自然遺物
・貝類

第4節 具志原貝塚2018年度調査出土の動物遺体

6. 人骨分析	62
7. 総括	69

挿図 目次

第1図 具志原貝塚 試掘調査個所及び過去の調査個所	4
第2図 伊江村（伊江島）位置図	6
第3図 伊江村遺跡分布図	7
第4図 北地区試掘坑2層序図	13
第5図 北地区試掘坑2遺構図	14
第6図 北地区出土土器1（有文資料口縁部）	19
第7図 北地区出土土器2（無文口縁部）	20
第8図 北地区出土土器3（無文口縁部・底部）	21
第9図 南地区試掘坑層序図（試掘坑1・試掘坑4）	28
第10図 南地区試掘坑層序図（試掘坑3）	29
第11図 埋葬遺構 遺構略図	30
第12図 東地区試掘坑5層序図	33
第13図 東地区出土土器1（有文資料）	41
第14図 東地区出土土器2（有文資料）	42
第15図 東地区出土土器3（無文土器口縁部）	43
第16図 東地区出土土器4（無文土器口縁部）	44
第17図 東地区出土土器5（底部）	45
第18図 東地区出土石器1（敲石）	47
第19図 東地区出土石器2（磨石・石皿）	48

第20図	東地区出土石器3 (石皿)	49
第21図	東地区出土パイプウニ製品	51
第22図	東地区出土ガラス製品	51
第23図	東地区出土貝製品 (貝符)	53
第24図	暦年較正結果	65
第25図	具志原貝塚 グスク時代層分布検討図	71

図版 目次

図版1	具志原貝塚南地区遺構及び埋葬人骨検出状況 (平成29年度) (西より)	
図版2	具志原貝塚南地区遺構及び埋葬遺構検出状況 (平成30年度) (南西より)	
図版3	具志原貝塚東地区遺構検出状況 (東より)	
図版4	具志原貝塚北地区 (指定地外) 遺構検出状況 (東より)	
図版5	調査地遠景 (北より)	75
図版6	調査地 (北地区) 近景 (南より)	75
図版7	調査地 (南地区) 近景 (東より)	76
図版8	調査地 (東地区) 近景 (南より)	76
図版9	北地区試掘坑2壁面写真 (西壁)	77
図版10	北地区試掘坑2壁面写真 (北壁)	77
図版11	北地区検出遺構写真 (東より)	78
図版12	南地区試掘坑1 層序写真 (東より)	78
図版13	南地区試掘坑3 層序写真 (東壁)	79
図版14	南地区試掘坑3検出埋葬遺構写真 (平成29年度) (西より)	79
図版15	南地区試掘坑3検出埋葬遺構 (平成29年度) (南より)	80
図版16	南地区試掘坑4 層序写真 (東より)	80
図版17	南地区試掘トレンチ掘削状況及び層序状況写真 (東より)	81
図版18	南地区試掘坑3検出埋葬遺構写真 (平成30年度) (南西より)	81
図版19	東地区試掘坑5 南壁層序写真 (北より)	82
図版20	東地区検出遺構・遺物出土状況写真 (南より)	82
図版21	北地区試掘坑2出土土器1 (有文土器)	83
図版22	北地区試掘坑2出土遺物2 (無文土器1)	84
図版23	北地区試掘坑2出土遺物3 (無文土器2・底部資料)	85
図版24	北地区試掘坑2出土土器 (底部資料)	86
図版25	東地区出土土器1 (有文資料1)	87
図版26	東地区出土土器2 (有文資料2)	88
図版27	東地区出土土器3 (無文土器口縁部1)	89
図版28	東地区出土土器4 (無文土器口縁部2)	90
図版29	東地区出土土器5 (底部)	91
図版30	東地区出土石器1 (敲石)	92

図版31	東地区出土石器2（石皿）	93
図版32	東地区出土石器3（磨石）	94
図版33	東地区出土遺物（パイプウニ製品）	95
図版34	東地区出土貝製品（貝符）	96
図版35	東地区出土遺物（ガラス製品）	96

表 目次

第1表	村内遺跡一覧	8
第2表	北地区試掘坑土層観察表	12
第3表	北地区出土土器観察表	16
第4表	北地区出土貝集計表	22
第5表	南地区土層観察表	25
第6表	東地区土層観察表	32
第7表	東地区出土土器観察表	37
第8表	東地区出土石器観察表	46
第9表	東地区試掘坑5出土貝類集計表	54
第10表	出土動物種名	59
第11表	魚類出土内容	59
第12表	爬虫類出土内容	60
第13表	イノシシ類出土内容	60
第14表	その他の哺乳類出土内容	60
第15表	放射性炭素年代測定結果	64

第1章 調査の経緯及び経過

第1節 調査の経緯

本調査は国指定の史跡「具志原貝塚」の史跡内容確認を目的とした調査である。

具志原貝塚は昭和32（1957）年に多和田真淳氏によって発見され、昭和38（1963）年、昭和45（1970）年に友寄英一郎氏、高宮廣衛氏らによる発掘調査が行われ、沖縄県内で初めて九州の弥生土器（須玖系土器）が発見された。この調査の後、昭和49（1974）年に東地区が県の史跡に指定された。昭和59（1984）年には、沖縄県教育委員会が主体となり、採砂工事に係る緊急発掘調査が行われ、保存状態が良好な遺物包含層や遺構、遺物が見つかり遺跡の重要性が考慮され、保存を目的とした調査へ切り替わった。調査後、昭和61（1986）年に具志原貝塚は国の史跡に指定され、平成10（1998）年には西地区の一部が追加指定された。現在、指定地の面積は道路部分も含め、約8,100㎡となっている。上記以外の調査として、平成7（1995）年には東地区の東方、指定地外の県道部分において、県道工事に伴う緊急発掘調査が実施されている。

伊江村では平成3年に「具志原貝塚用地基本構想説明書」、平成13（2001）年に「具志原貝塚及び周辺整備基本構想」、平成28（2016）年に「伊江村文化財保全活用基本構想」が策定された。平成13年度策定の基本構想でも指摘されているが、史跡内の各地点の特性に不明瞭な点があり、また遺跡全体の範囲に関しても明確ではなかった。そのため、遺跡の範囲や史跡内各地区の特性は将来、史跡整備を行う上で必要な情報であり、それを得るため調査の実施に至った。

第2節 調査の経過

今回の調査は平成28年度から令和元年度にかけて行った。

平成28年度は過去の調査資料の再整理を中心に調査を実施した。

試掘調査は平成29年度、平成30年度に実施した。試掘調査は史跡の内容確認と遺跡の範囲確認を目的に行った。

平成29年度は先述の通り、遺跡の範囲確認、地区の特性把握を目的として、平成30（2018）年1月30日～3月30日の期間、南地区に3箇所（試掘坑1、試掘坑3、試掘坑4）、北地区に1箇所（試掘坑2）、試掘調査を実施した。南地区においては遺跡の範囲を確認できた他、埋葬と思われる人骨の一部（頭骨、右腕骨等）を検出した。その際、壁面土層に遺構断面らしき土層が見られたが、類似した質の砂層であったため、土層ラインが不確実であったこと、平面プランを確認することが出来なかったことから、遺構の有無の確認を見送った。調査期間中、層序図等の図面作成に関しては業務委託にて作成した。

平成30年度は南地区と東地区で平成30（2018）年12月3日～平成31（2019）年3月30日の期間に試掘調査を実施した。南地区においては、平成29年度に確認した人骨の残存状況確認及び埋葬遺構の有無の確認のため、試掘坑3に隣接した箇所に試掘坑（試掘トレンチ）を設定し、調査を行った。東地区においては、試掘坑5を設け、史跡の内容確認の他、別地区（指定地内西地区、指定地外）で確認されている縄文時代前期層、縄文時代後期層の有無の確認を目的に調査を行い、第Ⅶ層において貝溜り（貝塚）を検出した。遺構検出作業後、貝の密度が比較的低い調査区南東隅にトレンチを設定、掘削し調査区の層序確認を行った。

令和元年度（平成31年度）は平成29年度、平成30年度の試掘調査成果の資料整理を実施したほか、業務委託にて出土人骨の整理、分析等を行い、本報告書を刊行した。

第2章 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

事業主体	伊江村		
調査主体	伊江村教育委員会		
事業責任	伊江村教育委員会	教育長	宮里徳成
事業所管	〃 教育行政課	課長	東江民雄（平成28年度） 新城米広（平成29年度～）
事業統括	〃	課長	東江民雄（平成28年度） 新城米広（平成29年度～）
事業事務	〃 生涯学習課	課長補佐	新城米広（平成28年度）
	〃 〃	〃	新保礼人（平成29年～平成30年度）
	〃	〃	金城幸人（令和元年度）
	〃	主査	山城佐百合（平成28年度～29年度）
	〃 生涯学習課	主事	大城由紀（平成30年度～） 玉榮飛道
調査指導	文化庁		水ノ江和同（平成29年当時）
	〃	文化財調査官	近江俊秀
	〃	文部科学技官	川畑 純
	沖縄県教育庁文化財課	専門員	羽方 誠
	沖縄県立埋蔵文化財センター		盛本 勲
	(株)文化財サービス		土肥直美
調査員	伊江村教育委員会	主事	玉榮飛道
		臨時職員	大城弘也（平成29～平成31・令和元年度）

発掘作業員

平成29年度

石井剛 内田富美枝 内間末宏 大城由理香 喜屋武宗満 島袋清生 島袋譲 棚原尚子
友寄隆源 三谷おはる 宮城徳子 山城竹充 山城ミキエ

平成30年度

東江信男 上間カズ 内田富美枝 大城和明 大城清信 亀里清子 棚原尚子 富田文子
村上紘一 宮城徳子 宮城ヨシ

資料整理員

平成28年度 ヴォルツまり子

平成29年度～平成30年度 西江徳子

平成30年度～平成31年度 内間咲也子

令和元年度 照喜名裕衣香

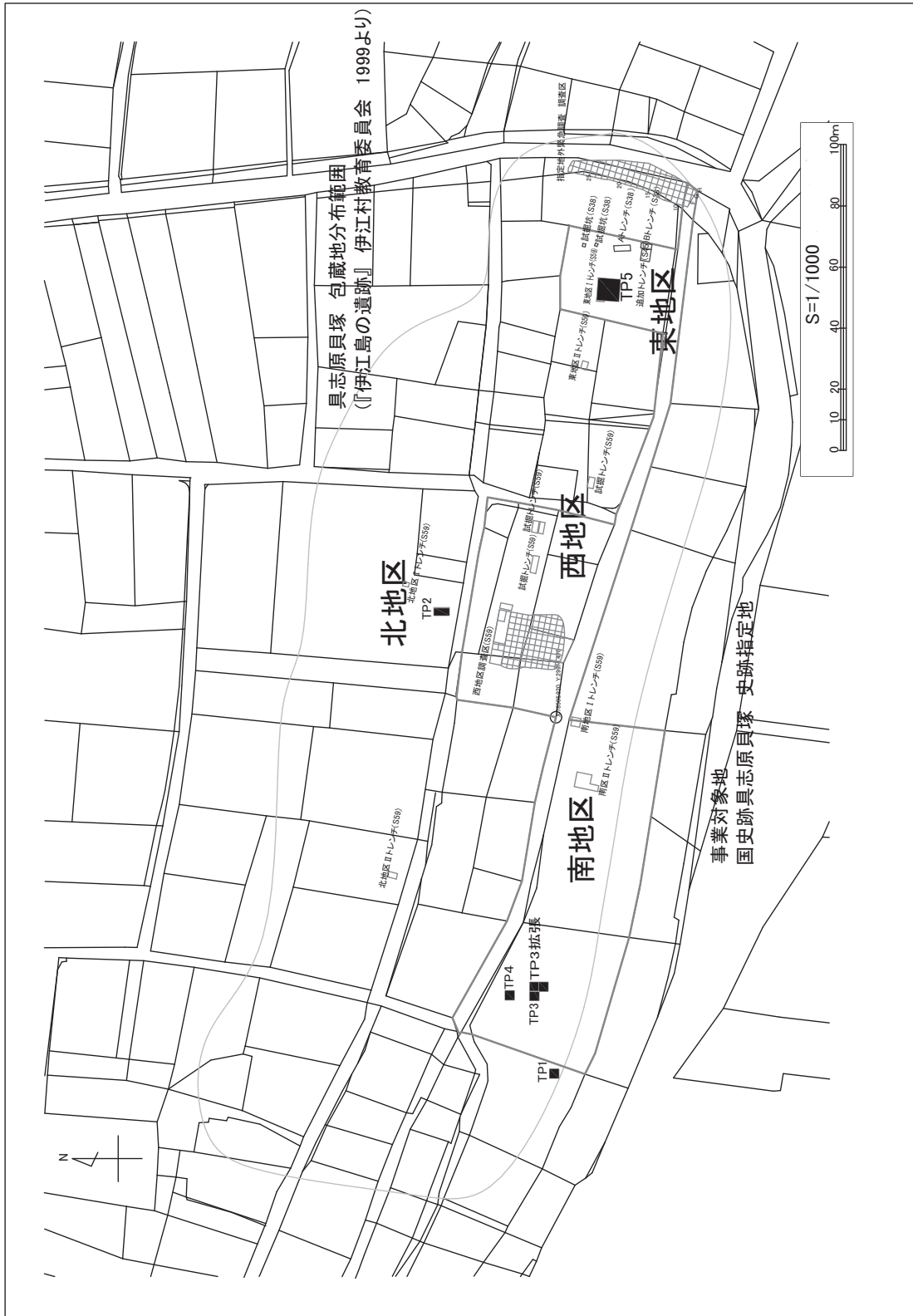
測量業務委託：株式会社シビルエンジニアリング

図面作成業務委託：三興コンサルタント株式会社

出土人骨整理・分析業務委託：株式会社文化財サービス

なお、以下の方々に調査・資料整理に関する御指導、御助言、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

篠田謙一（国立科学博物館）、山崎真治、澤浦亮平（沖縄県立博物館・美術館）、盛本勲、具志堅清大（沖縄県立埋蔵文化財センター）、宮城弘樹（沖縄国際大学）、安座間充、仲本祥太（金武町教育委員会）、比嘉二規（沖縄市立郷土博物館）、新里貴之（鹿児島大学）、山野ケン陽次郎（熊本大学）、新美倫子（名古屋大学博物館）（敬称略）



第1図 具志原貝塚 試掘調査箇所及び過去の調査箇所

第3章 調査地の地理的・自然的・歴史的環境

第1節 伊江村の地理的環境

伊江村は、沖縄本島の北部、本部半島の西方約4kmの洋上に位置する伊江島に所在している。面積は22.78km²、東西約8.4km、南北約3kmの略楕円形の島である。島の中央からやや東寄りにある城山（標高172m）は、島のシンボルとして親しまれ、その独特な形状から古くから航海の目印となっている。島の南側は砂丘が形成され、前面の海にはリーフが広がる。対照的に北側は約60mの断崖が連なり、リーフはあまり発達せず、水深は深くなる。地質に関しては、島の大部分が琉球石灰岩を基盤とし島尻マージに覆われ、城山やゴヘズ山周辺にチャート等の硬い岩石が分布している。島内には河川が発達せず、古くから湧出やマーガといった湧泉を利用していた。

村の人口は4,522人（令和2年1月末現在）、サトウキビ、花卉、葉たばこ、らっきょう、落下生、紅芋等の農業、肉用牛の畜産業、ソデイカ漁、モズク養殖といった漁業も盛んである。

参考文献

- ・『伊江村史 上巻』 伊江村史編集委員会編 1980年
- ・『伊江島の遺跡』 伊江村教育委員会 1999年

第2節 伊江村の自然的環境

本村の植生は、島の大半が耕作地であるため、森林植生は城山、照太寺等の限られた場所に残されている。また、第二次世界大戦の戦禍によりその殆どが二次林である。城山にはタブノキ=イスノキ群落、照太寺にはヤブニッケイ=ツゲモドキ群落、フシャティムイ御嶽はクワノハエノキ=フウトウカズラ群落がみられる。海岸沿いには、防潮林として植生されたモクマオウ、アダン、その他はリュウキュウマツ人工林や放棄畑跡地のギンネム林が生育する。

具志原貝塚周辺の植生としては、防潮林としてモクマオウ、アダン等、植栽としてクバ（ビロウ）等がみられる。

参考文献

- ・『伊江島の植物図鑑』 伊江村教育委員会 2002年

第3節 伊江村の歴史的環境

村内の遺跡は39遺跡確認されており、カダ原洞穴遺跡をはじめとする旧石器時代（更新世）の遺跡は主に北海岸に分布する。対して南海岸は縄文時代から弥生～平安並行期の遺跡が集中しており、南海岸が長く人々の生活圏であったと言えよう。

次に各時期に関する調査研究略史を踏まえつつ村内遺跡について概観していきたい。1934年、地元の教諭であった上里吉堯氏により北海岸の半洞穴から鹿化石が採集された。鹿化石に関する情報はその後多和田真淳氏に伝わり、その情報を基にして1936年、徳永重康氏によるカダ原洞穴の調査が行われた。この調査によって、鹿骨製品と石器が採集された。しかし、当時の日本では旧石器時代の遺跡は発見されておらず、考古学界が注目することはなかった。その後、鹿角製品は後に叉状骨器と称され、様々な検討がなされたが、1976年から1977年に行われたゴヘズ洞穴遺跡の発掘調査報告における加藤晋平氏の指摘によって現在では鹿がリン不足のため

骨を噛んだことで又状となった自然物という説が有力である。

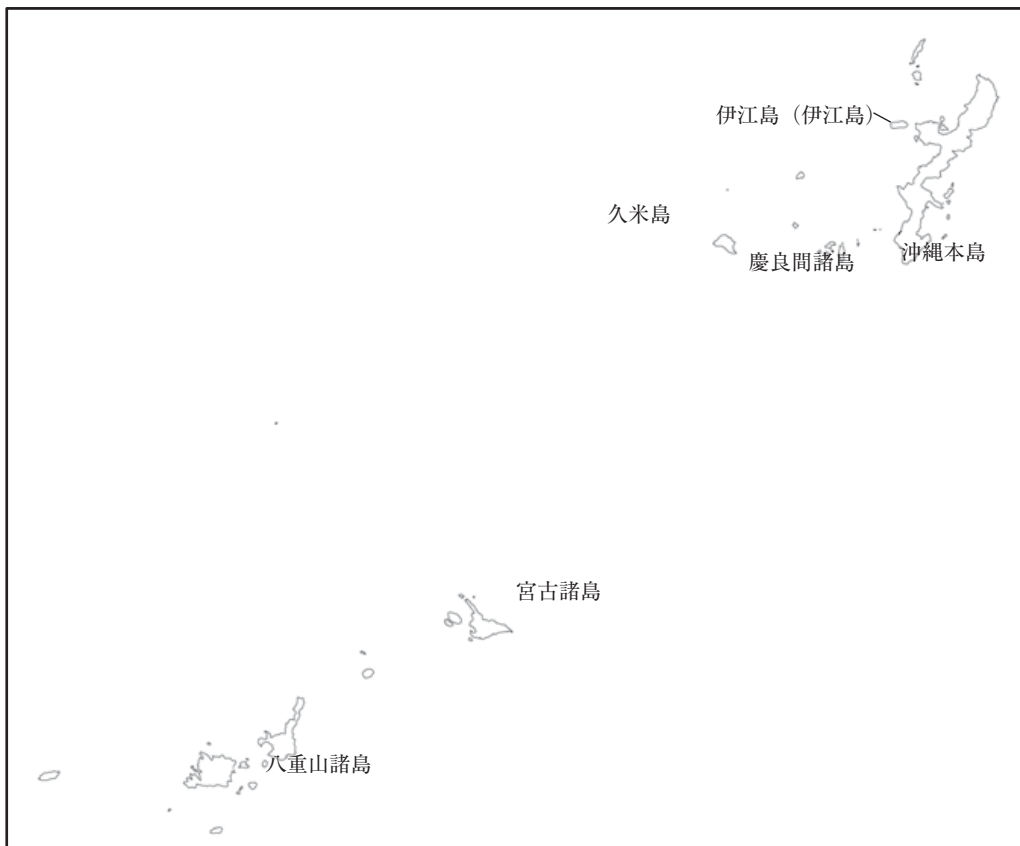
伊江島で現在確認されている最古の縄文時代遺跡は具志原貝塚であり、縄文時代前期の条痕文土器や室川下層式土器が出土している。ただし、遺構の未発見、遺物点数の少なから生活の様相は不明である。縄文時代後期になると遺跡の数は増加し、浜崎貝塚、ナガラ原第三貝塚、西崎遺跡、渡り地原遺跡では住居址が確認されている。

弥生～平安時代並行期には遺跡の数はさらに増加し、ほとんどの遺跡が海岸砂丘地に形成される。主な遺跡としては、具志原貝塚、阿良貝塚、ナガラ原東貝塚、ナガラ原西貝塚等がある。これらの遺跡では貝集積の他、九州の弥生土器が出土されるなど他地域との交易を示す文物が確認されている。

グスク時代に入ると、遺跡の数は減り、伊江グスクや集落跡の東江上遺跡、西江上遺跡が城山周辺に確認されている。

参考文献

- ・小田静夫「カダ原洞穴とその調査史」『南島考古第26号』 沖縄考古学会 2007年
- ・『伊江島の遺跡』 伊江村教育委員会 1999年
- ・『カヤ原遺跡A地点・ナガラ原東貝塚・ナガラ原第三貝塚』 伊江村教育委員会 2017年



第2図 伊江村（伊江島）位置図



伊江村地形図

第3図 伊江村遺跡分布図

第1表 伊江村の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物
1	カダ原洞穴遺跡	東江上カダ原	石灰岩台地中腹	更新世		鹿化石、石器
2	イヌガ洞穴遺跡	東江上イヌガ原	石灰岩台地	更新世		鹿化石
3	ウカバ鹿化石出土地	東江前ウカバ原	海岸岩礁帯	更新世		鹿化石
4	親竹鹿化石出土地	西江上親竹原	石灰岩台地	更新世		鹿化石
5	親竹岩礁鹿化石出土地	西江上親竹原	海岸岩礁帯	更新世		鹿化石
6	馬ノ鼻石器出土地	西江上ヤー原	石灰岩台地	不明		石器
7	湧出海岸陶磁器散布地	東江上イヌガ原	海岸岩礁帯	グスク時代		陶磁器
8	伊江グスク	東江上グスク原	丘陵地	グスク時代		土器、陶磁器、鉄滓等
9	西江上遺跡	西江上	石灰岩台地	中世～近世		陶磁器、石器等
10	東江上遺跡	東江上	石灰岩台地	中世～近世		陶磁器、石器
11	ゴヘズ洞穴遺跡	西江上ゴヘズ原	石灰岩台地	更新世、後期		鹿化石、土器、人骨
12	浜崎貝塚	東江前浜崎原	砂丘地・低台地	前Ⅳ期～後期		土器、石器、貝製品等
13	浜地原遺物散布地	東江前浜地原	砂丘地	近世		陶磁器
14	ガテナ原遺跡	東江前ガテナ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器等
15	ガテナ原第二遺跡	東江前ガテナ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器、石材等
16	阿良東貝塚	東江前阿良原	砂丘地・低台地	前Ⅳ期		土器、貝類
17	阿良貝塚	東江前阿良原	砂丘地	後期	貝集積遺構	土器等
18	阿良第二貝塚	東江前阿良原	石灰岩低台地	前Ⅳ期、後期	埋葬遺構	土器、石器、貝類
19	具志原第二貝塚	川平グシ原	砂丘地	後期		土器
20	具志原貝塚	川平下原	砂丘地	前Ⅱ期～後期	土坑、柱穴、貝集積遺構等	土器、石器、貝製品等
21	アッチ浜貝塚	川平下原	砂丘地	後期		土器、貝類
22	アニサギ貝塚	川平カヤ原	石灰岩低台地	前Ⅴ期		土器、石材等
23	カヤ原遺跡 A 地点	川平カヤ原	石灰岩低台地	前Ⅳ期、後期	貝塚	土器、石器、貝製品等

No	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物
24	カヤ原遺跡B地点	川平カヤ原	石灰岩低台地	前V期		土器
25	ナガラ原東貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	前V期・後期	柱穴	土器、石器、 貝製品等
26	ナガラ原西貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	後期	住居跡、柱穴	土器、石器、 貝製品等
27	ナガラ原第三貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	前IV期～後期	貝集積、埋葬 遺構、住居址 等	土器、石器、 貝製品等
28	ナガラ原第四貝塚	川平ナガラ原	砂丘地	後期		土器、貝類
29	フナズ遺跡	川平フナズ原	砂丘地・低台 地	前V期		土器、石器等
30	フナズ西遺跡	川平フナズ原	低台地	前V期		土器等
31	ナナチサンバシル	西江前シキミズ	石灰岩崖下	近世	古墓	人骨
32	寺コシ遺跡	西江前寺コシ	石灰岩台地	前V期		土器、石器等
33	ニャーフガ洞遺跡	川平アキナ原	洞穴・低台地	中世		カムイヤキ等
34	アキナ原遺跡	川平アキナ原	石灰岩低台地	前V期		石器、石材
35	西崎遺跡	川平渡り地原	砂丘地	前IV期	竪穴住居跡	土器、石材、 貝類等
36	ハシラ遺跡	西江前ハシラ原	石灰岩丘陵	前V期		土器等
37	渡り地原遺跡	川平渡り地原	砂丘地	前IV期	竪穴住居跡、 炉跡	土器、石器、 貝類等
38	ユナギシ古墓	西江前マミカ原	石灰岩丘陵岩 陰	近世	古墓	人骨
39	小浜原遺跡	川平小浜原	石灰岩低台地	近世		陶磁器、石器

第4章 具志原貝塚 調査研究略史

第1節 昭和38（1963）年～昭和45（1970）年調査概要

具志原貝塚は昭和32（1957）年に多和田真淳氏によって発見された。本格的な発掘調査は、昭和38（1963）年、琉球大学の友寄英一郎氏、沖縄大学の高宮廣衛氏らによって行われた。出土土器は、弥生時代相当期（貝塚時代後期）に属し、無文土器が大半であり、土器は薄手で、尖底とくびれ平底の二種が出土している。この二種の土器は後に高宮氏により「具志原式土器」と型式設定された。また、この調査により、沖縄で初めて移入弥生土器（須玖式土器、後に山ノ口式土器）、貝製品としては貝符が発見され、九州との交流を関連づける貴重な資料として注目された。昭和45（1970）年の第二次調査では、上記の土器以外に時期が大きく異なる赤連系土器が最下層から発見された（1963年 伊江村教育委員会）（第1図参照）

第2節 昭和59（1984）年～昭和60（1985）年調査概要

昭和59（1984）年、沖縄県教育委員会が主体となり、採砂計画に伴う緊急発掘調査が行われた。調査区は東・西・南・北の4地区に設定され、西地区の最下層から縄文時代前期に属する条痕文土器が出土し、その上層に縄文時代後～晩期、間層を挟み弥生相当期（貝塚後期）の4期の文化層が確認された。第一次調査では、イモガイやマガキガイの集積、炉址、土坑、柱穴等の遺構が検出された。その後遺跡保存を目的とした第二次調査が行われ、南地区では、埋葬人骨が土器や貝製品といった供伴資料と共に検出された。昭和61（1986）年、国の史跡に指定された。

第3節 平成7（1995）年調査概要（指定地外）

沖縄県教育委員会により、同遺跡の指定地外において県道拡張工事に係る発掘調査が行われた。調査区を北区、南区に設定し、遺構は土坑1基、焼土遺構4基が検出された。北区では、「くびれ平底甕形土器」、南区では、「尖底深鉢形土器」が弥生土器や弥生系土器に伴い、主体的に出土している。出土土器は在地土器が中心で弥生時代相当期（貝塚後期）に属するが、南区の下層から縄文時代前期の室川下層式土器、土壙からは縄文時代後期の仲泊式土器が出土した。（1995年 沖縄県教育委員会）（第1図）

参考文献

- ・『伊江島具志原貝塚』伊江村文化財調査報告書第4集 伊江村教育委員会 1978年
- ・『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集 沖縄県教育委員会 1985年
- ・『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第130集 沖縄県教育委員会 1997年
- ・『伊江島の遺跡』伊江村文化財調査報告書第13集 伊江村教育委員会 1999年
- ・『沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）』南島考古第6号 高宮廣衛 1978年

第5章 試掘調査の概要

今回の調査において、遺跡の北地区、南地区、東地区において遺跡の範囲確認及び内容確認を目的とした試掘調査を実施した。以下、地区ごとに報告を行う。なお、土器の分類に関しては、地区ごとに行っている。煩雑ではあるが、その旨ご了承ください。

第1節 北地区

試掘調査地区の概況

北地区は全体的に史跡指定の範囲外となっている地区である。1984（昭和59）年の発掘調査の際、本地区に2基の試掘坑が設けられ調査が行われた。しかし昭和59年調査の報告書において、本地区の詳細な報告はなされておらず、村道を挟んで隣接している西地区との関係性は不明瞭であった。そのため、西地区と昭和59年調査の「北区Ⅰトレンチ」との間に調査区（試掘坑2）を設けて試掘調査を行った結果、遺物包含層及び貝溜りを検出した。遺構検出後、調査区北側に試掘ピットを設け、更に下層の確認を行った。

記録作業を検出遺構は埋め戻しを行い、現地にて保存している。

試掘調査時層序（第4図 図版9・10）

本地区からは地山を含めた5枚の層序が確認され、その内1枚が遺物包含層となっている。遺物包含層はⅢ層で、弥生時代相当期（貝塚時代後期）の単純層である。Ⅳ層以降は遺物を含まず、土質も粘土質になり、水を通しにくい。本地区では南側から北側に向けてゆるやかに傾斜し窪地となり、第Ⅳ層の影響からか、水が溜まりやすくなっている。

以下、本地区における各層序の特徴等を記す。

第Ⅰ層：表土層。耕作土で、礫を多量に含む。土色はにぶい黄褐色を呈する。

第Ⅱ層：旧表土層で砂粒を含む。土色はにぶい黄褐色を呈する。少量の土器片を含む。

第Ⅲ層：遺物包含層。土器・貝類等の遺物を多量に含む。土色は黒褐色を呈する。

第Ⅳ層：無遺物層。土中に石灰岩の礫を含む。土色はにぶい褐色を呈する。

第Ⅴ層：地山層。鳥尻マージ層で石灰岩を基盤とする。

試掘調査時検出遺構（第5図 図版11）

北地区の試掘坑2ではⅢ層下部において貝塚（貝溜り）を検出した。人工遺物として土器、貝製品等が出土、貝類はシャコガイやマキガイなどが主体となっている。また、遺構内からブダイなどの獣骨骨が得られた。なお、本遺構は遺構保護のため完掘は行わずに遺構検出に止めた。また、掘削も調査区のみにしたため、遺構の規模（広がり、深さ）に関しては不明である。遺構の記録後は埋め戻しを行い、遺構の保護を行った。

第2表 北地区試掘坑土層観察表

層序 区分	土色・土質	土の特徴	主な遺構・遺物	時 期
I層	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	しまりが弱く、崩れやすい。 礫を多く含む。	現代遺物	近現代
II層	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	しまりが弱い、少しまとまりがある。白砂が混じる。	現代遺物、少量の人工遺物	近現代
III層	黒褐色土 (10YR3/2)	しまりが良く、まとまりがある。	貝だまり、土器、自然遺物	弥生時代相当期(貝塚後期) 浜屋原式～大当原式期
IV層	にぶい褐色土 (7.5YR4/3)	粘性が強く、水を通さない。 石灰岩の礫を含む。	—	—
V層	—	—	地山層。マージ層。	—

試掘調査時出土遺物

人工遺物

・土器

本地区の出土土器は、全て小破片であったため器形が判別できるものは僅かであった。出土土器は弥生時代並行期(貝塚時代後期)に属する土器で在地土器が主体となっている。以下、出土土器の分類を試み、特徴的な資料を図1から図8に示す。

有 文

有文のものは全て小破片であるため、文様形態の分類を行った。

第I群 凸帯文を主とするグループ。

- a類-口縁部外面に鞍状凸帯文を貼付するグループ。
- b類-口縁部外面に凸帯文のみを貼付するグループ。

第II群 沈線文を主とするグループで以下の2種に細分する。

- a類-口縁部外面に沈線文を施文するグループ。
- b類-口縁部両面に沈線文を施文するグループ。

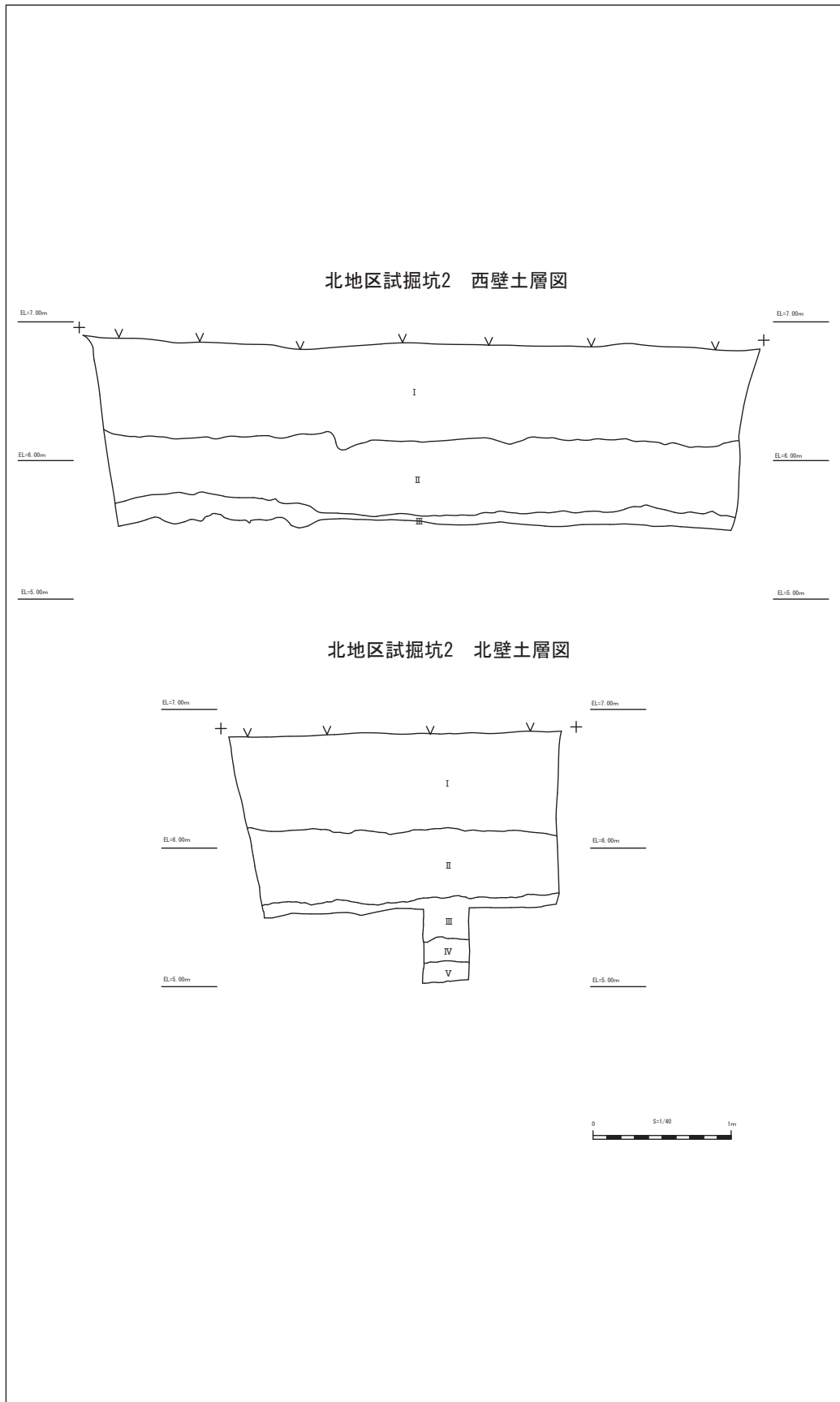
第I群

a類

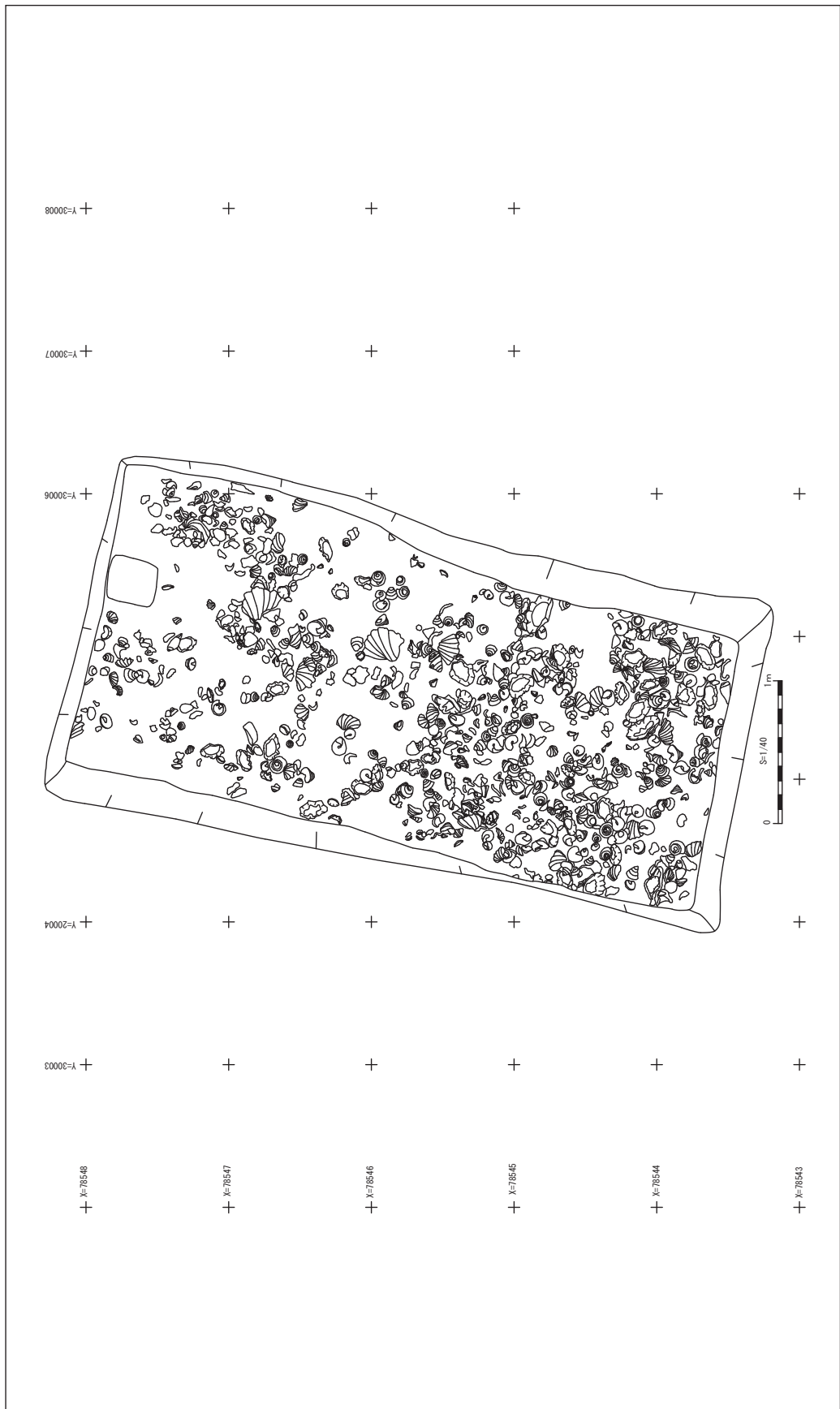
第6図1は口縁部外面に鞍状凸帯文を貼付したものである。口縁部はやや外反し、胴部にかけての膨らみは弱い。

b類

第6図2～4は口縁部外面に逆U字凸帯を貼付したものである。同図2は口縁部が外反する甕形をなし、口唇部は舌状に成形されている。内器面は指圧調整がされている。同図3は口縁部の小破片で口唇部は舌状に成形されている。同図4は胴部の小破片で、二条の凸帯を横位に貼付している。



第4図 北地区試掘坑2層序図



第5図 北地区試掘坑2遺構図

第Ⅱ群

第6図5～8は口縁部に沈線文が施されている。同図5は口縁部から深鉢形と考えられ、外器面に斜沈線文を施している。同図6は口縁部が内湾する深鉢形で、内外面ともに鋭い斜沈線文を施す。同図7は小破片で、口縁部外面に斜沈線文を施し、口唇部は平坦に成形されている。同図8は頸部片で幾何学的な沈線文が施されている。

無 文

無文土器資料もその殆どが小破片であるため、器形のわかる口縁部資料は少ない。よって、口唇部の形状や傾きを基準に分類を試みた。

第Ⅰ群－口唇部が舌状のグループ。

a類－口縁部が内湾する深鉢形のもの。

b類－口縁部が直口する深鉢形のもの。

第Ⅱ群－口唇部が平坦のグループ。

a類－口縁部が直口する深鉢形のもの。

b類－口縁部が外反する甕形のもの。

第Ⅰ群

a類

第7図9は口唇部を舌状に成形し、口縁部が内湾する深鉢形を呈する。

b類

第7図10～15は口唇部を舌状に成形するもので、底部から口縁部にかけて直状に開く深鉢形を呈する。同図10は内器面に整形時の指圧痕が集中している。同図11は整形時の指圧痕の凹凸が明瞭に残る。同図12は内器面に整形時の指圧痕、下部には粘土接合部が消されずに隆帯状に残る。同図13は外器面に指頭で押し伸ばした痕が認められる。同図14は内外の器面に指圧痕が残るが、やや粗雑である。同図15は胎土がきめ細かく、器面調整も丁寧である。

第Ⅱ群

第8図16～17は口唇部を平坦に成形するもので、同図16は口縁部が外反するが、胴部に膨らみを持たない。器面に器面調整による指圧痕が残る。同図17は口縁部が外反する甕形をなすもので、器面に器面調整による指圧痕が残る。

底 部

本地区で出土した底部資料は、尖底が主体を占める。尖底は砲弾状尖底、乳房状尖底の2種に分かれる。以下、特徴的な資料を第8図18から26に示す。

第Ⅰ群

第8図18～21は砲弾状尖底で、同図18は厚みのある底部である。同図19は底部からの開きが

強い器形で、焼成も良好である。同図20は外底面から胴部への立ち上がりが緩やかである。同図21は小破片で、比較的厚みのある底部である。

第Ⅱ群

第8図22～26は乳房状尖底で、同図22は底部から胴部へと緩やかに立ち上がる器形で、外器面に整形時の指圧痕が残っている。同図23は外底面が平坦となり、内底面が凹んでいる。外器面に整形時にできた指圧痕が残る。同図24は外底面の突出している部分が平坦に整形されている。同図25は明瞭な形で外底面の瘤状突起が突出し、両底面ともに凹んでいる。同図26は外底面が凹み、内底面は平坦に整形されている。

第3表 北地区出土土器観察表

※単位は cm

図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色調	焼成	備考
第6図1 図版21	Ⅲ層上	有I a	深鉢形	口縁部	0.3～0.6	内面に指 圧痕	砂泥質/ 黒色粒・ 赤色粒	内外ともに橙 色	良 好	鞍状凸帯文。 浜屋原式。
第6図2 図版21	Ⅲ層	有I b	-	口縁部	0.7	内面に指 圧痕	砂泥質/ 砂粒・赤 色粒	内外ともに橙 色	脆 弱	逆U字状凸 帯文。
第6図3 図版21	Ⅲ層	有I b	-	口縁部	0.7	-	砂質/黒 色粒	内外ともに橙 色	脆 弱	逆U字状凸 帯文。
第6図4 図版21	Ⅲ層	有I	-	胴部	0.5	-	砂質/黒 色粒・褐 色粒	外：にぶい黄 褐色 内：に ぶい褐色	良 好	二条の凸帯 文。
第6図5 図版21	Ⅲ層	有II a	深鉢形	口縁部	0.4～0.6	内面に刷 毛目状条 痕	砂質/黒 色粒	内外面ともに にぶい赤褐色	やや良 好	
第6図6 図版21	Ⅱ層下	有II a	深鉢形	口縁部	0.6	-	泥質/砂 粒・黒色 粒	内外面ともに 橙色	脆 弱	
第6図7 図版21	Ⅱ層下	有II b	深鉢形	口縁部	0.4	-	砂質/赤 色粒	内外とも灰白 色	良 好	
第6図8 図版21	Ⅲ層	有II	-	頸部	0.7	-	砂質/黒 色粒	内外ともに橙 色	良 好	有段口縁部？
第7図9 図版22	西トレ ン チ バ ル ト 下 ・ Ⅲ 層	無I	深鉢形	口縁部	0.5	-	泥質/砂 粒	外：にぶい黄 橙色 内：明黄褐色	やや脆 弱	
第7図10 図版22	Ⅲ層	無I	深鉢形	口縁部	0.6	内外面に 指圧痕 内面に集 中	泥質/黒 色粒	内外ともに橙 色	良 好	
第7図11 図版22	西トレ ・ Ⅲ層	無I	深鉢形	口縁部	0.4～0.6	内外面に 指圧痕	泥質/黒 色粒	内外ともに橙 色	良 好	

図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色 調	焼成	備考
第7図12 図版22	Ⅲ層	無 I	深鉢形	口縁部	0.4～0.8	内面に指 圧痕	砂泥質/ 褐色粒・ 石灰質粒	内外ともに橙 色	良好	
第7図13 図版22	西トレ・ Ⅲ層	無 I	深鉢形	口縁部	0.5～0.6	外面に指 圧痕	砂泥質/ 黒色粒・ 褐色粒	外：灰白色 内：浅黄橙色	良好	外面に指頭 で押し伸ば した痕あり。
第7図14 図版22	Ⅲ層	無 I	深鉢形	口縁部	0.5	内外面に 指圧痕	砂泥質/ 黒色粒	外：赤褐色 内：にぶい褐 色	良好	
第7図15 図版22	Ⅲ層	無 I	深鉢形	口縁部	0.3～0.4	内面に指 圧痕	砂質/黒 色粒・赤 色粒	外：にぶい橙 色 内：にぶ い黄橙色	良好	
第8図16 図版23	Ⅲ層	無 II a	深鉢形	口縁部	0.4	内外面に 指圧痕	砂質/黒 色粒	内外ともに黄 橙色	良好	
第8図17 図版23	Ⅲ層	無 II b	甕形	口縁部	0.3～0.5	内外面に 指圧痕	砂泥質/ 黒色粒・ 褐色粒	外：黒褐色 内：褐灰色	良好	
第8図18 図版24	西トレン チ Ⅲ層	底 I	-	底 部	1.7	-	砂泥質/ 黒色粒・ 砂粒	外：にぶい橙 色 内：橙色	良好	尖底。
第8図19 図版24	Ⅲ層	底 I	-	底 部	1.2	-	砂質/黒 色粒・白 色粒	内外ともに橙 色	良好	尖底。
第8図20 図版24	西トレン チ ベル ト下・Ⅲ 層	底 I	-	底 部	1.5	-	砂泥質/ 黒色粒・ 白色粒・ 褐色粒	外：にぶい橙 色 内：橙色	良好	尖底。
第8図21 図版24	Ⅱ層下	底 I	-	底 部	1.1	-	砂質/黒 色粒	外：橙色 内： にぶい橙色	良好	尖底。
第8図22 図版24	西トレン チ Ⅲ層	底 II	-	底 部	0.7	外面に指 圧痕	砂泥質/ 黒色粒	外：にぶい橙 色 内：橙色	良好	乳房状尖底。
第8図23 図版24	Ⅱ層下	底 II	-	底 部	0.5	外面に指 圧痕	砂質/黒 色粒・赤 色粒	外：にぶい橙 色 内：橙色	良好	乳房状尖底。
第8図24 図版24	Ⅱ層下	底 II	-	底 部	0.8	-	砂質/黒 色粒・白 色粒	内外ともに橙 色	良好	乳房状尖底。
第8図25 図版24	Ⅱ層	底 II	-	底 部	1	-	砂泥質/ 黒色粒・ 砂粒・褐 色粒	内外ともに橙 色	良好	乳房状尖底。
第8図26 図版24	Ⅲ層	底 II	-	底 部	1.5	-	砂泥質/ 白色粒	外：橙色 内：にぶい黄 橙色	やや良好	乳房状尖底。

・貝製品

貝製品は貝錘等が出土している。

自然遺物

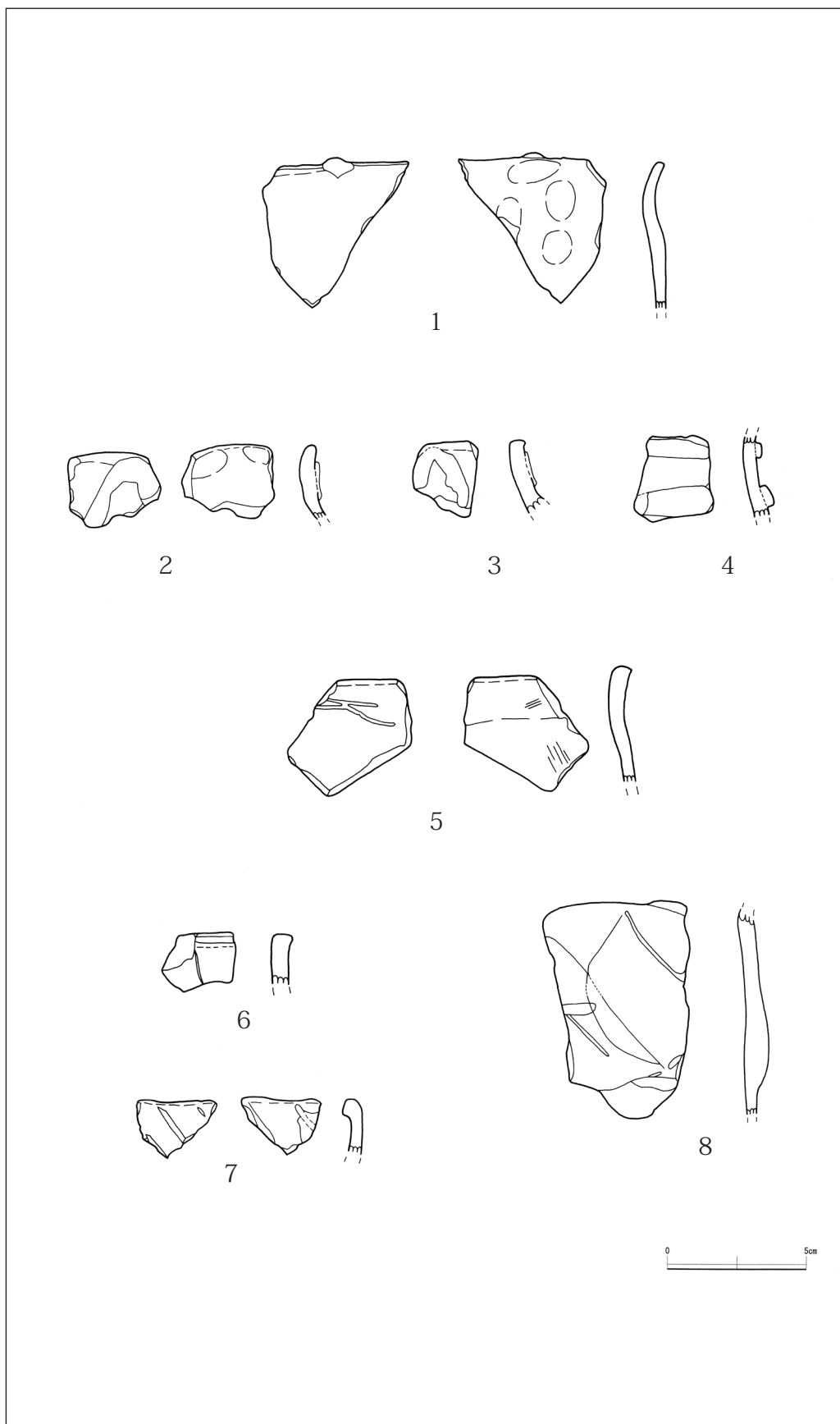
本調査区においては、マガキガイなどの貝類、獣魚骨が出土した。

・貝類

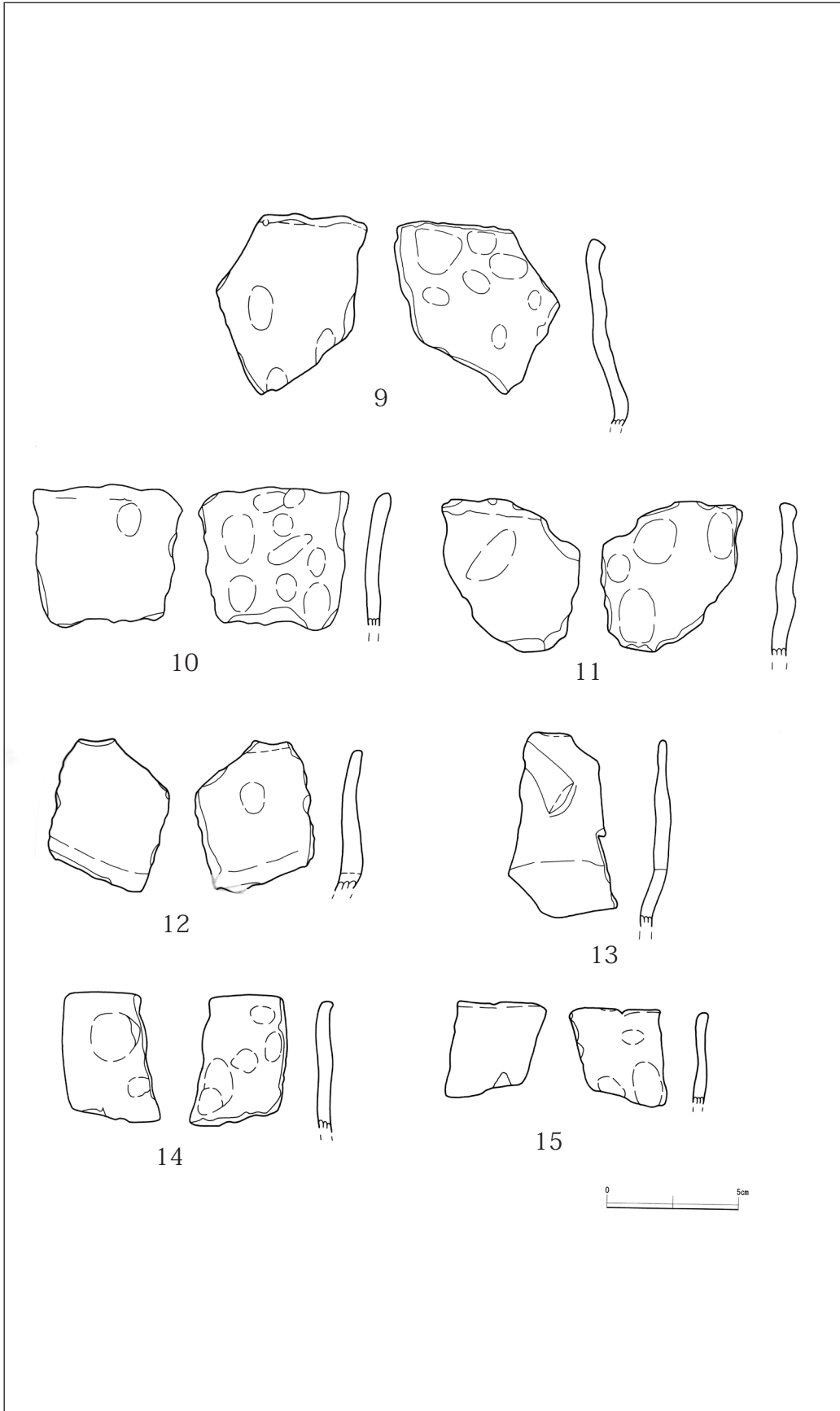
貝類はⅠ～Ⅲ層までにおいて出土が確認されており、遺物包含層であるⅢ層において多くが出土している。確認された貝類は、二枚貝綱が8科約18種、腹足綱では20科約53種、陸産貝では6種が確認されている。海産貝においては、マガキガイが多く出土しており、その他にチョウセンサザエ、ウグイスガイ類、サラサバティ、ヒメジャコをはじめとするシャコガイ類等が出土している。陸産貝では、オキナワヤマタニシが多数を占め、その他パンタナマイマイ等を確認することができた。

小 結

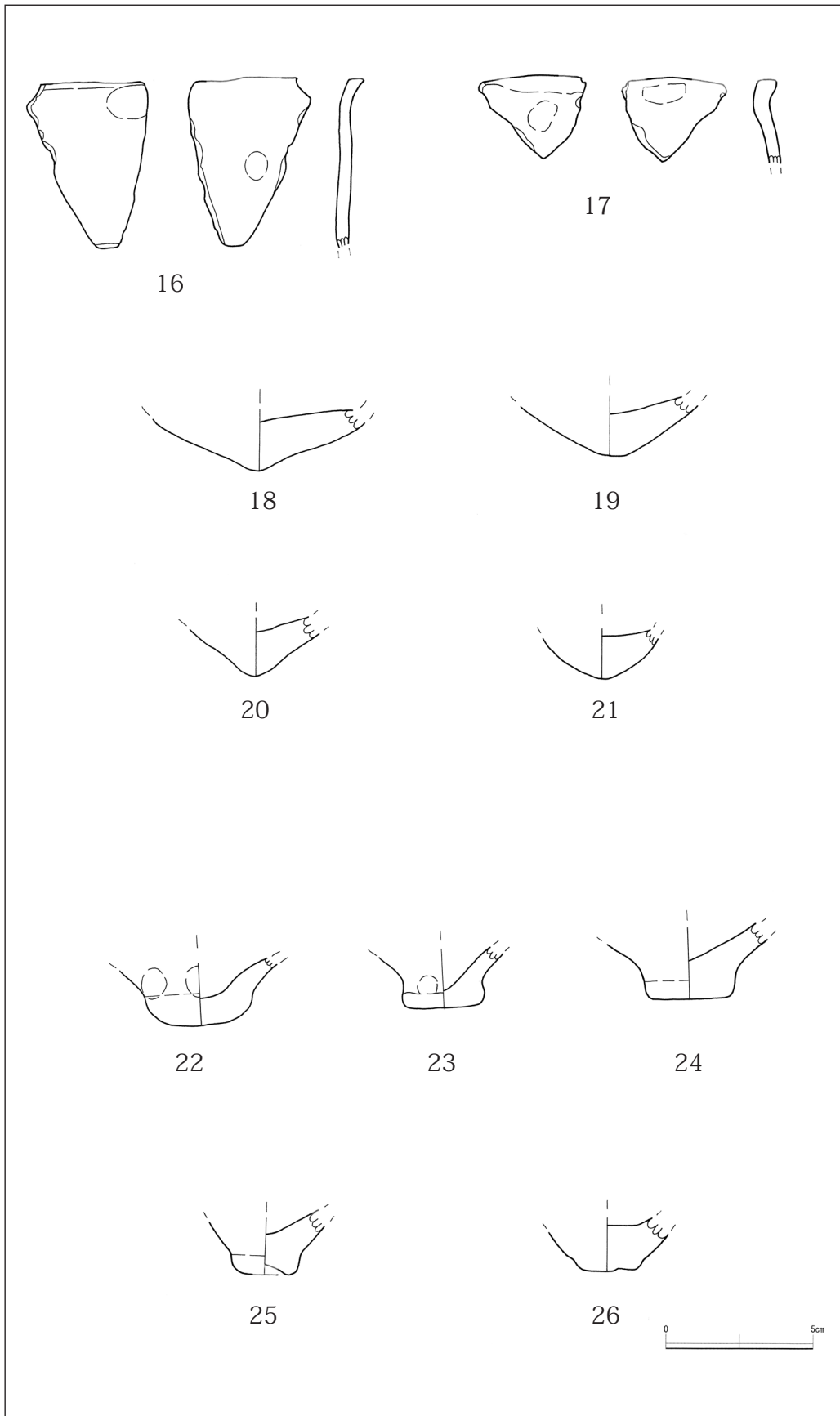
本調査区においては、地区特性の把握及び遺物包含層の有無を含めた状況確認を目的に調査を行った。その結果、調査区において遺物包含層、遺構（貝溜り）が確認され、少なくとも今回の調査地点周辺までは遺跡が広がることを確認することができた。但し、隣接する西地区のよう複数の時代の文化層の重複は見られなかった。同じ北地区でも昭和50年調査時の「北区Ⅱトレンチ」では縄文時代後期の室川式土器の時期を主体とする層が確認されていることから、北地区における縄文時代後期の土層は部分的に堆積していることが考えられる。



第6図 北地区出土土器 1 (有文資料)



第7図 北地区出土土器2 (無文口縁部)



第8図 北地区出土土器3（無文口縁部・底部）

第4表 北地区出土貝集計表

貝種		出土層	I層	II層	III層	合計
二枚貝綱	シャコガイ科	シラナミ		3	24	27
		ヒメジャコ		5	40	45
		ヒレジャコ			1	1
		シャゴウ			3	3
		シャコガイ科	1	3	20	24
	チドリマス科	イソハマグリ	2	21	6	29
	イソシジミ科	リュウキュウマスオ			2	2
		マスオガイ属		3	2	5
	シジミ科	シレナシジミ		1	3	4
	ウグイスガイ科	ウグイスガイ			54	54
		アコヤガイ			1	1
		ウグイスガイ科			85	85
	イガイ科	リュウキュウヒバリ		1		1
		イガイ科			1	1
	フネガイ科	リュウキュウサルボオ			2	2
		ベニエガイ			1	1
	マルスダレガイ	ホソスジイナミ			1	1
		マルスダレガイ科			1	1
	不明二枚貝		7	6	4	17
	腹足綱	スイショウガイ科	マガキガイ	23	106	149
ムカシタモト					1	1
スイショウガイ科不明			2	1	2	5
ニシキウズ科		ニシキウズ	1			1
		サラサバティ		5	38	43
		ギンタカハマ		1	6	7
		ニシキウズ科不明		2		2
オノツノガイ科		クワノミカニモリ	1		2	3
		オノツノガイ		7	8	15
		カヤノミカニモリ			1	1
		オノツノガイ科不明		1	5	6
タカラガイ科		ヤクシマダカラ			1	1
		ホンヤクシマダカラ			1	1
		ホシダカラ			1	1
		ハナマルユキ			3	3
		ハナビラダカラ			1	1
		タカラガイ科不明	6	11	3	20
		アッキガイ科	アカイガレイシ	1	3	3
ツノレイシ		2	4	9	15	
シラクモガイ			5	4	9	
テツレイシ			8	1	9	
ツノテツレイシ			1	4	5	
ムラサキイガレイシ				2	2	
キマダライガレイシ				1	1	
ガンゼキボラ				1	1	
アッキガイ科不明				7	7	
オニコブシ科		オニコブシ	1	1	2	4
		コオニコブシ	1	17	14	32
エゾバイ科		ノシガイ	1			1
イモガイ科		マダライモ	1	1		2
		ナンヨウクロミナシ			1	1
		イモガイ科不明	13	14	6	33
オリエルフヨバイ科		ヒメオリエレムシロ			1	1
		アツムシロ			1	1
		オリエルフヨバイ科不明		1	1	2

貝種	出土層		I 層	II 層	III 層	合計
腹足綱	イトマキボラ科	チトセボラ		2		2
		ナガイトマキボラ		1		1
	リュウテン科	チョウセンサザエ		6	9	15
		チョウセンサザエ (蓋)	19	49	75	143
		コシダカサザエ		5	28	33
		ヤコウガイ			1	1
		ヤコウガイ (蓋)			2	2
	アマオブネ科	コシダカアマガイ			1	1
	マクラガイ科	アマオブネ科不明		1	3	4
		マクラガイ科不明		1	1	2
	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ			1	1
	タマガイ科	ホウシュノタマ			1	1
	ヤツシロガイ科	ウズラガイ			1	1
		スクミウズラ			1	1
		ヤツシロガイ科不明			1	1
	フジツガイ科	シオボラ			2	2
		ミツカドボラ			2	2
		ホラガイ			1	1
	ヨメガカサ科	ベッコウガサ			1	1
	ユキノカサ科	ユキノカサ科			1	1
	ヘビガイ科	ヘビガイ科			1	1
	不明巻貝		6	1		7
	陸産貝	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	1	11	1
オナジマイマイ科		バンダナマイマイ	10	38	12	60
		ウスカワマイマイ		3		3
		オキナワウスカワマイマイ	4		1	5
ヤマタニシ科		オキナワヤマタニシ	1	13	136	150
キセルガイ科		ツヤギセル		1	2	3
小 計			104	418	762	1284

第2節 南地区

試掘調査地区の概況

南地区は具志原貝塚が立地している砂丘の頂部となる地区である。本地区東側で昭和59年度に発掘調査が行われ、その際、埋葬人骨が発見された。これ以降、本地区東側以外は調査が行われたことが無く、史跡の内容（遺物包含層、遺構の広がり、本地区の特性等）は判然としていなかった。これらの状況の把握を行うため、本地区西側において試掘調査を実施した。

平成29年度は遺跡の範囲確認を主目的に試掘調査を史跡指定地内外において実施した。試掘坑は3基（試掘坑1、試掘坑3、試掘坑4）を設け、その結果、試掘坑3において人骨の一部を検出した。その際の出土人骨は頭骨、曲げた状態の右碗骨、肩甲骨の一部であり、形質的位置関係を保った状態となっていた。また、掘削、人骨検出時は遺構の有無を明確に確認することが出来なかったが、壁面において土壙断面とおぼしきラインが見えたこと、土層に攪乱の形跡が見られなかったことから出土人骨は埋葬人骨であると判断した。

平成30年度の調査では、平成29年度に出土した人骨の残存状況確認及び埋葬遺構の有無の確認のため、試掘坑3の東側に隣接して3m×6mのトレンチを1基設定し試掘調査を行った。これは平成30年度に確認された人骨が伸展した姿勢で葬られている可能性を想定した場合、3m×3mのグリッドでは埋葬遺構有無及び遺構全体の状態を確認することが出来ないことを考え、トレンチでの試掘を実施した。試掘調査の結果、遺構の有無及びそれに伴う埋葬人骨の状態を確認することができた。

遺構の調査後、遺構及び掘削面に土のう及びブルーシートによる養生を行い、調査区を埋め戻し、現状復旧を行った。

なお、本地区の地山面（マージ層、石灰岩層）に関しては、3mより深い深度にあると考えられるため、未検出である。

試掘調査時層序（第9・10図、図版12・13・16・17）

本地区における層序は、砂丘頂部への堆積であると考えられ、各層序が比較的水平に堆積している。試掘坑1においては3mまで掘り下げを行ったが、本地区の土質が砂質ということもあり、これ以上の掘削は危険と判断したため、それ以上の掘削は行わなかった。そのため、本地区においては地山層（マージ層、石灰岩層）まで達していない。

確認された各層の時期に関しては、時期が判断できる遺物が出土していないため、試掘坑3の埋葬遺構埋土以外は不明である。

以下、各試掘坑の層序について概略する。

試掘坑1

第Ⅰ層：表土層

第Ⅱ層：白砂層。

第Ⅲ層：灰色砂層

第Ⅳ層：白砂層

試掘坑3及び拡張部

第Ⅰ層：表土層。土中に現代遺物が見られる。

第Ⅱ層：白砂層。北壁においてはⅢ層を掘り込む箇所が見られた。

第Ⅲ層：灰色砂層。本層が遺構内堆積土であると可能性がある。土中より少量の土器細片が出土。

第Ⅳ層：白砂層。本層を掘り込んで埋葬遺構が形成される。

第Ⅴ層：灰色砂層。第Ⅲ層とは異なり、現在のところ人口遺物は確認されていない。

第Ⅵ層：白砂層。

試掘坑4

第Ⅰ層：表土層。

第Ⅱ層：白砂層。

第Ⅲ層：灰色砂層。

第Ⅳ層：白砂層。

第5表 南地区土層観察表

層序区分	土色・土質	土層の特徴	主な遺構・遺物	時期
I層	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	表土層。	現代遺物。	近現代
II層	灰白色砂 (5Y8/2)	白砂層。	—	近世以降?
III層	灰白色砂 (5Y7/1)	灰色砂層。本層下部から第IV層を掘りこむ形で埋葬遺構が検出される。	埋葬遺構。 土器細片、陸産具	埋葬人骨の年代測定からグスク時代の測定値が得られる。
IV層	灰白色砂 (5Y8/2)	白砂層。	—	不明
V層	灰白色砂 (5Y7/1)	灰色砂層。試掘坑3において確認。	—	不明
VI層	灰白色砂 (5Y8/2)	白色砂層。試掘坑3において確認。	—	

試掘調査時検出遺構

・埋葬遺構（第10図、図版13・14・17）

埋葬遺構は試掘坑3とその拡張部にまたがる形で検出された。埋葬遺構は第Ⅳ層を掘り込み構築された土坑墓で、平面形は楕円形となると思われる。遺構内層序は明確ではなかったが、少なくとも第Ⅲ層が埋土となると考えられる。遺構法量は長軸約1.12m、短軸約0.56m、深さ約0.135mを測るが、遺構面を人骨が確認されたレベルで確認したため、元来の本遺構が構築されたレベルは更に上部である可能性があり、また、遺構掘削を人骨検出段階に止めたため、遺構深度は多少深くなり、遺構の規模は多少広がる可能性がある。

埋葬人骨は形質人類学的位置を保っており、一次葬とと考えられる。埋葬姿勢は仰臥屈葬で、両手は曲げられ胸の上に置かれた状態となっていた。なお、右腕を先に検出、取り上げを行ったため、厳密な出土状況ではないが、右腕の方が左腕に比べ右肩に近い箇所に位置し、右手が左手より高い位置に置かれていたと思われる。下半身の姿勢に関しては、膝が曲がり、足骨は骨盤（臀部）の下部に位置していた。頭位は北西となっている。共伴する人工遺物、遺構内の炭化物は確認できず、遺構内からは埋葬人骨の他には陸産貝のみが出土している。そのため、遺物による遺構の年代観把握は出来なかったが、出土人骨から年代測定を行い、補正年代で $885 \pm 20BP$ という測定結果が得られた。また、国立科学博物館の篠田氏らの研究グループにより、下顎大臼歯を試料としたDNA分析が行われ、M7a1aのハプログループという分析結果が得られた。

人骨に関しては保存状況が良好ではなく、人骨を現地保存した状態で埋戻しを行うと土圧により人骨が破損する可能性があったことから、現地保存は行わず人骨の取り上げを行った。遺構に関しては土坑内及び土坑周辺に土のうを充填し、その上にブルーシートをかぶせて養生を行い、現地保存を試みた。

出土人骨及び年代測定の詳細に関しては第6章を参照していただきたい。

試掘調査時出土遺物

本調査区における人工遺物は、試掘坑3において少量の土器細片は確認することが出来たものの、石器、貝製品等は確認することができなかった。自然遺物に関してもシャコガイ等の海産貝、マイマイ等の陸産貝といった出土に止まっている。

人工遺物

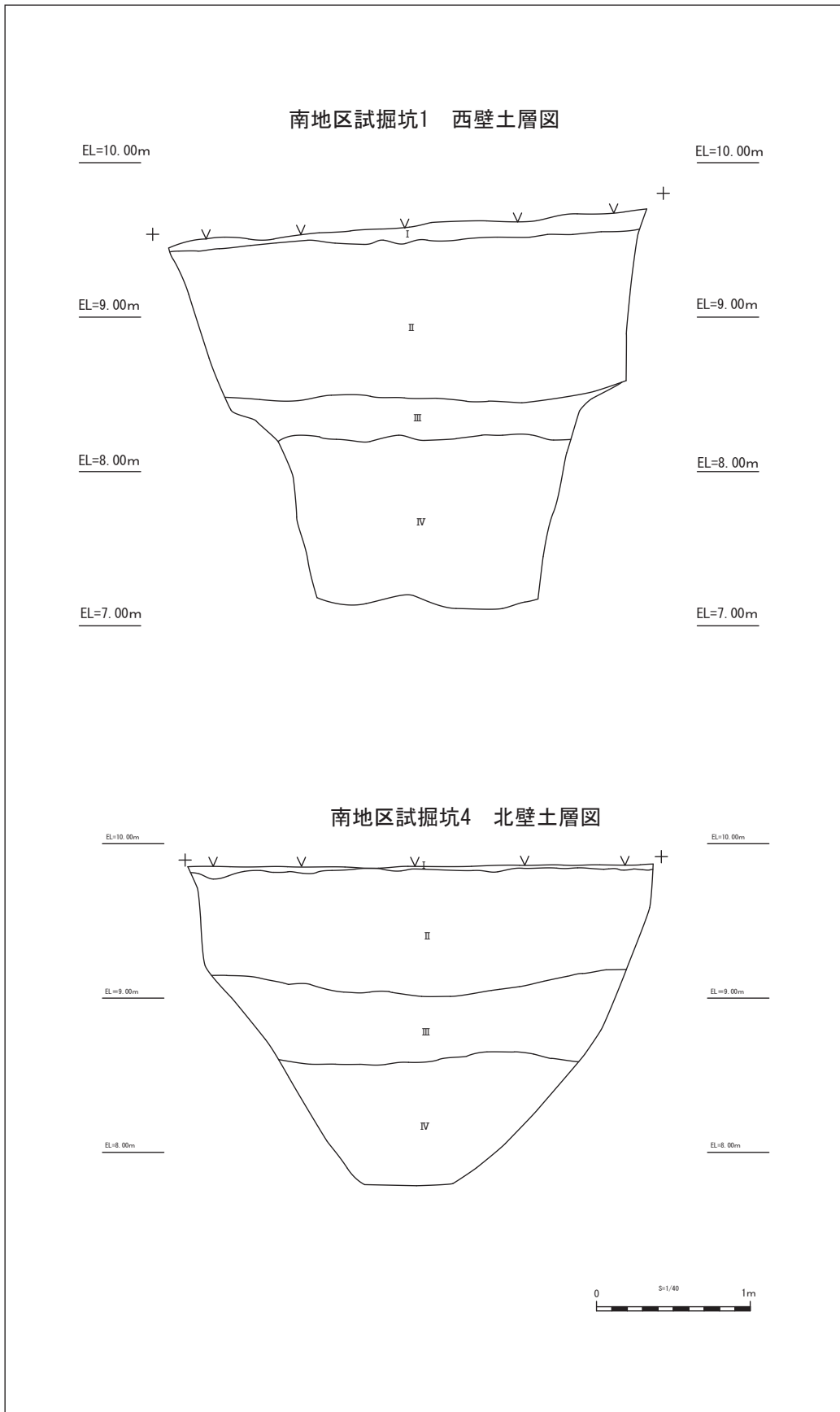
・土器

試掘坑3において1点の土器細片が確認された。本資料は無文胴部の資料となっており、実測可能な資料は得ることが出来なかった。なお、この土器細片以外の人工遺物は得ることが出来なかった。

小 結

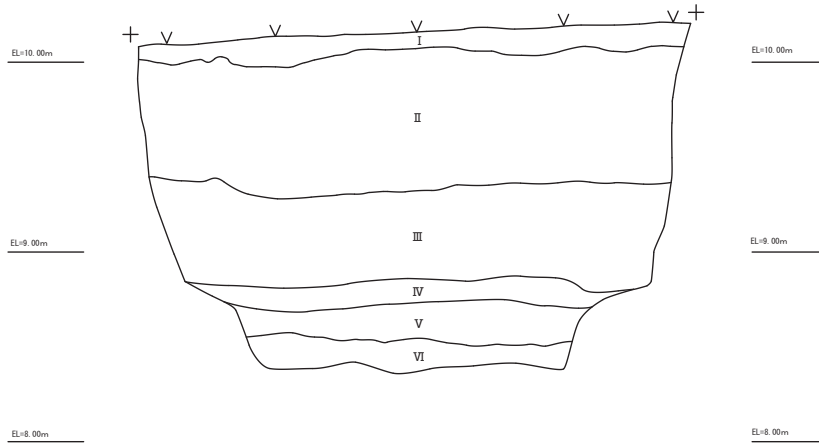
今回、南地区においては同地区の西側で遺跡の範囲及び同地区西側の内容確認を目的に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、試掘坑間の層の連続性は確認されたが、明確な遺物包含層

を確認することはできなかった。但し、埋葬遺構が第Ⅳ層を掘り込んで造られた遺構であると
考えられるため、第Ⅲ層が埋葬遺構の時期（約900年前）の文化層であると可能性がある。試掘
坑3においては平成29年度に人の頭骨及び右腕骨を確認し、平成30年度には遺構及び人骨の全体
像、埋葬姿勢等を確認することができ、遺構分布の広がりや南地区西側まで広がることを確認
することができた。昭和59年に本地区東側で発見された人骨の内1体も仰臥屈葬の可能性があり
ることが報告されており、今回の出土人骨と埋葬姿勢に共通点が見られ、同時期の遺構である可
能性も考えられる。

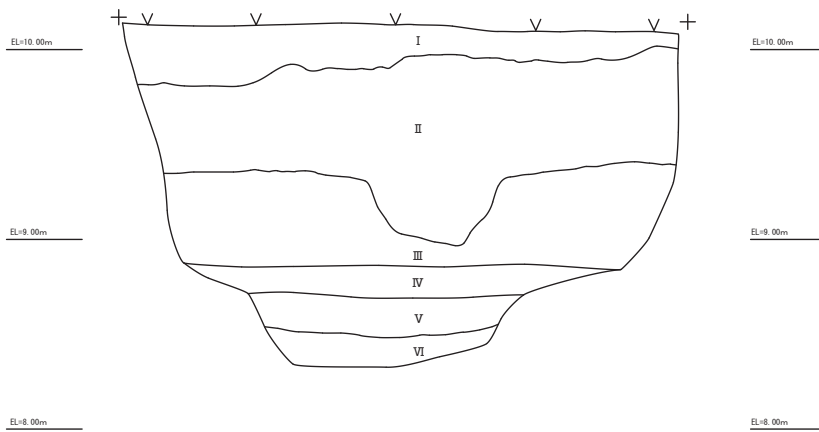


第9図 南地区試掘坑層序図（試掘坑1・試掘坑4）

南地区試掘坑3 東壁土層図



南地区試掘坑3 北壁土層図



第10図 南地区試掘坑層序図（試掘坑3）



第11図 埋葬遺構 遺構略図

第3節 東地区

試掘調査地区の概況

東地区は昭和38年、友寄氏、高宮氏らによって始めて具志原貝塚の発掘調査が行われた地区で、その際沖縄県内で初めて弥生土器（須玖式土器）が発見された。本地区は昭和49年に県の史跡に指定され、昭和61年には西地区、南地区と併せて国の史跡に指定された。

今回の試掘調査においては、本地区における遺構の有無及び層序の確認を目的とした。特に層序に関しては、昭和45年の友寄氏、高宮氏らによる本地区の二次調査ではBトレンチ最下層において赤連系土器が出土した。平成7年に沖縄県教育委員会によって行われた本地区東方の指定地外の発掘調査において縄文時代後期の包含層が確認されており、史跡指定地西地区においては縄文時代前期層が確認されている。本地区における縄文時代～古墳時代並行期の層序の有無及び状況確認を目的とした。

調査において、第Ⅵ層において貝溜りが検出された。貝溜りは調査区に占める規模が大きいことから、遺構の保存を優先し、遺構の検出作業及びその際に出土した遺物の回収を行った。遺構検出後、調査区南西隅に土層確認を目的とした試掘トレンチを設定し、掘り下げを行った結果、Ⅵ層以下の遺物包含層を確認することができた。

記録作業後、貝溜り遺構面の上に土のう、ブルーシートによる養生を行い、その後埋め戻しによる現況復旧を行った。

試掘調査時層序（第12図、図版19）

本地区では12層の土層が確認され、その内5枚の遺物包含層が確認された。遺物包含層は、第Ⅵ層～第Ⅹ層で弥生～古墳時代相当期（貝塚時代後期）層の堆積がみられた。また、第Ⅵ層以降は南壁試掘トレンチで確認された調査成果となっている。

第Ⅰ層：表土層。土質は柔らかく、現代遺物が出土する。

第Ⅱ層：白砂層。旧表土で砂質は柔らかく、崩れやすい。現代遺物が出土する。

第Ⅲ層：黒褐色砂層。焼けた痕跡が調査区一面で見られた。現代遺物が多く出土する。

第Ⅳ層：焼砂層。Ⅲ層同様に焼けた痕跡が調査区一面で見られる。赤色を帯びる。現代遺物が出土する。

第Ⅴ層：黄褐色砂層。遺物包含層へと移行する層である。現代遺物は少ない。

第Ⅵ層：黒褐色砂層。遺物包含層で、弥生～古墳時代相当期の遺物が大量に出土し、シャコガイ等貝類が多く見られた。

第Ⅶ層：暗褐色砂層。遺物包含層で、Ⅵ層に比べて大型貝類が少ない。

第Ⅷ層：灰黄褐色砂層。遺物包含層で、遺物の量は少ない。

第Ⅸ層：黒褐色砂層。遺物包含層。泥が混入する。

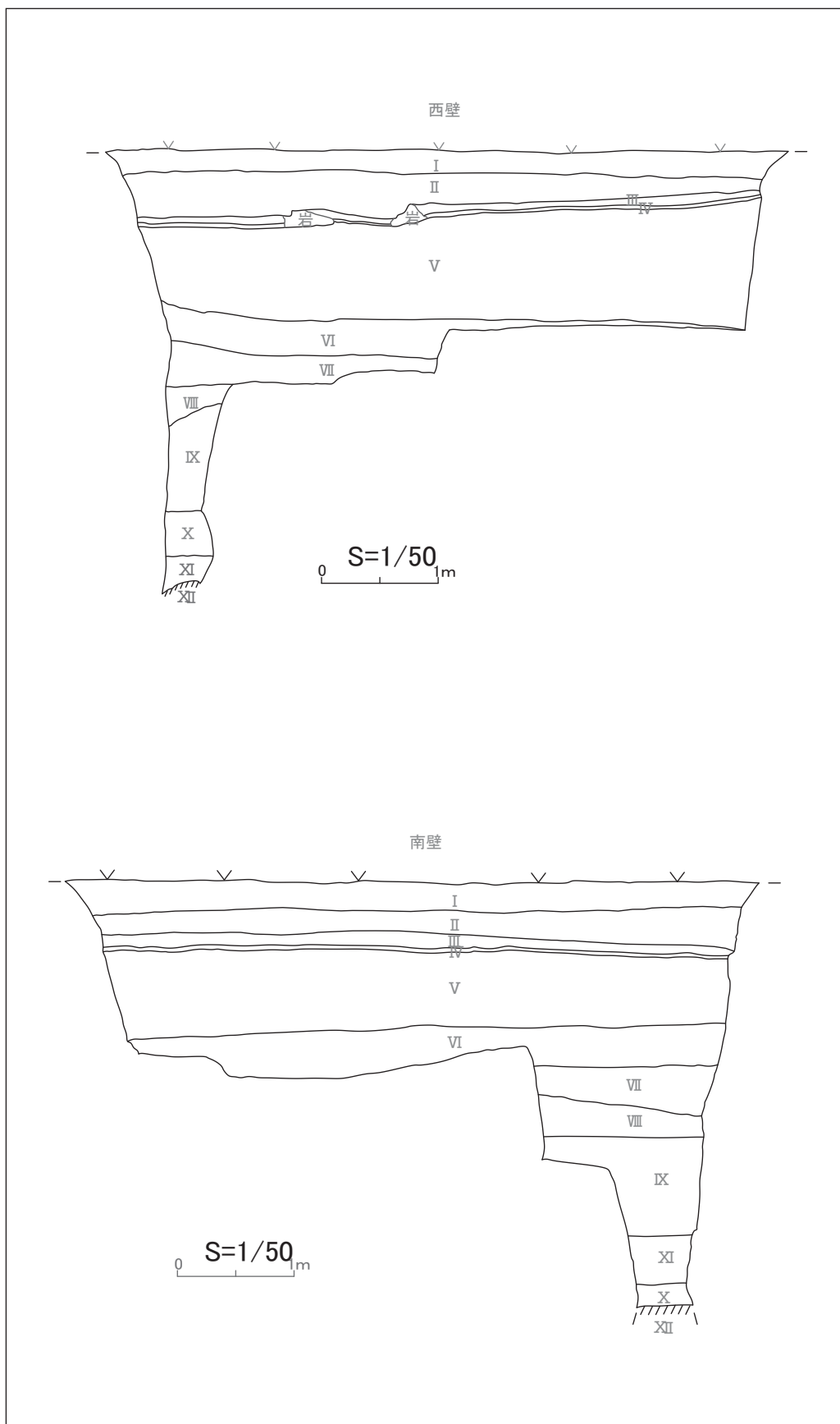
第Ⅹ層：浅黄褐色砂層。遺物包含層。乳房状尖底が出土している。

第Ⅺ層：赤褐色混土砂層。粘性が強い。遺物が出土しているが、Ⅹ層からの落ち込みの可能性がある。

第Ⅻ表：地山層。島尻マージ層で、下層では石灰岩の岩盤が露出している。

第6表 東地区土層観察表

層序区分	土色・土質	土の特徴	主な遺構・遺物	時 期
I層	褐色 (10YR4/6)	やや柔らかい。	現代遺物	近現代
II層	浅黄橙色 (10YR8/4)	とても柔らかく、 崩れやすい。	現代遺物	近現代
III層	黒褐色 (2.5Y3/1)	柔らかく、崩れや すい。灰が混ざる。	現代遺物	近現代
IV層	暗赤褐色 (5YR5/6)	柔らかく、崩れや すい。	現代遺物	近現代
V層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	しまりが良く、硬 い。	現代遺物	近現代
VI層	黒褐色 (10YR3/1)	しまりが良い。	貝だまり、土器、 石器、貝製品	弥生～古墳時代相当期 (大当原式～アカジャンガー 式期)
VII層	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	しまりが良い。	土器、自然遺物	弥生～古墳時代相当期 (大当原式～アカジャンガー 式期)
VIII層	灰黄褐色 (10YR4/2)	所によって泥が混 ざる。	土器、自然遺物	弥生～古墳時代相当期 (大当原式～アカジャンガー 式期)
IX層	黒褐色 (5YR3/1)	しまりが良い。	土器、自然遺物	弥生～古墳時代相当期 (大当原式～アカジャンガー 式期)
X層	淡黄色 (2.5Y8/4)	しまりは悪く、柔 らかい。	土器、自然遺物	弥生～古墳時代相当期 (大当原式～アカジャンガー 式期)
XI層	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	粘性が強い。	自然遺物	—
XII層	—	—	地山。石灰岩の 岩盤。	—



第12図 東地区試掘坑5層序図

試掘調査時検出遺構

貝溜り（図版20）

第Ⅵ層において、調査区の半分以上を占める範囲で貝溜りを検出した。貝溜りはいくつかのブロックに分かれると推測される。貝等遺物の密度は北側において密となり、試掘坑の中ほどから南側に行くにつれて遺物の密度が低くなっていく。

本遺構の深度に関しては、遺構の保護を優先し、遺構掘削を実施しなかったため、遺構深度は不明である。貝溜り内からはシャコガイ類、サラサバティ等の貝類の他、土器片、石器、貝製品、獣魚骨が検出された。

なお、遺構図に関しては取りまとめが不十分であったため、図版のみの報告となった。今後、改めて報告を行いたい。

試掘調査時出土遺物

人工遺物

本地区における人工遺物は、土器、石器、貝製品等が出土した。以下、代表的な出土遺物に関して概略する。

・土器

本地区の出土土器について、有文資料、無文資料、底部資料に分け、報告を行う。なお、報告を行う土器資料の法量等については観察表を参照願いたい。

有文口縁部資料

本地区の調査で得られた有文資料はその殆どが破片資料で全形を復元可能な個体はなかった。そのため文様構成を軸に分類を試みた。以下、第13図・第14図1～11に特徴的な資料を示す。

第Ⅰ群－口唇部に刻目を施すもの。

a類－口唇部に刻目のみを施したもの。

b類－口唇部に刻目、口縁部に曲線文を施したもの。

c類－口唇部に刻目、口縁部に沈線文を施したもの。

d類－口唇部に刻目、口縁部に刺突文を施したもの。

e類－口唇部に刻目、口縁部に刻目凸帯を貼付するもの。

第Ⅱ群－口縁部に凸帯を貼付するもの。

第Ⅰ群

a類

第13図1～2は口唇部に刻目を施すもので、1は口縁部がやや外反し、胴部が張らない甕形土器である。口唇部は等間隔で刻目文が施されている。2は口縁部が外反し、胴部の張らない甕形土器である。口唇部には刻目文が施されている。本資料はナガラ原東貝塚に類例が見られる。

b類

第13図3は口唇部に刻目、口縁下部に曲線文を施すものである。頸部が窄まらずに胴下半より直線状に口縁部に至る。内器面に粘土接合痕が明瞭に残る。ナガラ原東貝塚に類例が見られる。図4は注口土器で、口唇部に刻目、口縁部に山形曲線文を施すものである。口縁部は外傾し、胴部の張りは弱い。同図5はミニチュア土器で、口唇部は刻目、口縁下部に曲線文を施す。口縁部は内湾し、胴部にはくびれを有する。本分類の資料は1点のみの出土である。

c類

第13図6は口唇部に刻目、口縁下部に沈線文を施すものである。口縁部が外反し、胴部にかけて穏やかに膨らむ壺形土器である。口唇部に刻目文、口縁下部に一条の沈線文が鋸歯状に施される。

d類

第13図7は口唇部に刻目、口縁下部に刺突文を施すものである。口縁部の外反が強く、胴部が膨らむ甕形土器である。口唇部に刻目文、口縁下部に半莖竹管状の工具による刺突文が施されている。器全体の調整は徹底され、均整のとれた精製土器である。

e類

第13図8は壺形土器で、口唇部に刻目、口縁下部に刻目凸帯を施すものである。口縁部に横位の刻目凸帯を一条貼付し、凸帯上には刺突文を施す。また、刻目凸帯の上位に鋸歯状の沈線文が一条走る。

第Ⅱ群

第13図9は縦位に凸帯を貼付するものである。口縁部は外反し、頸部へと張り出す甕形土器で、縦位の凸帯は幅が狭い。内器面に整形時の指圧痕が残る。

有文頸部資料

第13図10は壺形土器の有文頸部片である。外器面に二条一組の波状文、間を一条の直線文で区画し、その下に二条一組の刺突文が施されている。内器面は剥落している。同図11は壺形の有文頸部片で、横位に刻目凸帯を一条貼付する。刻目凸帯の上位には縦位の二条一組、斜位の沈線文を一条施文する。内器面に器面調整による指圧痕が残っている。

無文口縁部資料

本区の調査で得られた無文口縁部資料は土器の多くが破片資料であるため、器形を復元できるものは少ない。よって北地区の分類と同様に、口唇部の形状や口縁の傾きを軸に分類を試みた。以下、特徴的な資料を第15図12～22に示す。

第Ⅰ群－口唇部が舌状のグループ

a類－口縁部が直口する深鉢形のもの。

b類－口縁部が外反する甕形のもの。

第Ⅱ群－口唇部が平坦なグループ

a類－口縁部が外反する甕形のもの。

第Ⅰ群

a類

第15図12～15は口唇部が舌状をなし、垂直に胴部に至る鉢形土器である。同図12は口唇部が丸みを帯びており、内外の器面に整形時のナデ痕や指圧痕が明瞭に残る。同図13は口縁部が外傾し、直状的に胴部に至る器形で、外器面に指圧調整、内器面はナデ調整がされている。器面はポーラス状に近い。同図14は小孔を有する口縁部で、やや外傾する。口縁下部の孔は焼成後穿孔されているため、補修孔と思われる。同図15は口縁部がやや外傾し、胴部が張らない鉢形土器である。内外面に整形時の指圧痕が明瞭に残る。本資料は他の土器と比べ重量が軽く約12gを測る。本資料以外にも小破片ではあるが、数点確認することができた。

b類

第15図16は口唇部が舌状をなし、口縁部が外反して胴部が膨らむ甕形土器である。内外面は丁寧にナデ調整され、内面は器面調整による指圧痕が残る。

第Ⅱ群

a類

第16図17～22は口唇部が平坦をなし、口縁部が外反する甕形土器である。同図17はいわゆる具志原式土器の資料で口縁部が外反し、胴上部は僅かに膨らむ。器面全体に調整時のナデ痕や指圧痕が明瞭に残り、やや粗雑に製作されている印象をうける。同図18は口縁部が外反し、胴部にかけての膨らみは弱い。内外面に器面調整時の指圧痕が残る。同図19は口縁部上端が外に張り出し、胴部にかけて膨らむ器形で、内外面はナデ調整痕が残る。同図20は19と同一個体の可能性がある資料で、外面に器面調整による条痕、内面に整形時の指圧痕が明瞭に残る。同図21は口縁部が外に張り出し、胴部はやや膨らむ。内器面は器面調整による条痕が明瞭に残る。同図22は口縁部上端が外に張り出し、胴部が僅かに膨らむ甕形土器である。

底 部

本区の調査で得られた底部資料はいわゆる後期土器に属している。丸底・尖底・乳房状尖底・くびれ平底の4種に分けられ、くびれ平底が主体を占める。以下、特徴的な資料を第17図23～32に示す。

第Ⅰ群－丸底

第17図23は丸底で、緩やかにカーブしながら胴部へと立ち上がる。

第Ⅱ群－尖底

第17図24は尖底資料で、底部から胴部にかけての開きが大きい。底面は丸みを呈し、器厚は厚手で重量感がある。図25は尖底資料で、底面は丸みを帯び、器厚は比較的薄手である。

第Ⅲ群－乳房状尖底

第17図26は乳房状尖底で、先端は平坦に整形されている。

第Ⅳ群－くびれ平底資料で、底部が外に張り出し、底面からくびれるもの。

第Ⅳ群

第17図27～32はくびれ平底土器資料である。同図27は外底面に木葉痕を有する資料である。底部の張り出しは微弱で、底面は平坦に成形されている。木葉痕は、土器製作時に植物の葉を下に敷いた痕である。胎土中には金雲母を多量に含んでいる。本村における類例としてはナガラ原東貝塚出土の木葉痕付きのくびれ平底土器資料が見られる。同図28は底部が外に張り出し、内底面と外底面は凹んでいる。元々、製作された段階では尖底土器として作られたと思われるが、接合痕から円盤状の粘土塊に貼り付けて平底に成形されている。同図29は底部の張り出しが弱く、外底面は凹みがみられ、内底面は平坦をなす。器面は多孔質で、焼成も良く、堅緻である。同図30は底部の張り出しが弱く、外底面・内底面ともに平坦に整形されている。同図31は底部の張り出しが弱く、内底面は平坦をなし、外底面は僅かに凹んでいる。同図32は底部が外に張り出し、内外底面が凹み、上げ底状となる。本来、製作された段階では尖底器形であったが、粘土接合痕から円盤状の粘土塊に貼付け、平底に成形されている。

第7表 東地区出土土器観察表

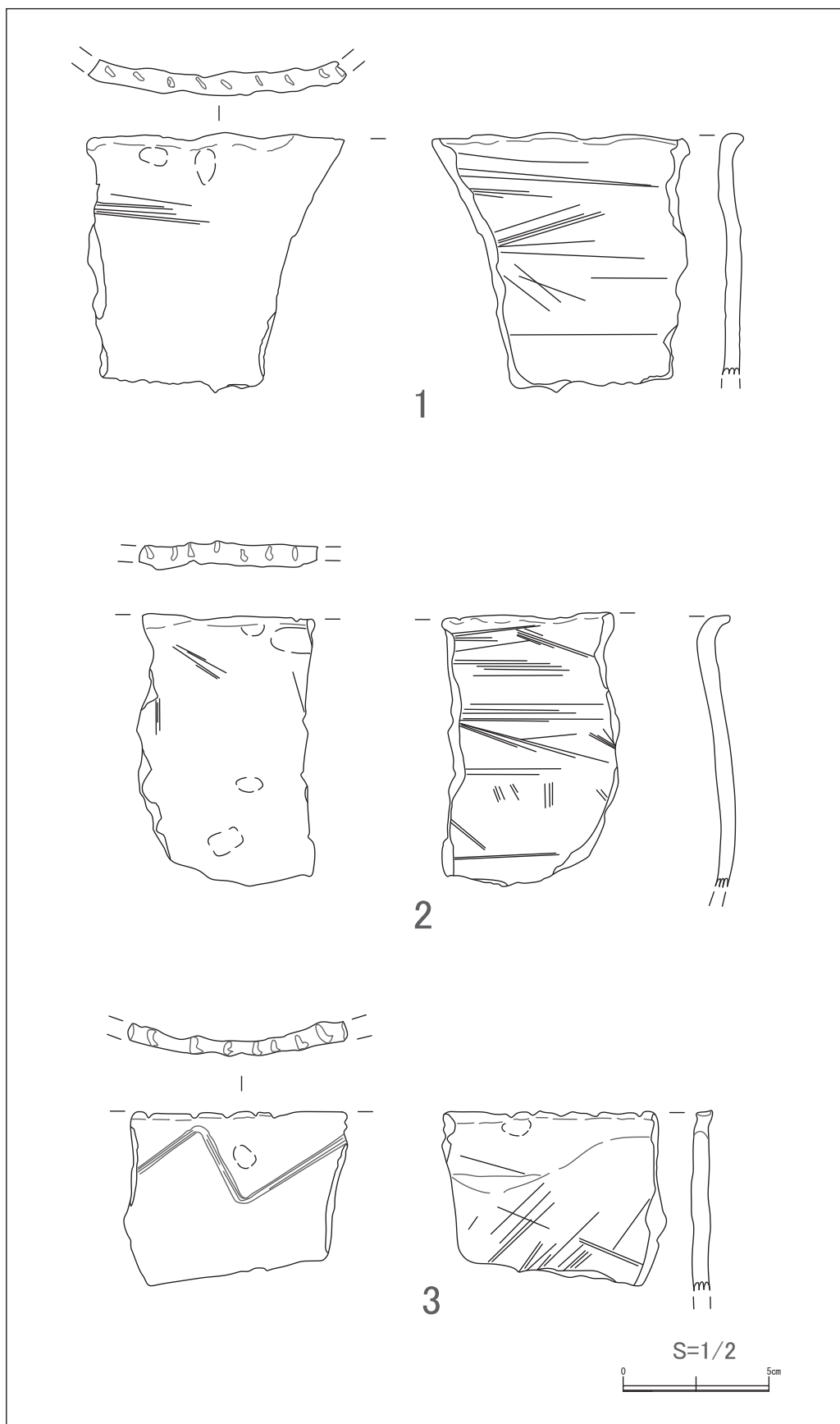
※単位は cm

図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色調	焼成	備考
第13図1 図版24	Ⅵ層	有 I a	甕形	口縁部	0.6	内外面に 条痕 内 面に指圧 痕	砂泥質/ 黒色粒	外：赤橙色 内：にぶい橙 色	堅 緻	アカジャン ガー式古段 階。
第13図2 図版24	南トレン チ Ⅵ層	有 I a	甕形	口縁部	0.6	内外面に 条痕 外 面に指圧 痕	砂泥質/ 黒色粒・ 褐色粒	内外ともに橙 色	堅 緻	アカジャン ガー式古段 階。ナガラ 原東貝塚に 類例あり。
第13図3 図版24	Ⅵ層	有 I b	甕形	口縁部	0.5	内外面に 指圧痕 内面に丁 寧なナデ 痕	砂泥質/ 砂粒・褐 色粒	外：灰黄褐色 内：橙色	堅 緻	ナガラ原東 貝塚に類例 あり。

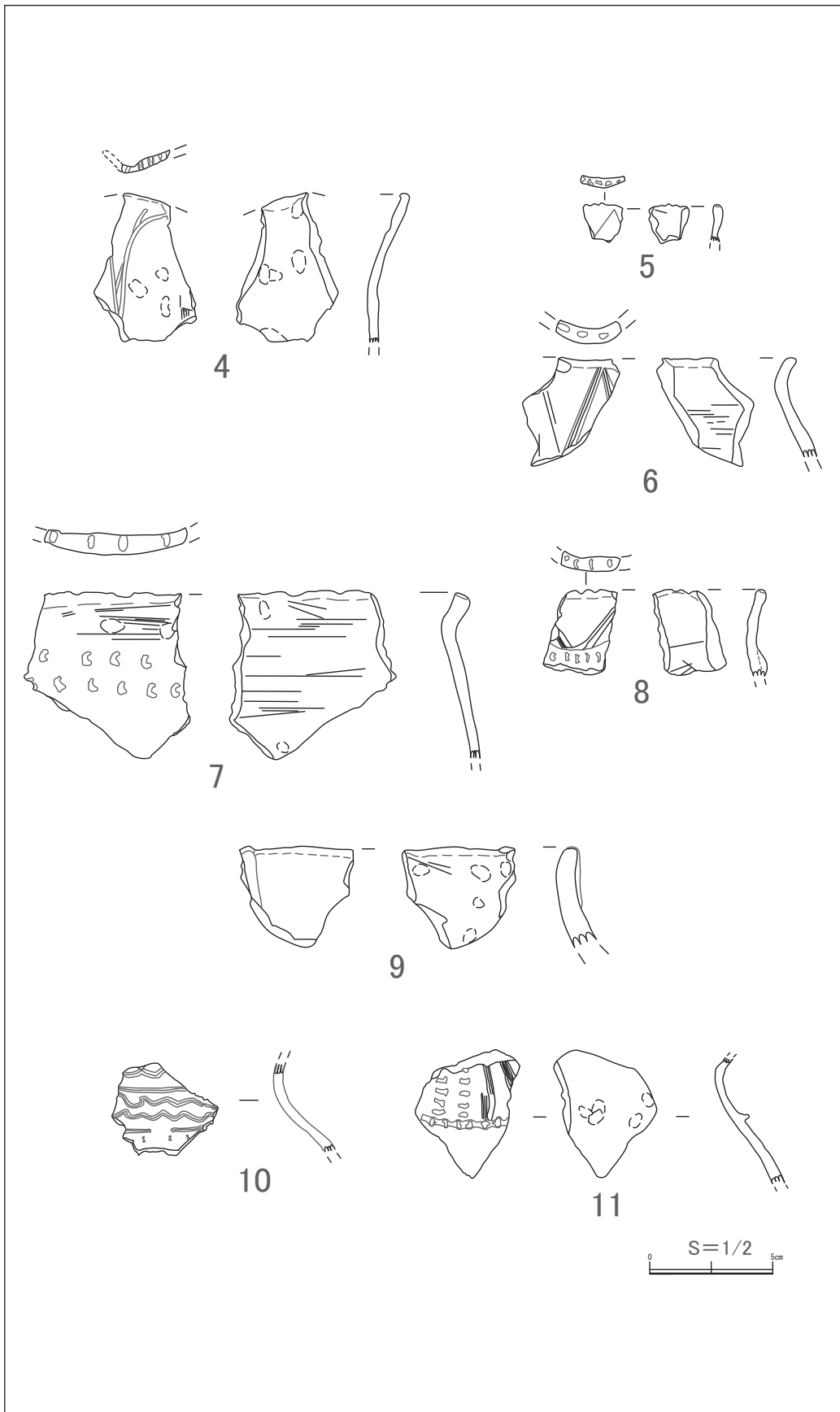
図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色 調	焼成	備考
第 14 図 4 図版 25	南トレン チ VII層	有 I b	甕形	口 縁部	0.3 ~ 0.4	内外面に 指圧痕	砂泥質/ 赤色粒・ 白色粒	外：赤色 内：赤橙色	良 好	注口土器。 アカジャン ガー式段 階？
第 14 図 5 図版 25	VI層	有 I b	小杯	口 縁部	0.4	-	砂質/黒 色粒	外：橙色 内：にぶい橙 色	良 好	アカジャン ガー式のミ ニチュア土 器。
第 14 図 6 図版 25	南トレン チ VII層	有 I c	壺形	口 縁部	0.4 ~ 0.5	内面にナ デ痕	砂泥質/ 黒色粒・ 褐色粒	外：にぶい黄 橙色 内：に ぶい橙色	良 好	アカジャン ガー式の壺。
第 14 図 7 図版 25	VI層	有 I d	甕形	口 縁部	0.3 ~ 0.6	内外面に 指圧痕や 条痕	砂質/黒 色粒・赤 色粒・砂 粒	内外ともに橙 色	堅 緻	アカジャン ガー式。
第 14 図 8 図版 25	V層	有 I e	壺形	口 縁部	0.5	-	砂泥質/ 黒色粒・ 褐色粒	内外ともに橙 色	良 好	刻目凸帯文。
第 14 図 9 図版 25	南トレン チ VII層	有 II	甕形	口 縁部	0.7 ~ 0.9	内面に指 圧痕	砂質/黒 色粒・赤 色粒・砂 粒	外：明赤褐色 内：赤黒色	堅 緻	
第 14 図 10 図版 25	南トレン チ VIII層	-	壺形	頸部	0.4	-	砂質/赤 色粒・褐 色粒	外：浅黄橙色 内：灰白色	堅 緻	アカジャン ガー式の壺。
第 14 図 11 図版 25	VI層	-	壺形	頸部	0.4	内面に指 圧痕	砂泥質/ 砂粒	内外ともに橙 色	良 好	アカジャン ガー式の壺。
第 15 図 12 図版 26	南トレン チ VII層	無 I a	深鉢形	口 縁部	0.4 ~ 0.5	内外面に 指圧痕 内面にナ デ痕	砂泥質/ 赤色粒・ 褐色粒・ 白色粒	外：赤褐色 内：明赤褐色	良 好	大当原式。
第 15 図 13 図版 26	VI層	無 I a	深鉢形	口 縁部	0.5 ~ 0.7	外面に指 圧痕 内 面にナデ 痕	砂泥質/ 褐色粒・ 白色粒	外：赤色 内：にぶい橙 色	良 好	大当原～ア カジャン ガー式の過 渡期段階。
第 15 図 14 図版 26	VI層	無 I a	深鉢形	口 縁部	0.5	内外面に 指圧痕	砂質/褐 色粒・黒 色粒・砂 粒	外：灰褐色 内：褐灰色	良 好	有孔土器。
第 15 図 15 図版 26	VI層	無 I a	鉢形	口 縁部	0.7	内外面 に指圧痕	泥質/黒 色粒・砂 粒	外：褐灰色 内：黄灰色	良 好	軽量な土器。
第 15 図 16 図版 26	VI層	無 I b	甕形	口 縁部	0.5	内外面に 丁寧なナ デ痕	砂泥質/ 黒色粒・ 白色粒・ 赤色粒	外：にぶい黄 橙色 内：橙色	堅 緻	

図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色 調	焼成	備考
第 16 図 17 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.5	内外面に 指圧痕や 条痕	砂泥質/ 石灰粒?	外: 明褐色 内: 橙色	良 好	大当原~ア カジャン ガー式の過 渡期段階。 ナガラ原東 貝塚に類例 あり。
第 16 図 18 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.3	内外面に 指圧痕	砂質/黒 色粒・赤 色粒・砂 粒	外: にぶい橙 色 内: 明赤褐色	良 好	アカジャン ガー式。
第 16 図 19 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.8 ~ 0.9	内外面に ナデ痕	砂質/黒 色粒・白 色粒	外: 橙色 内: にぶい橙 色	良 好	アカジャン ガー式段階。
第 16 図 20 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.7 ~ 0.9	内面に指 圧痕 外 面に条痕	砂質/白 色粒・黒 色粒	外: にぶい褐 色 内: 黒色	良 好	アカジャン ガー式段階。
第 16 図 21 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.4	内面に指 圧痕やナ デ痕、条痕	砂泥質/ 白色粒・ 赤色粒	内外ともに赤 色	良 好	
第 16 図 22 図版 27	VI層	無 II a	甕形	口縁部	0.5	内面に明 瞭な条痕	砂質/白 色粒・黒 色粒・褐 色粒	外: にぶい橙 色 内: 灰黄褐色	良 好	
第 17 図 23 図版 28	VI層	底 I	-	底部	0.9	-	砂泥質/ 砂粒・黒 色粒・白 色粒	外: 橙色 内: 赤橙色	良 好	丸底。
第 17 図 24 図版 28	VI層	底 II	-	底部	1	-	砂泥質/ 石灰質砂 粒・砂粒	外: 赤橙色 内: 灰褐色	良 好	砲弾状尖底。
第 17 図 25 図版 28	VI層	底 II	-	底部	0.6	-	砂泥質/ 砂粒・黒 色粒・褐 色粒	内外ともにに ぶい橙色	良 好	砲弾状尖底。
第 17 図 26 図版 28	南トレン チ X層	底 III	-	底部	2	-	砂質/黒 色粒・白 色粒	外: 黒色 内: 橙色	良 好	乳房状尖底。
第 17 図 27 図版 28	VI層	底 IV	甕形	底部	0.6	外面にナ デ痕	砂質/金 雲母	外: 褐灰色 内: 浅黄橙色	良 好	くびれ平底。 木葉痕あり。
第 17 図 28 図版 28	南トレン チ VI層	底 IV	甕形	底部	0.6	内面に指 圧痕	砂泥質/ 白色粒・ 赤色粒・ 黄橙色粒	内外ともに赤 橙色	良 好	くびれ平底。 大当原~ア カジャン ガー式の過 渡期段階。

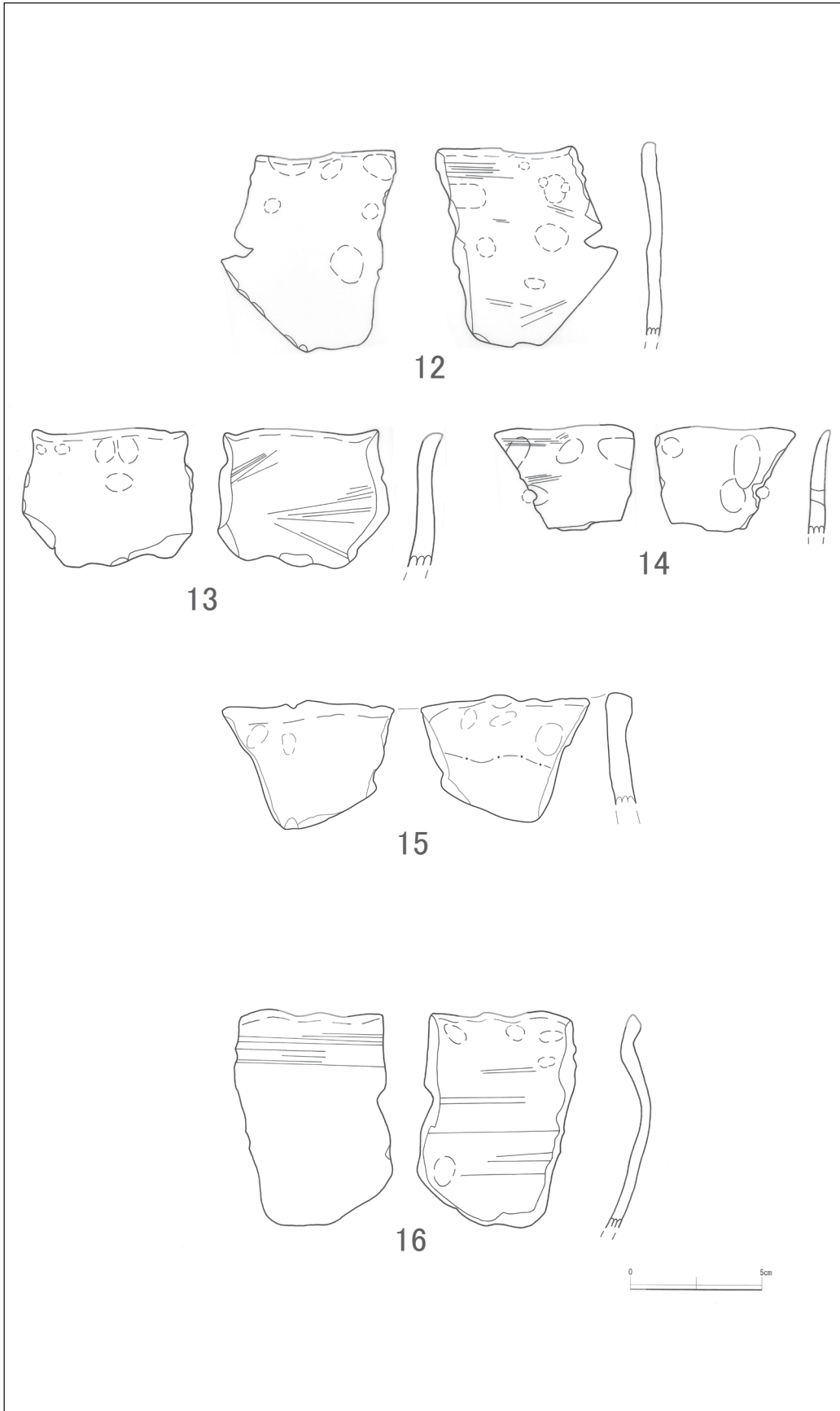
図番号 図版番号	出土層	分類	器種	部位	器厚	器面調整	胎土/ 混和材	色 調	焼成	備考
第 17 図 29 図版 28	VI層上	底 IV	甕形	底部	1	内外面に 指圧痕、ナ デ痕	砂泥質/ 黒色粒	外：橙色 内：浅黄橙色	堅 緻	くびれ平底。
第 17 図 30 図版 28	VI層	底 IV	甕形	底部	0.7	内外面に 指圧痕、ナ デ痕	砂泥質/ 砂粒・黒 色粒・褐 色粒	内外ともに赤 橙色	良 好	くびれ平底。
第 17 図 31 図版 28	VI層	底 IV	甕形	底部	0.5	外面に指 圧痕 内 面にナデ 痕	砂泥質/ 黒色粒	内外ともに橙 色	良 好	くびれ平底。
第 17 図 32 図版 28	VI層	底 IV	甕形	底部	0.8	外面に指 圧痕 内 面にナデ 痕	砂泥質/ 白色粒	外：赤色 内：赤橙色	良 好	くびれ平底。



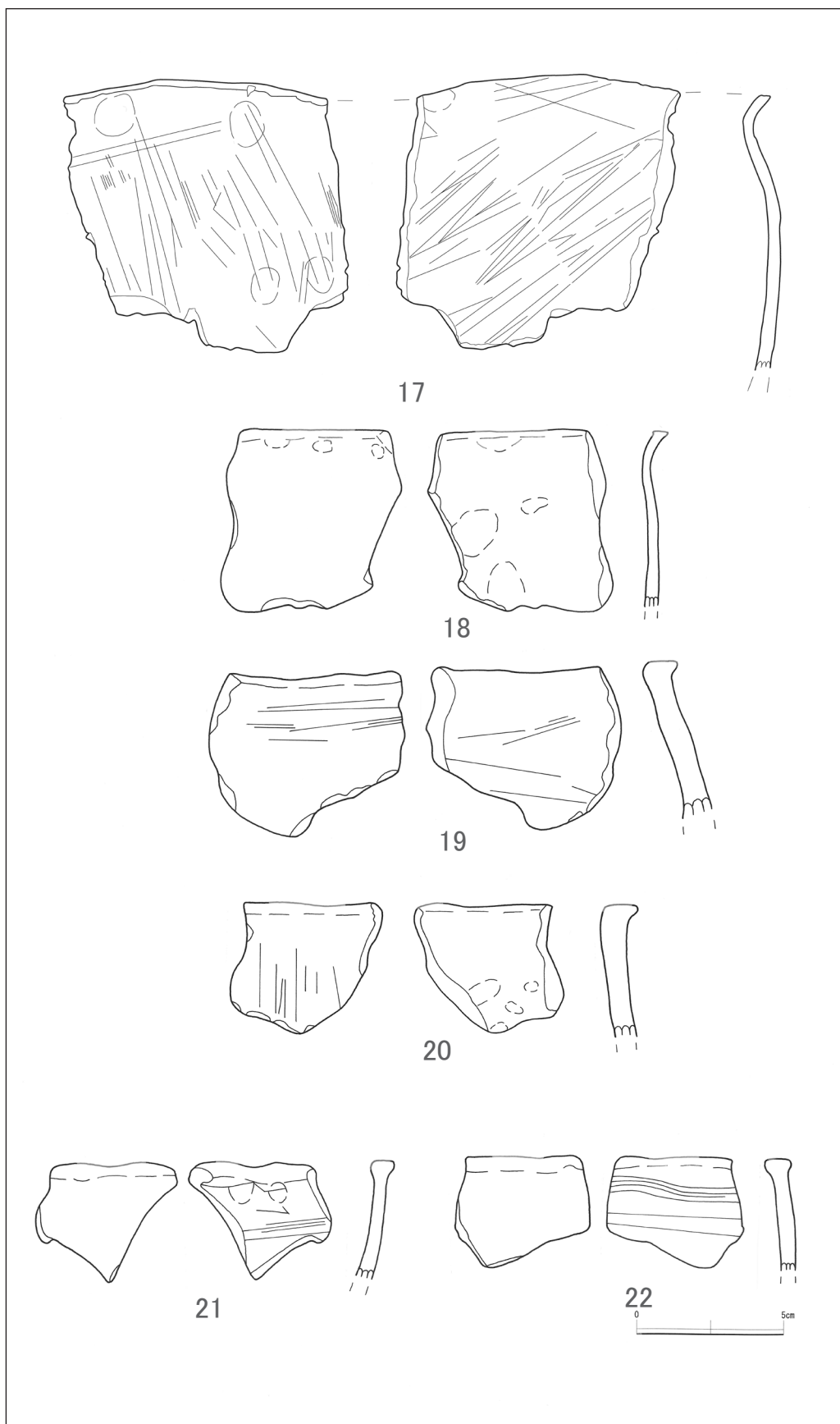
第13図 東地区出土土器1 (有文資料)



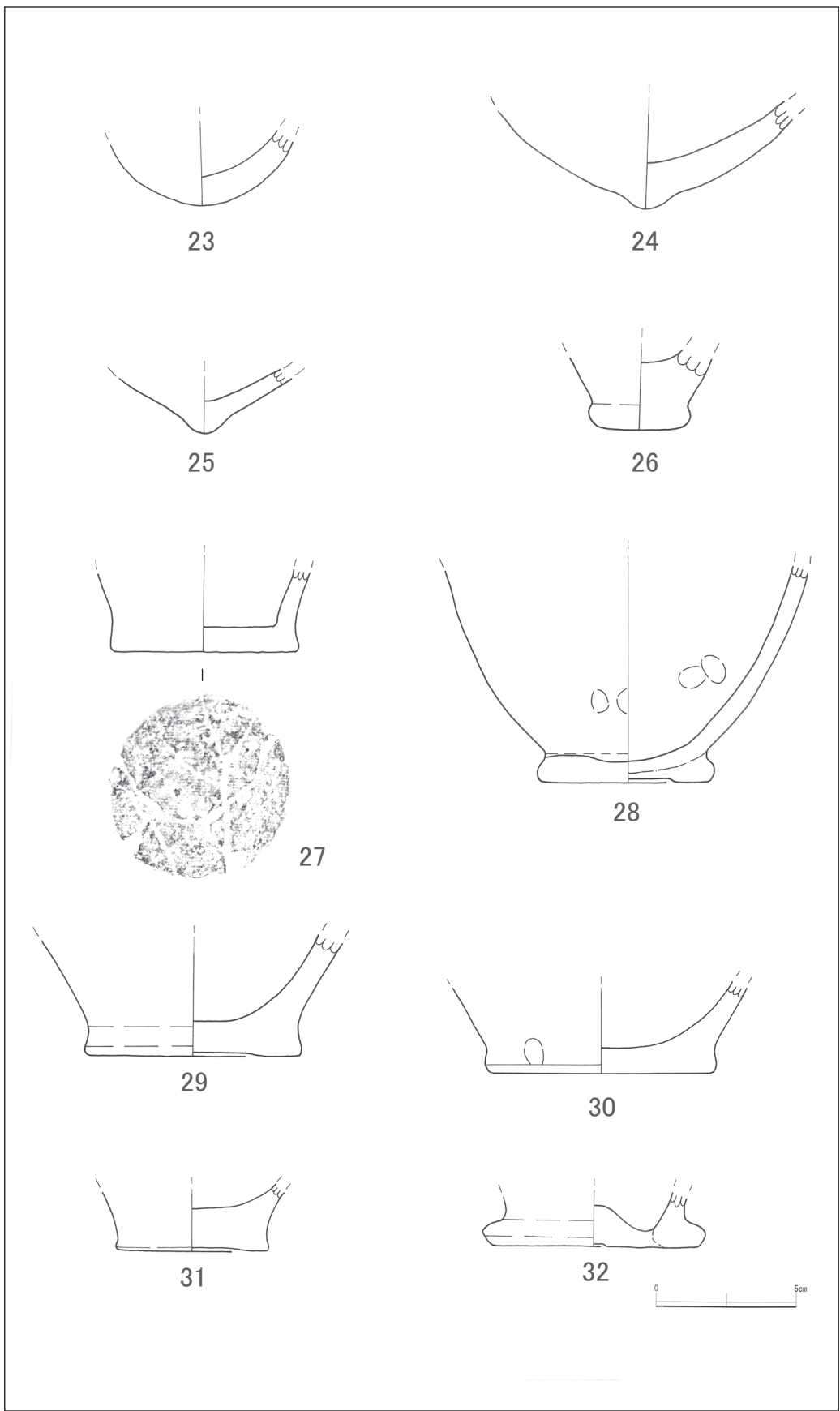
第14図 東地区出土土器2 (有文資料)



第15図 東地区出土土器3（無文土器口縁部）



第16図 東地区出土土器4（無文土器口縁部）



第17図 東地区出土土器5 (底部)

・石器・石製品

本地区出土の石器は、敲石・磨石・石皿が出土したが、数量に関しては少数であった。以下、代表的な遺物の詳細について記載する。

敲 石

第18図1は棒状の形状をした敲石である。硬質な砂岩を利用している。上下端部が使用面となっており、基部中央は手で握りやすいよう敲打により調整されている。同様な形状をした敲石は本遺跡指定地外の調査の際（沖縄県教育委員会 1997）に類例が見られる。長軸18.3cm、短軸5.7cm、厚さ4.3cm、重量758gを測る。

磨 石

第19図1はチャート礫を用いた磨石である。下端部のみが使用部位となっており、そこに磨面を有する。長軸9.2cm、短軸7.0cm、厚さ6.9cm、重量531gを測る。

石 皿

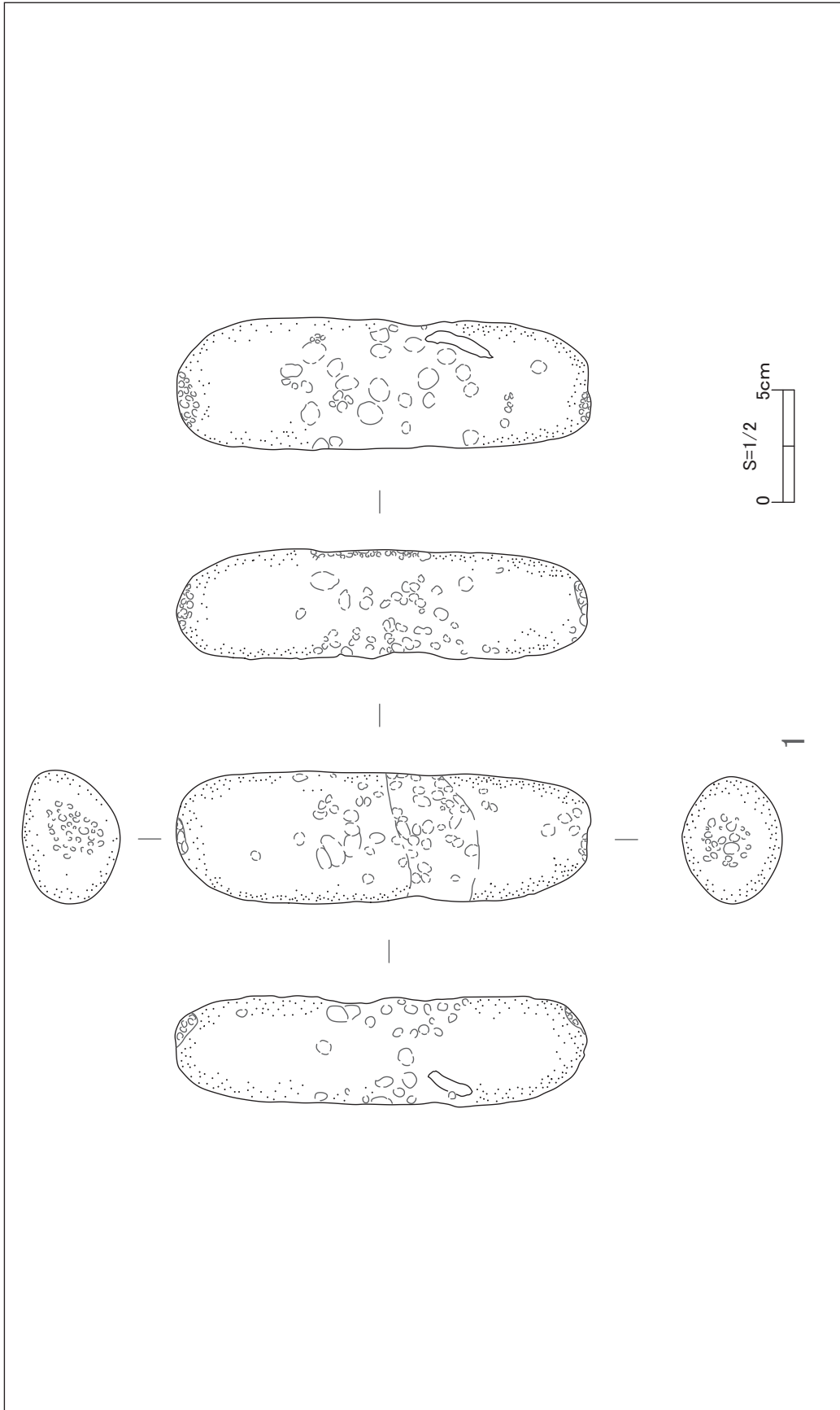
第19図2は石皿の破片資料で、原形は判然としない。使用面は表面のみにみられ、残存部の右寄りに使用による磨面が確認できる。石材は砂岩を使用している。長軸15.5cm、短軸6.0cm、厚さ3.3cm、重量422gを測る。

第20図1は石皿の破損資料で、本来の形状は判然としない。使用面は一面のみで、研磨の痕跡が確認できる。平坦な磨面をもつ。周縁部は敲打整形等がみられず、自然面となっている。本資料は砂岩の自然礫を利用したもので、微小な巻貝が付着している。長軸24.1cm、短軸17.6cm、厚さ10.9cm、重量3,500gを測る。

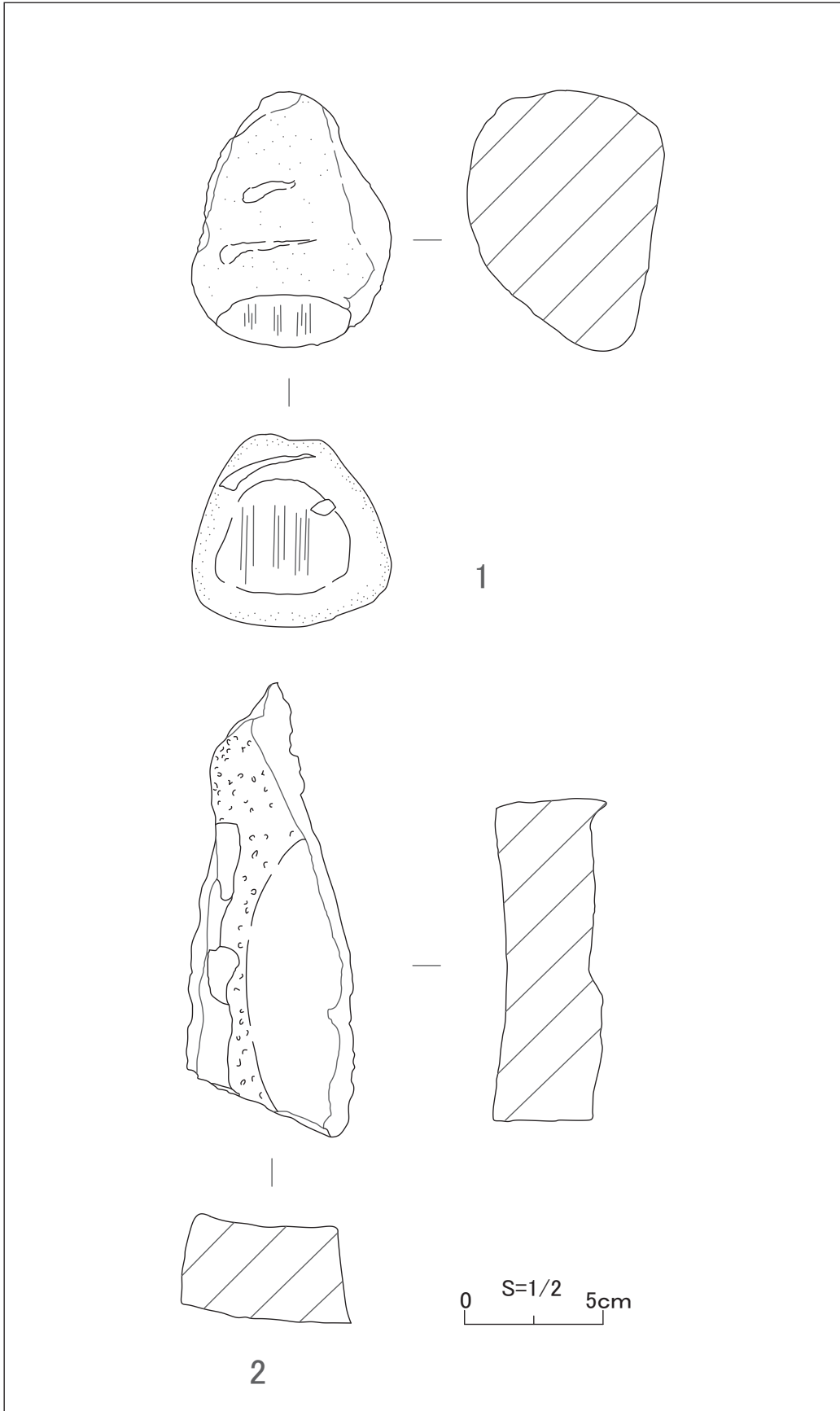
第8表 東地区出土石器観察表

※単位は cm、g

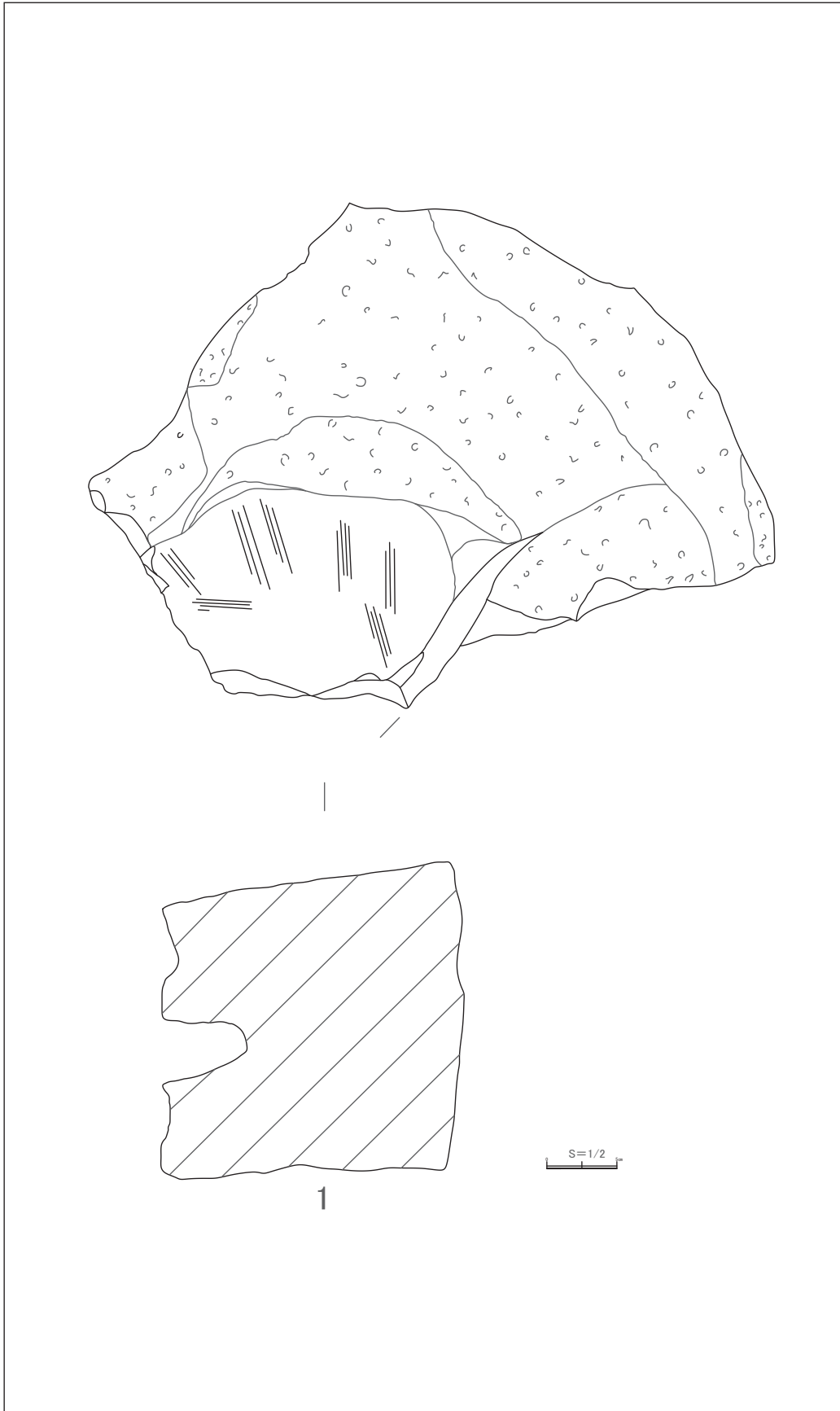
図番号 図版番号	出土 層位	種別	石質	長さ	幅	厚さ	重量	特 記 事 項
第18図1 図版30	Ⅵ層	敲石	砂岩	18.3	5.7	4.3	758	両端部に敲打痕有り。
第19図1 図版32	Ⅵ層	磨石	チャート	9.2	7.0	6.9	531	
第19図2 図版31	Ⅵ層	石皿	砂岩	15.5	6.0	3.3	422	
第20図1 図版31	Ⅵ層	石皿	砂岩	17.6	24.1	10.9	3500	



第18図 東地区出土石器1 (敲石)



第19図 東地区出土石器2（磨石・石皿）



第20図 東地区出土石器3 (石皿)

・貝製品

貝製品は貝錘、貝刃、螺貝製貝斧、貝符などが出土しており、これまでの調査で得られた器種と同様である印象を受ける。

貝 符

今回の調査において有文具符2点、無文資料もしくは未成品と思われるものが2点出土している。

第23図1は平面形略台形を呈する資料で、表面に文様が施されている。長軸3.9cm、短軸2.1cm、厚さ0.2~0.3cmを測る。

第23図2は1他の製品とは形状が異なり、微弱な弧状を有する形状の製品である。表面には双眼状の文様が施される。長軸4.8cm、短軸1.0cm、厚さ0.4~0.13cmを測る。

第23図3と4は無文資料もしくは未製品となる資料である。3は無文と思われる資料の内の1点で、1面にえぐりが見られる。えぐりを有しない3面には研磨による成形がなされているが、えぐりを有する面には成形の痕跡が見られない。長軸3.75cm、短軸1.5cm、厚さ0.3cmを測る。

第24図4も無文資料と思われる製品であるが、このことから、本製品は未製品の可能性を捨てきれない。また、それ以外にも表面に工具による痕跡が見られた。逆に内面はあまり調整が施されておらず、研磨痕が見られた。長軸4.1cm、短軸2.0cm、厚さ0.4~0.21cmを測る。

パイプユニ製品

パイプユニ製品は玉製品とその未製品が出土している。

第21図1は管珠状に加工された製品である。孔は中ほどややすぼまっており、同図3の未成品で見られる孔の空け方を考慮すると両端から孔を穿った可能性がある。長軸1.3cm、短軸1.0cm、孔径0.4cmを測る。南壁試掘トレンチ内Ⅶ層より出土。

同図2は玉製品の破損品と思われるが、1のような管珠状の製品ではなく白玉状である可能性も否定できない。長軸1.1cm、短軸0.5cm、孔径0.45~0.2cmを測る。Ⅵ層貝塚検出時に出土。

同図3は管珠状製品の未成品と思われる資料である。両端に孔があり、中程に行くほど孔が窄まる。長軸1.8cm、短軸1.1cm、孔径0.55~0.2cmを測る。Ⅵ層貝塚検出時に出土。

・ガラス製品

今回の試掘調査において、東地区Ⅷ層よりガラス小玉の破損資料が3点、6mm、2mm、1mmメッシュのフルイ掛けを行った際に出土した。いずれも水色の色調を持つ小玉資料となっている。3点の内、図化に耐えうる資料は1点のみであったため、残りの2点に関しては写真等にて報告を行う。

第22図1は、南壁試掘トレンチ内の第Ⅵ層より出土したガラス小玉で、およそ半分程度が残存している。直径0.25cm、厚さ0.18cm、孔の径約0.12cmを測る。

図版35に示した残り2点の資料（図版35の2・3）は第Ⅷ層より出土したガラス小玉である。2の資料は3分の1程度残存しているものの摩耗が著しい。厚さ約0.3cmを測る。3の資料は5分の1程度が残存している資料である。厚さ0.2cm、重量を測る。

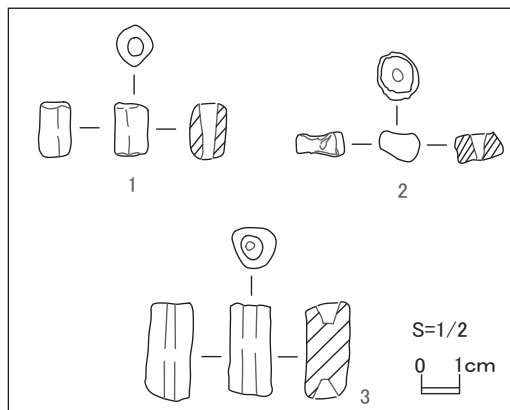
自然遺物

・貝類

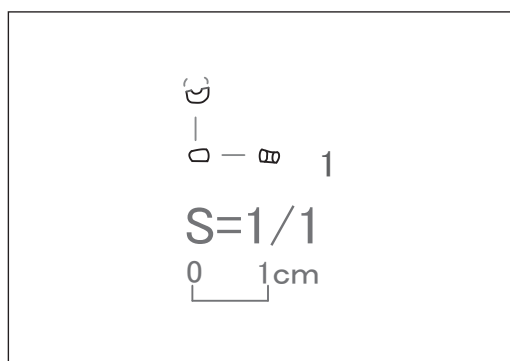
貝類は調査区全体からピックアップ法で得られた資料とフルイがけによって得られた資料である。具体本試掘杭から出土した貝類は二枚貝網で15科40種、腹足網で25科130種、陸産貝で8種を数える。出土貝類の種、個数に関しては、第9表を参照していただきたい。

各層のうち、遺物包含層である第Ⅵ層より多くの貝類が出土した。第Ⅵ層出土貝類のうち、比較的個数が多い貝類は、腹足網ではアマオブネ類、マガキガイ、サラサバティ、ヤコウガイ等、二枚貝網ではシラナミ、ヒレジャコ、キクザル類、リュウキュウヒバリガイ、ミドリアオイガイとなっている。陸産貝ではオキナワヤマトニシが多く出土した。

第Ⅸ層も遺物包含層ではあるが、調査区内南トレンチ内のみで確認したため調査面積が第Ⅵ層と比べ僅少であることもあり、貝類の出土点数は少ない。第Ⅸ層の出土貝種はシラナミ、シャゴウとなっている。



第21図 東地区出土パイプウニ製品



第22図 東地区出土ガラス製品

小 結

今回の試掘調査では、第Ⅵ層より貝溜りを検出することができた。

東地区における出土遺物としては、第Ⅵ層よりくびれ平底を主体とする土器、磨石等の石器類、貝錘、貝刃、貝符といった貝製品、ガラス製品（ガラス小玉）が出土した。

今回、遺構の保存を優先したため、ごく一部しか地山層まで達することが出来なかったが、今回の調査箇所において弥生～平安並行期層は確認することが出来た。が、過去の調査で確認された縄文時代前期（室川下層式土器）層、隣接する指定地外区で確認された縄文時代後期層は確認することが出来なかった。このことから、本地区における縄文時代層は全体的に広がっておらず、局所的に分布している可能性がある出てきた。

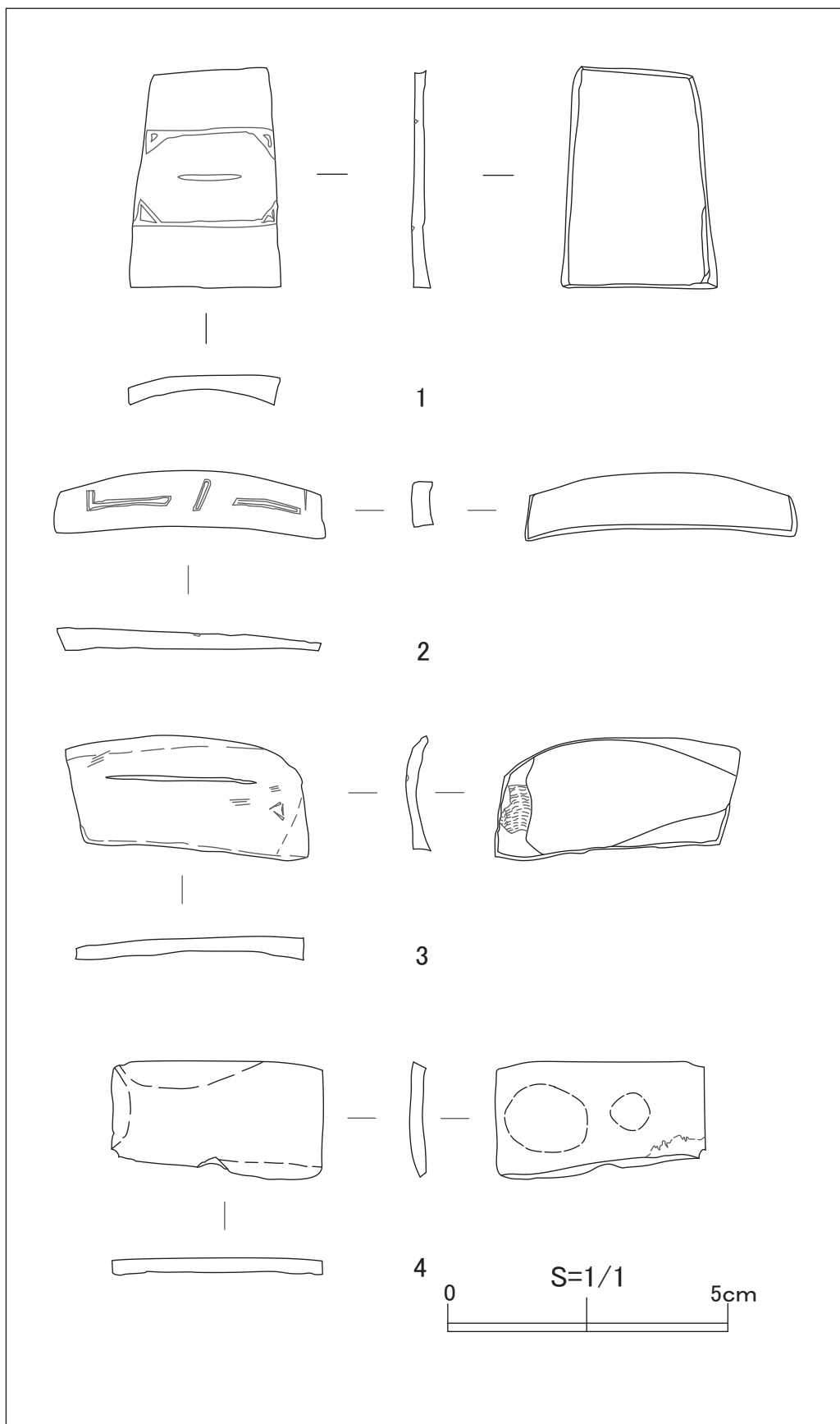
東地区の出土土器は、有文資料では口唇部に刻目を有する有文Ⅰ群、凸帯文を有する有文Ⅱ群と整理した。有文Ⅰ・Ⅱ群ともアカジャンガー式土器に比定できる資料である。無文資料では口唇部が舌状を呈する無文Ⅰ群、口唇部が平坦な無文Ⅱ群に整理し、無文Ⅰ群は大当原式～アカジャンガー式土器段階、無文Ⅱ群はアカジャンガー式土器の範疇に入る。底部は、丸底Ⅰ群（大当原式土器）、尖底Ⅱ群（大当原式土器）、乳房状尖底Ⅲ群（大当原式土器）、くびれ平底Ⅳ群（大当原式～アカジャンガー式土器段階）に整理した。以上のことをふまえると、尖底土器群から過渡期段階、そして平底土器群成立期の時期に相当すると考えられる。

石器に関しては敲石、磨石、石皿といった器種が出土したが、遺物点数がかなり少ない印象

を受けた。貝製品は貝錘、貝符、パイプウニ玉製品等が出土した。出土した貝符は広田上層式貝符の範疇に入る資料となっている。この他、少数ではあるが、ガラス小玉を確認することができた。以前行われた調査で出土例同様、移入品である可能性が高い。

参考文献

- ・『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集 沖縄県教育委員会 1985年
- ・『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第130集 沖縄県教育委員会 1997年
- ・篠田謙一・神澤秀明・安達登・門田桓雄・土肥直美「貝塚前期を中心とした人骨のDNA分析」『沖縄考古学会2019年度研究発表会資料集 荻堂貝塚発掘調査100年 貝塚研究の新視点』 沖縄考古学会 2019年
- ・岸本竹美 「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『沖縄埋文研究1』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003年



第23図 東地区出土貝製品（貝符）

第9表 東地区試掘坑5出土貝類集計表

貝種		出土層										計		
		I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層			
二枚貝綱	シャコガイ科	シラナミ	2	5	1		43	1169			1		1221	
		オオシラナミ						4					4	
		トガリシラナミ						5					5	
		ヒメジャコ					11	194					205	
		ヒレジャコ					1	17					18	
		シャゴウ					2	35			1		38	
	チドリマス科	イソハマグリ						4					4	
	イソシジミ科	リュウキュウマスオ					1	17					18	
		マスオガイ属						5					5	
	シジミ科	シレナシジミ					3	26					29	
		シジミ類					1						1	
	ウグイスガイ科	アコヤガイ						84					84	
		クロチョウガイ						13					13	
		ミドリアオリガイ					1	139					140	
		ウグイスガイ科						3					3	
		イガイ科	リュウキュウヒバリ	4		1		1	196					202
	フネガイ科	リュウキュウサルボオ					2	8					10	
		エガイ						28					28	
		クロミノエガイ						2					2	
		ベニエガイ						5					5	
	マルスダレガイ科	ホソスジイナミ					2	16					18	
		アラスジケマンガイ						21					21	
		アラヌノメガイ						2					2	
		ダテオキシジミ						1					1	
		ヌノメガイ			1			1					2	
		マルオミナエシ					1						1	
		ハマグリ類						1					1	
	キクザル科	カネツケザル					1	28					29	
		キクザル類					18	245					263	
	ツキガイ科	クチベニツキガイ					1	2					3	
		ウラツキガイ					1						1	
		ツキガイ類					1						1	
	ウミギク科	メンガイ					2	16					18	
		タンドクメンガイ						2					2	
		ウミギク類						3					3	
	イタボガキ科	イタボガキ類					1	12					13	
	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ						1					1	
		トマヤガイ類						1					1	
	タマキガイ科	ソメワケグリ			1		1	10					12	
	バカガイ科	リュウキュウバカガイ						1					1	
	腹足綱	スイショウガイ科	マガキガイ	9	1			70	693					773
			ネジマガキガイ						1					1
			ムカシタモト						7					7
			クモガイ類					2	19					21
			クモガイ(幼貝)						2					2
			スイジガイ						4					4
			ゴホウラ						3					3
アツソデガイ							1	2					3	
イボソデガイ								2					2	
スイショウガイ科不明					1			1					2	
ニシキウズ科			ニシキウズ	1				1	20					22
		サラサバティ					32	564					596	
		サラサバティ(幼)						1					1	
		ギンタカハマ						21					21	
		ムラサキウズ						1					1	
		ベニシリダカ					1	21					22	
		ヘソアキエビス						70					70	
		オキナワイシダタミ						1					1	
		サラサダマ						5					5	
		ニシキウズ科不明						2					2	
		オニツノガイ科	クワノミカニモリ						6					6
オニツノガイ							1	34					35	
コオニツノガイ								11					11	
カヤノミカニモリ								1					1	

貝種		出土層										計	
		I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層		
腹足綱	オニツノガイ科	ヒメクワノミカニモリ					1					1	
		イワカニモリ					1					1	
		オニツノガイ科不明	1					1					2
	タカラガイ科	ヤクシマダカラ					2	18					20
		ホンヤクシマダカラ					2	38					40
		ホシダカラ						7					7
		ヒメホシダカラ						3					3
		ハナマルユキ			1		3	68					72
		ハナビラダカラ					2	31					33
		ホシキヌタ						4					4
		コモシダカラ						4					4
		ハチジョウダカラ						2					2
		ハシダカラ						2					2
		キイロダカラ					3	1					4
		タカラガイ科不明					1	12					13
		アッキガイ科	アカイガレイシ					6	222				
	ツノレイシ						4	63					67
	シラクモガイ						5	70					75
	テツレイシ		1				2	92					95
	テツレイシ?							1					1
	ツノテツレイシ						1	5					6
	ムラサキイガレイシ							7					7
	キマダライガレイシ							1					1
	ガンゼキボラ							1					1
	シロレイシダマシ							2					2
	コイワニシ							3					3
	テツボラ							3					3
	イボニシ							2					2
	シロイガレイシ							1					1
	ウネレイシダマシ?		1										1
	アッキガイ科不明							7					7
	オニコブシ科	オニコブシ					1	10					11
		コオニコブシ	3				12	144					159
	エゾバイ科	ノシガイ	1	1				1					3
	イモガイ科	マダライモ						2					2
		アンボンクロザメ						19					19
		クロフモドキ						1					1
		クロミナシ						1					1
		ヤキイモガイ						1					1
		サラサミナシ					2	7					9
		サラサモドキ					1	3					4
		ヤナギシボリイモ					2	6					8
		イボシマイモ						7					7
		ゴマフモドキ						1					1
		イボカバイモ						1					1
		ヤセイモガイ	1					7					8
		ヒラマキイモ						1					1
		サヤガタイモ						2					2
		アカシマミナシ						1					1
		ヤメギシボリイモ						1					1
		イモガイ科不明	1		1		1	9					12
	オリイレフヨバイ科	ヒメオリイレムシロ						3					3
		アツムシロ						1					1
		ヨフバイモドキ						12					12
		ヒメヨフバイ						2					2
		リュウキュウムシロ						1					1
オリイレフヨバイ科不明							1					1	
イトマキボラ科	チトセボラ						4					4	
	イトマキボラ					1	22					23	
	ヒメイトマキボラ						3					3	
	マルニシ						4					4	
	リュウキュウツノマタ						1					1	
	ムラサキツノマタ						1					1	
	ナガイトマキボラ						1					1	
	イトマキボラ科不明						1					1	
リュウテン科	チョウセンサザエ	5				5	124				134		

貝種		出土層										計	
		I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層		
腹足綱	リュウテン科	チョウセンサザエ (幼貝)					2					2	
		チョウセンサザエ (蓋)	7	2			14	143				166	
		コシダカサザエ						62				62	
		リュウテンサザエ						2				2	
		ヤコウガイ (幼貝)						1				1	
		ヤコウガイ (蓋)					1	10				11	
	アマオブネ科	コシダカアマガイ						2				2	
		アマオブネ						5				5	
		イシダタミアマオブネ					4	6234				6238	
		オキナワイシダタミアマオブネ						1				1	
		キバアマガイ					1	67				68	
		マルアマオブネ						1				1	
		ニシキアマオブネ					1	3				4	
		オオマルアマオブネ						1				1	
		フトスジアマガイ						1				1	
		マクラガイ科	マクラガイ						1				1
	サツマビナ							1				1	
	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ						1				1	
	ヘナタリ科	マドモウミニナ						3				3	
	タマガイ科	トミガイ						8				8	
		リスガイ						1				1	
		ホウシュノタマ						2				2	
	フジツガイ科	シオボラ					1	5				6	
		ミツカドボラ					1	17				18	
		シノマキ	1					5				6	
		ホラガイ						2				2	
		フジツガイ類						8				8	
	ヨメガカサ科	ベッコウガサ						2				2	
		オオベッコウガサ						1				1	
		ヨメガカサ						2				2	
		ヨメガカサ科不明						6				6	
	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ						1				1	
		カモガイ						1				1	
	オキニシ科	オキニシ		1			1	36				38	
		イワカワウネボラ						1				1	
		シロナルトボラ						1				1	
		アマガイモドキ						1				1	
	フデガイ科	イモフデガイ						1				1	
	タマキビガイ科	ホソスジウスタマキビ						96				96	
	ヒザラガイ科	ヒザラガイ類						25				25	
	フトコロガイ科	ハナマツムシ						1				1	
	ムシロガイ科	ムシロガイ類					1					1	
	陸産貝	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ					19					19
			カツレンマイマイ					1					1
		オナジマイマイ科	バンダナマイマイ						33				33
			シラユキヤマタカマイマイ						8				8
			ウスカワマイマイ						6				6
オキナワウスカワマイマイ								43				43	
ヤマタニシ科		オキナワヤマタニシ				3	474				477		
キセルガイ科		ツヤギセル					6				6		
不明貝	フタ					2					2		
フジツボ					2	113					115		
計		38	13	4	0	289	12358	0	0	2	0	12704	

具志原貝塚2018年度調査出土の動物遺体

新美倫子（名古屋大学博物館）

具志原貝塚の2018年度の発掘調査では、発掘時に目についた動物遺体を取り上げられると共に、すべての包含層が選別用サンプルとして採集された。そして、サンプルは1mm目の篩にかけて選別され、動物遺体が抽出された。これらの動物遺体のうち、ここでは貝類・ヒザラガイ類・フジツボ類以外のカニ類・ウニ類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類について報告する。

カニ類・ウニ類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類は、東地区のテストピット5と北地区のテストピット2から出土しているが、北地区出土資料はごく少量で、大部分は東地区出土であった。そこで、東地区テストピット5において、攪乱部分と間層であるI～V層を除き、VI～XI層（遺物包含層）から出土した資料の内容を報告することとした。これらの資料の所属時期は、VI層が弥生後期～古墳期初頭、VII・VIII層が弥生後期、IX・X・XI層が弥生中期に並行する時期とのことである。出土種名を表10に、魚類出土内容を表11に、爬虫類出土内容を表12に、哺乳類出土内容を表13・14に示し、以下にその内容を述べたい。

なお、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、伊江村教育委員会の玉榮飛道氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1. カニ類・ウニ類

カニ類はVI・VII・VIII層とX層でそれぞれツメの破片が少量ずつ見られた。ウニ類はVI層でパイブウニの棘が1点出土したほか、VI・VII・VIII層でそれぞれ種不明ウニの殻の破片と棘が少量ずつ見られた。

2. 魚類（第11表）

魚骨はサンプルの篩がけ選別で多量に抽出されており、ここでは前上顎骨・上顎骨・歯骨・関節骨・方骨・鰓蓋骨と鋤骨・咽頭骨を分類対象とした。椎骨や前鰓蓋骨は同定していない。分類した598点のうち6割以上の377点がVI層から出土したが、これは層によって発掘面積が異なっており、VI層の面積が最も大きく、VII層はVI層より小さく、VIII層以下ではさらに小さいことに起因する可能性もある。この点は魚類だけでなく他の動物種に関しても同様である。

最も多かったのはブダイ類で500点と魚類の大部分を占めており、次いでフェフキダイ類が35点見られ、他にベラ類17点、ハタ類11点、ハリセンボン類7点、ウツボ類？5点、クロダイ類3点、フグ類3点、ヨコシマクロダイ2点とヒメジ類・テングハギ類・サメ類各1点が出土した。ブダイ類はアオブダイ属と思われる資料が多いが、イロブダイ属と思われる資料も出土している。体長10cm程度と推測される小さな個体から50cmを超える大きなものまで、さまざまな大きさの個体が出土しており、体長30～40cm台の個体が多いが、10～20cm台の個体もかなりある。アオブダイ属と思われる資料にはナンヨウブダイによく似たものが多いが、ナガブダイ・ヒブダイに似た歯骨やキツネブダイに似た上顎骨なども見られた。フェフキダイ類のほとんどはハマフェフキによく似た資料である。体長30～50cm台の個体が多いが、10～20cm台の個体も見られた。

ベラ類はクサビベラに類似した資料がほとんどだが、シチセムスメベラによく似た前上顎骨も1点見られた。体長40cm台の資料と10cm台の小さな個体が多い。ハタ類はアカハタによく似た資料とスジアラによく似た資料が出土した。体長が40cm台の資料が多く、1m近いと思われる歯骨も見られたが、X層出土資料はすべて10cm台の小さな個体だった。ハリセンボン類は前上顎骨と歯骨が出土し、かなり大きな資料が多い。サンプル中には棘も含まれていた。ウツボ類?とした資料については、現生ウツボ標本の歯骨の歯列は1列であるが、出土歯骨3点では歯列はいずれも3列なので「?」とした。クロダイ類は体長20～40cm程度の資料である。フグ類は前上顎骨・歯骨・鰓蓋骨が見られ、いずれも大型である。ヨコシマクロダイは前上顎骨、ヒメジ類は上顎骨、テングハギ類は歯骨、サメ類は鋸歯のない歯が出土し、エイ類は同定対象外の椎骨が見られた。種不明とした資料は前上顎骨・上顎骨など12点である。

3. 爬虫類 (第12表)

312点出土しており、その多くはリクガメ類で281点見られた。この中の240点は細かく割れた背甲・腹甲破片で、うち91点は焼けた破片である。背甲・腹甲破片以外には四肢骨・寛骨が出土したが、四肢骨は骨端部が欠けた資料が多く、これらでは部位が決められなかった。他にウミガメ類は腹甲破片と指骨破片が9点見られ、ヘビ類は椎骨が22点見られた。

4. 鳥類

5点出土しており、Ⅵ層でサギ類の脛骨1点と種不明の橈骨・四肢骨中間部破片・破片が1点ずつ見られ、Ⅶ層で種不明椎骨1点が見られた。サギ類脛骨はゴイサギ現生標本よりもわずかに大きかった。

5. 哺乳類 (第13・14表)

567点出土しており、イノシシ類が422点とその大部分を占めている。他に種を同定できた資料は、ネズミ類3点・イルカ類3点・クジラ類7点であった。

イノシシ類は割れて小さな破片となった資料が多いが、Ⅸ層出土の雄成獣右下顎骨では形質を観察することができた。この下顎骨は犬歯部分から第3後臼歯部分までが残存するが、下顎連合部は残っておらずその状況は不明である。歯は第2・第3後臼歯のみが残存し、他の歯は脱落している。骨体は筆者所蔵の現生リュウキュウイノシシ標本（西表産、以下では現生標本と記載）よりかなり厚く、骨体の高さは第3後臼歯後端あたりでは現生標本とほぼ同じだが、前方では現生標本より高くなる。第2・第3後臼歯は現生標本よりかなり大きく、第2後臼歯は長さ17.3mm、最大幅12.0mm、第3後臼歯は長さ29.9mm、最大幅14.0mmであった。この資料以外では、四肢骨の成獣資料は現生標本と比較すると、ほぼ同程度の大きさの資料からかなり大きなものまで、大きさにばらつきが見られた。また、Ⅵ層出土の椎骨4点は連なった状態で出土し、うち2点は互いに癒着していた。これらは現生標本よりかなり大きく、解体痕が見られた。

ネズミ類の下顎骨と環椎は現生ドブネズミ標本よりひとまわり小さく、大腿骨は同程度の大きさだった。イルカ類は歯と尺骨・椎骨が見られ、クジラ類はすべて破片である。なお、出土

内容表に掲載した以外の資料で、VI層から保存状態の悪い長さ6cm程度の種不明骨片が1点出土している。この資料は骨質から見て哺乳類・鳥類ではないが、詳細はわからない。

第10表 出土動物種名

- | | |
|--|--|
| <p><u>I. 甲殻類</u></p> <p>1. カニ類</p> <p><u>II. ウニ類</u></p> <p>1. パイプウニ</p> <p><u>III. 魚類</u></p> <p>1. サメ類</p> <p>2. エイ類</p> <p>3. ウツボ類?</p> <p>4. ハタ類</p> <p>5. ヒメジ類</p> <p>6. クロダイ類</p> <p>7. ヨコシマクロダイ</p> <p>8. フェフキダイ類</p> <p>9. ベラ類</p> <p>10. ブダイ類</p> <p>11. テングハギ類</p> <p>12. フグ類</p> <p>13. ハリセンボン類</p> | <p><u>IV. 爬虫類</u></p> <p>1. ウミガメ類</p> <p>2. リクガメ類</p> <p>3. ヘビ類</p> <p><u>V. 鳥類</u></p> <p>1. サギ類</p> <p><u>VI. 哺乳類</u></p> <p>1. ネズミ類</p> <p>2. イノシシ類</p> <p>3. イルカ類</p> <p>4. クジラ類</p> |
|--|--|

第11表 魚類出土内容

種	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	計
ブダイ類	前上顎骨左35、右37 上顎骨左7、右8 歯骨左32、右45 関節骨左9、右3 方骨左4、右9 鰓蓋骨左2、右3 上咽頭骨左10、右9、破片41 下咽頭骨51、破片7	前上顎骨左6、右8 上顎骨左2、右5 歯骨左8、右9 関節骨左2、右1 方骨左2、右3 鰓蓋骨左1、右1 上咽頭骨右2、破片22 下咽頭骨14、破片3	前上顎骨左5、右10 上顎骨左1、右1 歯骨左10、右5 関節骨左2、右2 方骨左2、右4 鰓蓋骨右1 上咽頭骨右2、破片18 下咽頭骨14、破片5	前上顎骨左1 歯骨右1 下咽頭骨1	前上顎骨左1、右1 歯骨左2、右1 方骨左1 鰓蓋骨左1 上咽頭骨破片3、1焼 下咽頭骨3	500
フェフキダイ類	前上顎骨左4、右2 上顎骨左3、右2 歯骨左1、右3、方骨左2 関節骨左3、右1 鰓蓋骨左2、右1	方骨左1 関節骨左1	前上顎骨左1 方骨左1 鰓蓋骨左1	上顎骨右1	前上顎骨左1、右1 歯骨左2、右1	35
ベラ類	前上顎骨左1、右1、歯骨右1 上咽頭骨1、下咽頭骨6	下咽頭骨2	上咽頭骨1 下咽頭骨2		前上顎骨右1 上咽頭骨1	17
ハタ類	前上顎骨右2、歯骨右1 方骨右1、鋤骨1	上顎骨左2	鰓蓋骨右1		前上顎骨左1、右1 鋤骨1	11
ハリセンボン類	前上顎骨1、歯骨5	歯骨1				7
ウツボ類?	歯骨左2、右1 関節骨左1、右1					5
その他	クロダイ類前上顎骨右1 フグ類歯骨左1、鰓蓋骨右1 ヨコシマクロダイ前上顎骨右2 不明前上顎骨左1、右1、上顎骨左1 歯骨左1、右1、方骨右1 鰓蓋骨右1、下咽頭骨2	ヒメジ類上顎骨左1 不明鰓蓋骨右1	クロダイ類歯骨左1、方骨左1 フグ類前上顎骨右1 不明上顎骨右1		テングハギ類歯骨右1 サメ類歯1 不明前上顎骨左1	23
計	376	98	93	4	27	598

註：咽頭骨は1/2程度以上残存している資料を1点と数え、それ以下は破片として数えた。

第12表 爬虫類出土内容

種	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	XI層	計
リクガメ	背甲破片60、焼破片20 腹甲破片43、焼破片23 背甲or腹甲破片8、焼破片21 上腕骨右上1、寛骨破片10 四肢骨破片11	背甲破片11、焼破片11 腹甲破片11、焼破片3 背甲or腹甲破片1 肩甲骨+前烏口骨左4、右2 寛骨破片7、大腿骨左1 四肢骨破片4	背甲破片6、焼破片11 腹甲破片4、焼破片1 寛骨破片1	腹甲破片1	背甲破片2、焼破片1 腹甲焼破片1	腹甲破片1	281
ウミガメ	腹甲破片3	腹甲破片1	腹甲破片1、焼破片2 指骨破片1、焼破片1				9
ヘビ	椎骨9	椎骨1	椎骨7、焼1	椎骨1	椎骨3		22
計	209	57	36	2	7	1	312

註：上：近位部、焼：焼けた資料。

第13表 イノシシ類出土内容

層位	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層
部位・出土量	頭蓋骨破片2、岩様骨破片1 下顎骨右(×××m3×)C未出、P1萌出始め、難雄不明 下顎角破片1、下顎骨破片3 下左C♂破片1、右M2 1、M3萌出始め1 環椎破片1 肩甲骨左破片1、右1、1若、破片1、不明焼破片1 上腕骨左中1、右下1、中2、中破片1 橈骨左上半欠1、右下骨端のみ1若ハズレ焼 尺骨左3、上1、下1、右下1 寛骨左1、腸+恥1、右腸破片1、不明破片2 大腿骨左中2、中破片1 大腿骨右上1若ハズレなし、骨頭のみ2若ハズレ、中2 脛骨左下1若ハズレなし、骨端のみ破片1若ハズレ、中1若 右上1、1若ハズレなし、骨端のみ1若ハズレ、下3 下破片2、中2、中破片2 距骨左1、右3、踵骨左1若、右破片1、腓骨中2 膝蓋骨左1、中手足骨上3、基節骨1、側指1、中節骨2 手根足根骨3、椎骨4、破片4、焼破片2、肋骨7 四肢骨破片124、焼破片19	下顎骨破片1 下左M1 1、右I1 1、M3 1 上腕骨右中1 橈骨左上1 下骨端のみ1若ハズレ焼 右上1若ハズレなし 尺骨左1 大腿骨右中1 距骨右1 踵骨左1焼 腓骨中1一部焼 中手足骨上1、下1焼、中破片1 椎骨半欠2、1若、破片1 肋骨1 四肢骨破片14、焼破片6	頭蓋骨破片2 下左C♀1、右M2 1 臼歯破片1焼 歯破片1、焼破片2 上腕骨右中1焼 尺骨左上1焼、右1若 腓骨左下1、中1、中破片1 中手足骨上1焼、下2焼 側指1、側指上1 基節骨上骨端のみ1若ハズレ 上1焼 中節骨1焼 末節骨1焼、側指1 手足根骨1、1焼 椎骨半欠1、破片5 肋骨4、8焼 四肢骨破片30、焼破片33	側頭骨下顎関節窩部分右1 頭頂骨右破片1 後頭顆石1 下顎骨右(×欠××××M23)♂ 下顎角右破片1、下顎骨破片6 下左I1 1、右M1 1 大腿骨左中1 基節骨1 椎骨破片1 四肢骨破片2	上左C♂1 中手足骨上破片1 側指上1 側指下1焼 基節骨1、側指1 椎骨破片2 肋骨3、焼3 四肢骨破片5
計	237	41	107	18	19/422

註：I：切歯、C：犬歯、P：前臼歯、M：後臼歯、m：乳臼歯、I・P・M・mに伴う数字は歯の順番を示す。乳臼歯 m2・m3・m4はそれぞれ前臼歯P2・P3・P4に交換するとして表記した。上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。若：若獣、若のないものは成獣。腸：腸骨部分、恥：恥骨部分、焼：焼けた資料。ハズレなし：成長途中のため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。

第14表 その他の哺乳類出土内容

層位	VI層	VII層	VIII層	X層
部位・出土量	ネズミ下顎骨左1 陸獣破片16、焼破片11 イルカ歯1、尺骨右中1、椎骨1 クジラ破片5 海獣指骨1、破片7	陸獣破片10	ネズミ環椎1、大腿骨右上1 陸獣破片27、焼破片45 クジラ破片2 海獣破片1	陸獣破片4 焼破片10
計	44	10	77	14/145

註：表13参照。



動物遺体 (約 2/3)

1～3. ブダイ類前上顎骨、4. ヨコシマクロダイ前上顎骨、5. ブダイ類歯骨、6. ハリセンボン類歯骨、7. ハタ類歯骨、8～12. イノシシ類 (8. 下顎骨、9. 上腕骨、10. 橈骨、11. 尺骨、12. 寛骨)、3・10～12は左側、1・2・4・5・7～9は右側。

第6章 村内遺跡発掘調査事業（出土人骨整理・分析業務）

人骨分析結果報告

はじめに

平成29・30年度に実施された伊江村具志原貝塚の発掘調査によって出土した人骨1体について、分析結果を報告する。

資料整理の方法

取り上げた人骨の多くは非常に脆弱な状態であったため、資料の破損を避けるために水洗は実施していない。骨表面に付着した埋土の砂は、刷毛、絵筆、ブラシなどを用いて慎重に取り除き、髄腔などの骨内部を充填した砂も除去した。その後、エタノールを用いて表面を洗浄し、破片どうしの接合作業を行った。接合作業の際には、破片のさらなる破損を避けるために必要に応じて強化剤を塗布した。資料の接合及び強化作業にはBUTBAR（PVA樹脂）を使用し、アセトンで濃度を調整した。

接合の後、取り上げ時に同封されたラベルに記載された内容等の注記を行った。個々の資料は、チャック付きポリ袋へ入れて、大まかな部位ごとに分け、コンテナ内へ収納した。

骨表面の性状

骨本来の表面性状を留める箇所は少なく、全体的に小さな凹凸が無数に認められ、表面が「荒れた」状態にある。本人骨は、出土状況から見るに、遺体の軟組織が失われる前に埋める、一次葬と考えられるが、骨表面には植物の細かな根の痕跡が無数に認められ風化が著しい。

骨の遺存状況

出土状況からは資料の良好な保存が期待されたが、骨の遺存状況は劣悪なものであった。特に四肢長骨の骨端部の保存が悪く、計測に耐えうる資料は著しく少ない。

性別

人骨の形態的特徴から性別を推定する際に最も重視される寛骨は、取り上げ時に小破片となり、本来の形態を留めていないが、取り上げ前に観察することのできた右側の大坐骨切痕が幅広い形状をしていたことから、本人骨は女性と推定された。

年齢

年齢推定に用いられる方法のうち、Meindl and Lovejoy(1985)による頭骨の縫合線の癒合状況のスコアリングによる方法によれば、平均年齢51.5のスコアよりも高いスコア（フルスコアとなる21）となった。また、下顎歯に関するLovejoy（1985）による方法によれば45-55歳の段階（I）に相当する。

身長

身長推定に用いられる推定式に代入可能な四肢長骨の実測値はないが、出土状況および残存

部からの推定最大長を38.7cmとすると、Trotter(1970)の方法によれば、白人女性に用いられる推定式では、 $140.71 \pm 3.72\text{cm}$ 、黒人女性に用いられる推定式では、 $139.12 \pm 3.41\text{cm}$ となる。

形態学的な特徴

予備的な観察の結果、顕著に認められた特徴として、短頭、歯槽性突顎、歯槽の退縮、齶歯、臼歯部の根先の変形（著しい膨隆）、下肢長骨の扁平性、が挙げられる。

おわりに

本稿で報告した資料は、後に述べる年代測定結果からみても沖縄における農耕開始期の他に例をみない希少資料である。今後、貝塚時代とグスク時代の相違、ならびに、農耕の導入によりもたらされた変容、を様々な観点から議論する上で重要なものとなる。

本稿は、資料整理の概要報告に留まったが、今後、本資料の詳細な研究に基づき、貝塚時代～グスク時代の歴史的な変遷の詳細解明が期待される。

年代測定結果報告

1. 試料

分析用試料は、具志原貝塚より検出された人骨片である。1 cm以下の小片が多数あり、細かな部位等は不明であるが同一個体とされるものである。

2. 分析方法

表面を物理的に洗浄したあと、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理(0.2mol/L)、中性になるまで洗浄後凍結乾燥、粉碎、塩酸による脱灰処理(1.2mol/L)、中性になるまで洗浄後凍結乾燥、加温しゼラチン化させたものを吸引濾過、これを再び凍結乾燥させコラーゲンを得る。

試料を燃焼して二酸化炭素を発生させ、精製の後、鉄を触媒とし水素で還元してグラファイト化する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をカソードにプレスし、測定試料とする。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.,2013) である。

3. 結果

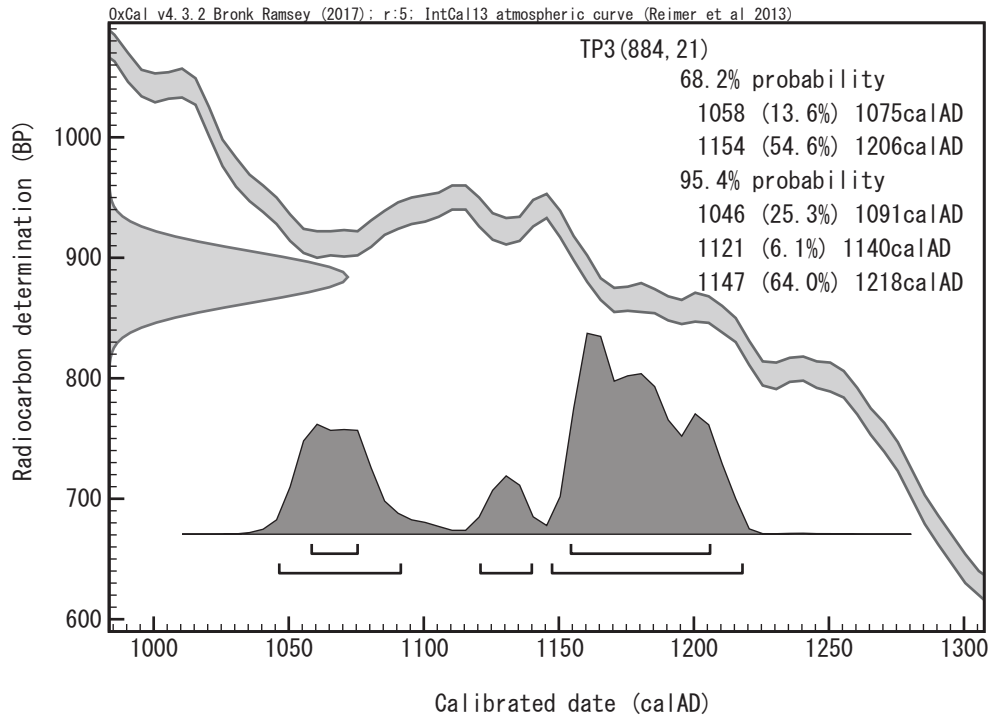
結果を表1、図1に示す。コラーゲンは年代測定に十分な量が回収できた（回収率が1%に満たない場合、コラーゲンが変性している可能性がある）。同位体補正を行った年代値は、 885 ± 20 BPである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver & Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値(1年単位)を記す。 2σ の値は、calAD 1046 ~ 1218である。なお、今回の $\delta^{13}\text{C}$ の結果をみると、人骨におけるコラーゲンの濃縮係数(+5.5%程度)を考慮しても、 $\delta^{13}\text{C}$ の値が通常より大きい($-17.31 \pm 0.53\%$)。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は食性によって変化することから、海産物を多く摂取していた可能性がある。

第15表 放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用)BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
					年代値		確率%			
南地区 0TP3 土坑墓	人骨	CoEx	885 ± 20 (884 ± 21)	-17.31 ± 0.53	σ	cal AD 1058 - cal AD 1075	892 - 875 calBP	13.6	YU- 9917	pal- 12187
						cal AD 1154 - cal AD 1206	796 - 745 calBP	54.6		
					2σ	cal AD 1046 - cal AD 1091	904 - 859 calBP	25.3		
						cal AD 1121 - cal AD 1140	830 - 811 calBP	6.1		
					cal AD 1147 - cal AD 1218	803 - 733 calBP	64.0			

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) コラーゲンを抽出・精製し、年代測定に用いている (CoEx)。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である



第24図 暦年較正結果

このことから、リザーバー効果によって実年代が若干古くなる可能性があるが（宮田ほか,2010）、詳細は、コラーゲンの $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ を測定し検討していく必要がある。

引用文献

Bronk RC.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon ,51, 337-360.

宮田佳樹,南, 雅代,西本豊弘,松崎浩之,中村俊夫,2010,貝の炭素年代測定値が示す意味.

名古屋大学加速器質量分析計業績報告書,21,32-39.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J.,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon,55,1869-1887.

Stuiver M., & Polach AH.,1977,Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

分析結果報告写真



伊江村より搬出作業（１）



伊江村より搬出作業（２）



伊江村より搬出作業（３）



伊江村より搬出作業（４）



伊江村より搬出作業（５）



寛骨出土状況

分析結果報告写真



整理状況 1



整理状況 2



整理状況 3

復元した頭骨写真



頭蓋骨

第7章 総括

本報告書は平成28年度から令和元年度に実施した具志原貝塚の史跡内容確認調査をまとめたものである。以下、地区ごとに記載する。

北地区

北地区は史跡指定地外ではあるが、遺跡の性格把握のため試掘調査を行った。試掘調査の結果、弥生時代並行期の単独層が確認された。道路を挟んで隣接している西地区では縄文時代前期の条痕文土器が地山面直上から確認されているが、本地区ではその時期の層序、遺物を確認することが出来なかった。本調査区では弥生時代並行期の遺物包含層及び遺構が確認された。土器としては、第Ⅲ層から浜屋原式土器、大当原式土器が確認された。このことから、調査地は浜屋原式期～大当原式期の層が堆積しており、他の時期（縄文時代前期～縄文時代後期）の層は重複していないと思われる。

南地区

南地区ではH30年度に遺跡の範囲確認を主目的に試掘調査を実施して試掘坑3において人骨の一部（頭骨、右腕骨等）を検出し、平成30年度に隣接箇所でも遺構の有無の確認を主目的とした調査を行った。その際、平成29年度出土人骨に続く形で、平面形楕円形になるとと思われる埋葬遺構（土坑墓）を一基検出し、土壌内から1体分の人骨が出土した。ただし、遺構に伴う人工遺物は確認することが出来ず、その他の層からも出土人骨の上層（第Ⅲ層）にて土器細片が1点見つかった以外は人工遺物を確認出来なかった。そのため、共伴遺物からの時代の把握を行うことは出来なかった。他の試掘坑（試掘坑1、試掘坑4）に関しては、試掘坑3と同様の層序となるものの、遺構、人工遺物を確認することが出来なかった。遺構の有無を確認するためには更なる試掘調査が必要ではあるが、試掘坑3・4付近が遺跡の末端となる可能性がある。

出土人骨は取り上げを行った後、分析を行い、その結果、出土人骨は45～55歳の女性であることが判明した。また、出土人骨の一部（骨片）から年代測定を行った結果、補正年代でBP885±20の測定結果が得られた。上記年代は11世紀半ば～後半、グスク時代初頭の遺構、人骨であることを示している。この他、出土人骨の一部を利用し国立科学博物館の篠田氏を中心としたグループによってDNA分析が行われ、M7a1aのハプログループに属するという分析結果が得られている。

本遺跡の昭和59（1984）年に行われた調査では南地区東側の調査区において、Iトレンチ第5層（白砂）から明確な時期は不明であるが先史時代の可能性がある仰臥屈葬の人骨1体とIIトレンチ第7層から後期土器や有孔メンガイ製品が共伴した3～4体分の錯乱骨が発見されている（安里他1985）。各々の試掘坑の層序の検討、埋葬姿勢の差異、出土人骨の形質の特徴など課題はあるが、昭和59年調査の上層人骨と今回調査の埋葬人骨（遺構）が同時期の人骨（遺構）ではあるか、別の時期の人骨（遺構）であるか、今後試掘調査や人骨自体の調査・検討が必要であると考え（第25図）。

また、沖縄本島北部地域だけで見ても、グスク時代の埋葬人骨出土事例は限られており、今回の出土事例は貴重な発見事例と言える。

東地区

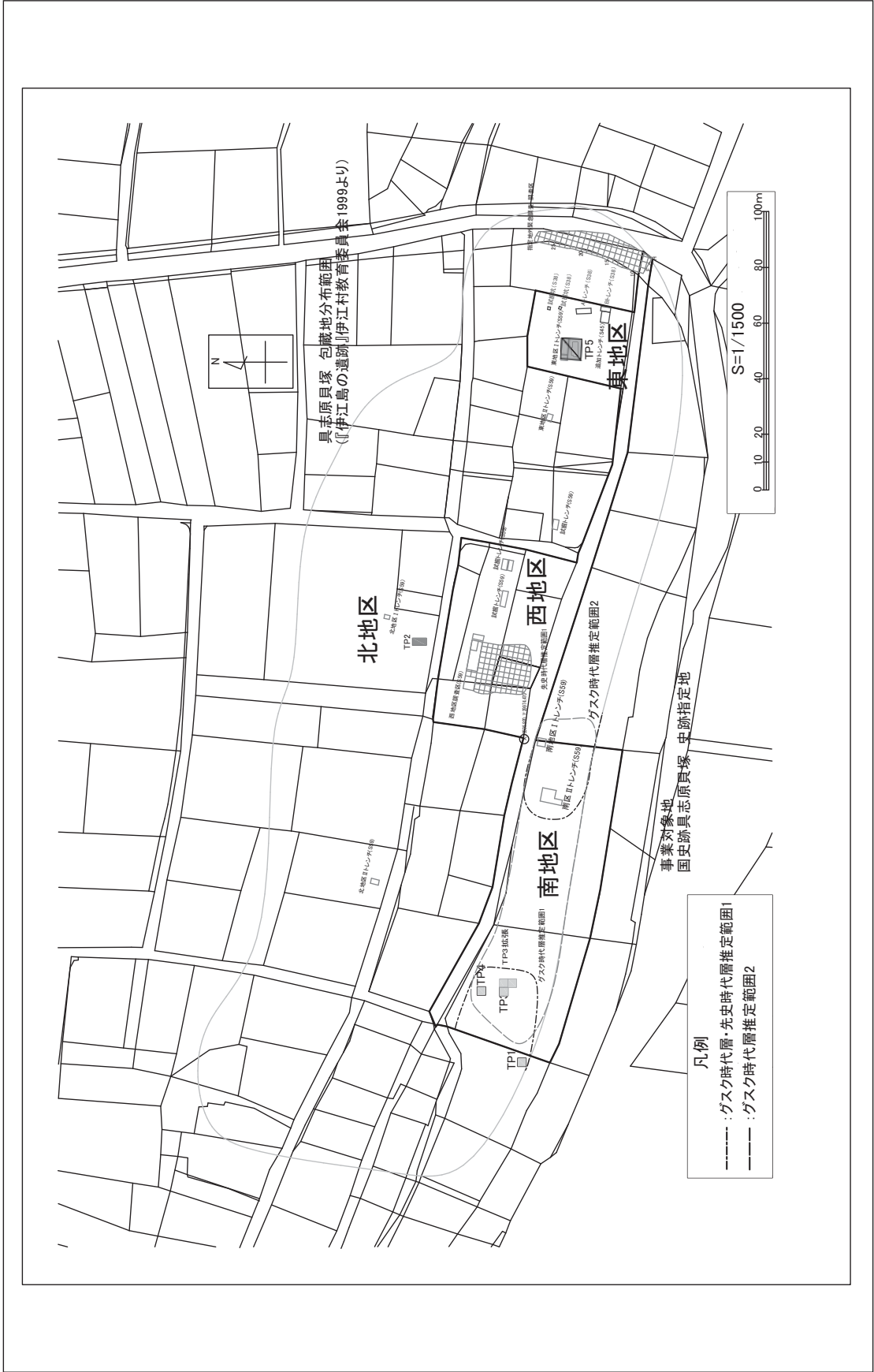
東地区においては平成30年度に地区の特性把握及び本地区における縄文時代層の有無の確認を目的として試掘調査を実施し、その結果Ⅵ層以下において遺物包含層及び遺構（貝溜り）を確認することが出来た。Ⅵ層では遺構として貝溜りが調査区全面に広がる様相を見せた。遺構保護のため、面として掘り下げることを行わず、試掘トレンチ、試掘ピットを南西隅設け、層序確認を主目的とした掘削を行った。その結果、調査地において浜屋原式期からアカジャンガー式期までの遺物包含層は確認できたものの、縄文時代相当期の遺物包含層を確認することは出来なかった。このことから、本地区における縄文時代層の分布は局所的となっていると可能性がある。

遺物としては、土器、石器、貝製品、獣魚骨、貝類などが出土した。土器に関しては、浜屋原式、大当原式、アカジャンガー式といった在地土器を確認することができた。その他、数量は少ないものの大当原式の調整法に類似した軽量土器も確認されており、今後継続した調査が要される。石器に関しては磨石、敲石、石皿となり、器種、数量は少なく、弥生時代並行期以降の出土傾向と同様となる印象を受ける。貝製品は貝錘、螺貝製貝斧、貝符、パイプウニ製玉製品といった遺物が出土している。獣魚骨に関してはイノシシなどの獣骨、ブダイ類などの魚骨が出土した。獣骨はイノシシ骨が大多数を占め、ネズミ類、イルカ・クジラ類、リクガメ類、ウミガメ類、ヘビ類、サギ類が出土し、魚類骨ではブダイ類が多数を占め、その他フェフキダイ、ベラ類、ハタ類、ハリセンボン類、クロダイ類、フグ類、ヨコシマクロダイ類、サメ類等が出土した。貝類はアマオブネ類などが主体にシラナミ、マガキガイ、サラダバティなどが出土した。調査面積の違いはあるが、北地区と比べると、貝種の多様性に違いがみられる結果となっている。

まとめ

今回の調査において、各地区や遺跡の様相について若干ながら判明してきた。遺跡全体の年代観として、これまでは西地区や東地区の一部で縄文時代前期の土器（条痕文土器及びいわゆる赤連系土器）が発見され、北地区や東地区、指定地外での調査で縄文時代後期の遺物、西地区・東地区・南区を中心として弥生並行期の遺構、遺物が確認されていた。今回実施した調査を土器型式の面からみると、北地区は西地区と隣接し、浜屋原式～大当原式期に生活していたと考える。一方で、東地区は大当原式～アカジャンガー式が出土している。このことから、時期により活動の中心が異なり、人々の活動が西地区・北地区から東地区に移動したことも考えられる。

今回、南地区において検出した土坑墓の人骨を試料とした年代測定においてグスク時代の人骨（遺構）であるという測定結果が得られた。これまで本遺跡ではグスク時代の遺構、遺物は確認されておらず、また近隣においても同時代の遺跡は確認されていない。先述の測定結果を受けて、本遺跡の指定地内や未指定地区、史跡周辺における調査が必要となるだろう。いずれにしても、今回の調査において本史跡の時期幅は更に広がることが判明し、それにより史跡としての価値が更に深まったと言える。



第25図 具志原貝塚 グスク時代層分布検討図



図版5 調査地遠景（北より）



図版6 調査地（北地区）近景（南より）



図版7 調査地（南地区）近景（東より）



図版8 調査地（東地区）近景（南より）



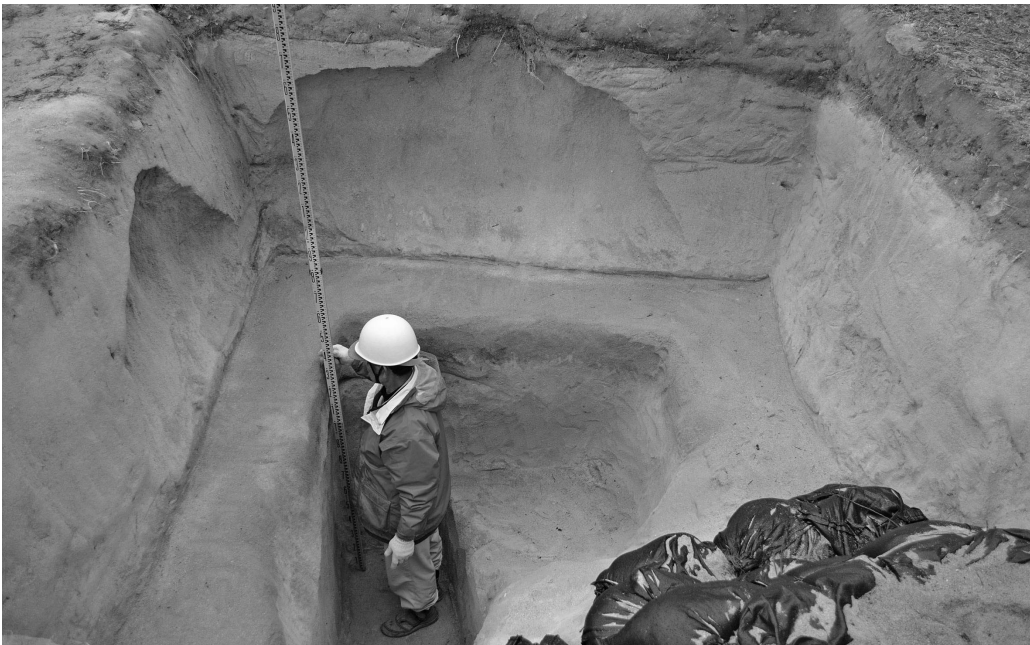
図版9 北地区試掘坑2壁面写真（西壁）



図版10 北地区試掘坑2壁面写真（北壁）



図版11 北地区検出遺構写真（東より）



図版12 南地区試掘坑1 層序写真（東より）



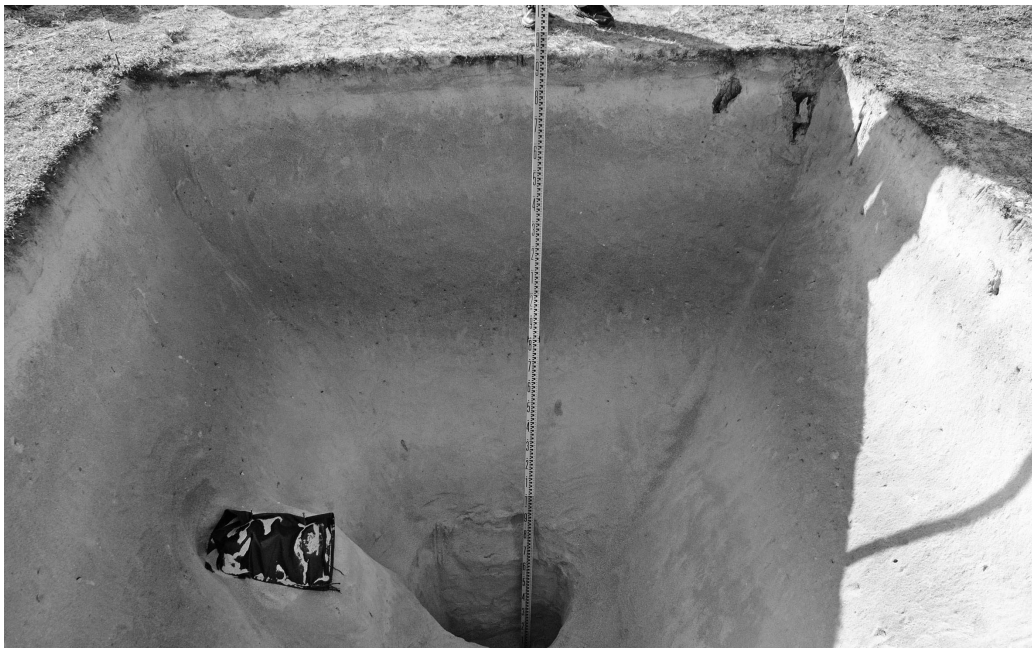
図版13 南地区試掘坑3 層序写真（東壁）



図版14 南地区試掘坑3検出埋葬遺構写真（平成29年度）（西より）



図版15 南地区試掘坑3検出埋葬遺構（平成29年度）（南より）



図版16 南地区試掘坑4 層序写真（東より）



図版17 南地区試掘トレンチ掘削状況及び層序状況写真（東より）



図版18 南地区試掘坑3検出埋葬遺構写真（平成30年度）（南西より）



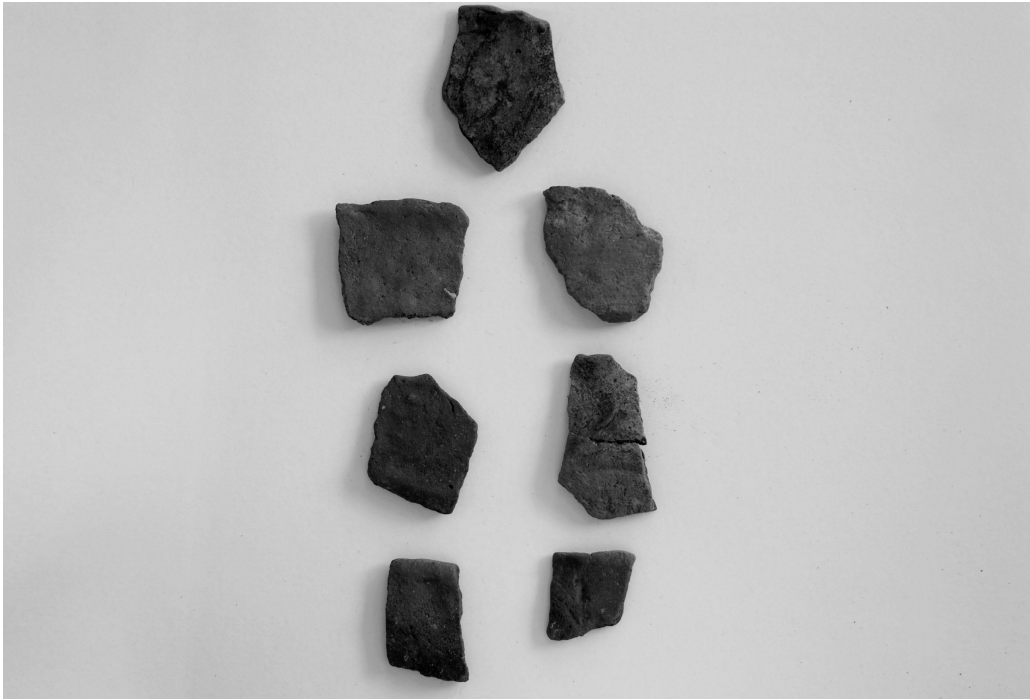
図版19 東地区試掘坑5 南壁層序写真（北より）



図版20 東地区検出遺構・遺物出土状況写真（南より）



図版21 北地区試掘坑2出土土器1 (有文土器)



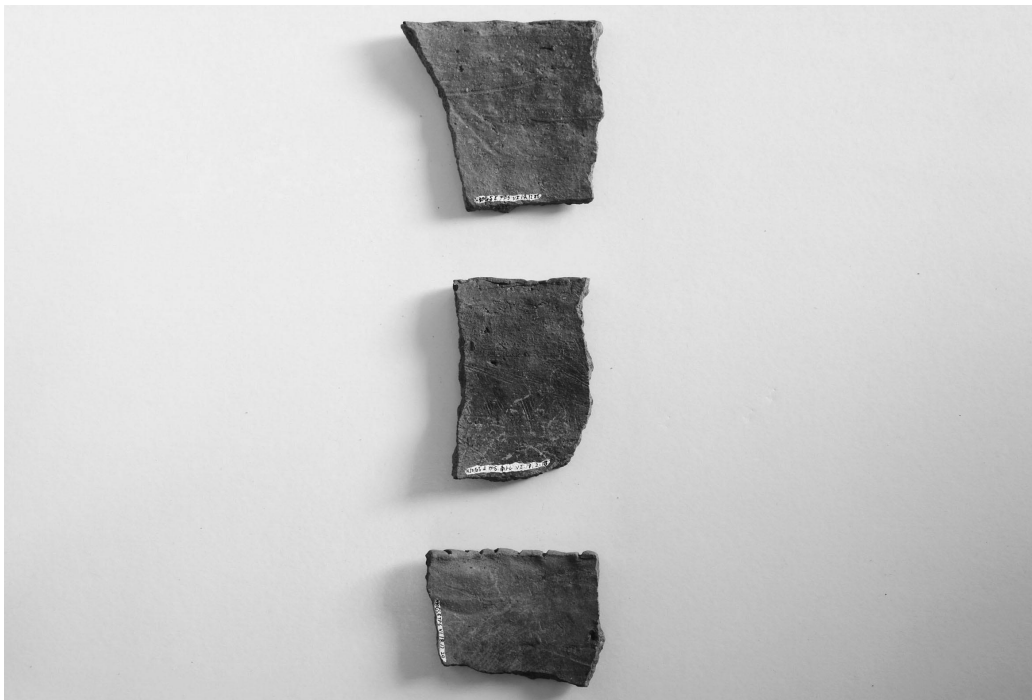
図版22 北地区試掘坑2出土土器2（無文土器1）



図版23 北地区試掘坑2出土土器3（無文土器2）



図版24 北地区試掘坑2出土土器（底部資料）



図版25 東地区出土土器1 (有文資料1)



図版26 東地区出土土器2 (有文資料2)



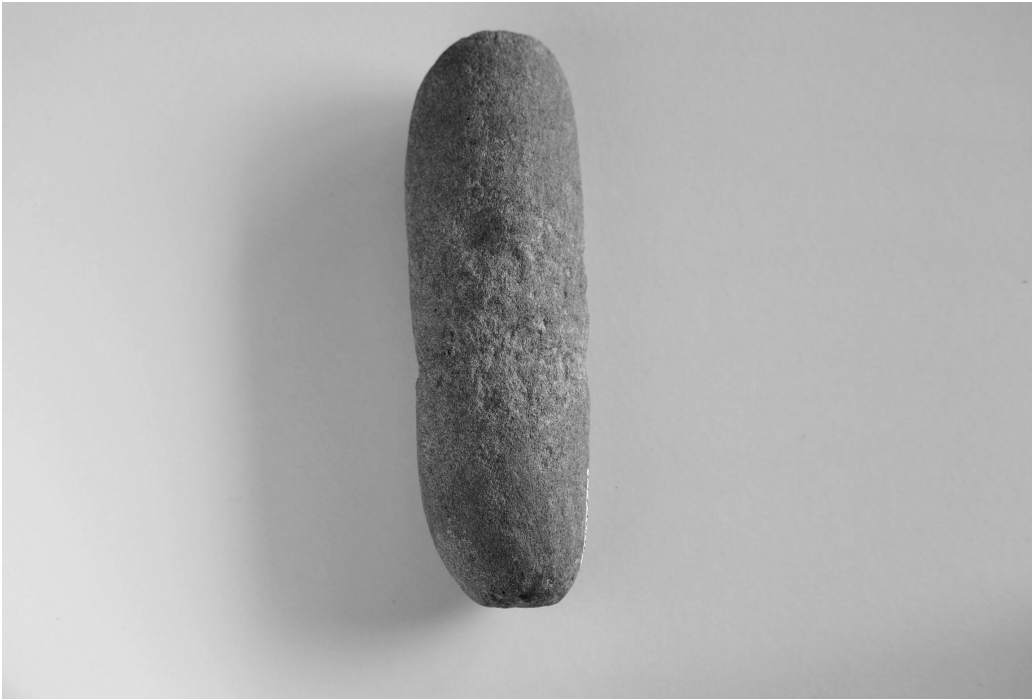
図版27 東地区出土土器3（無文土器口縁部1）



図版28 東地区出土土器4（無文土器口縁部2）



图版29 東地区出土土器5 (底部)



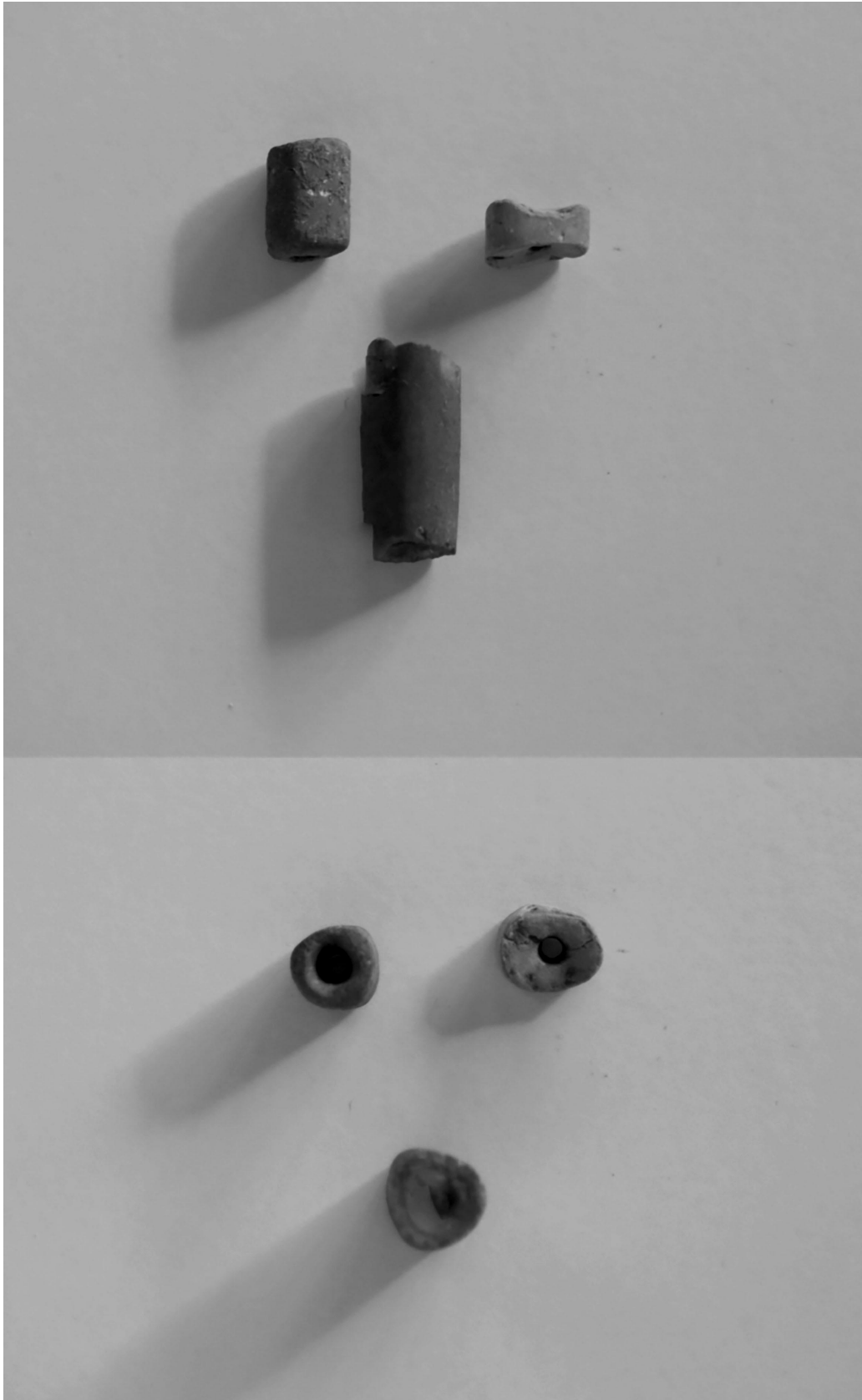
図版30 東地区出土石器1 (敲石)



图版31 東地区出土石器2（石皿）



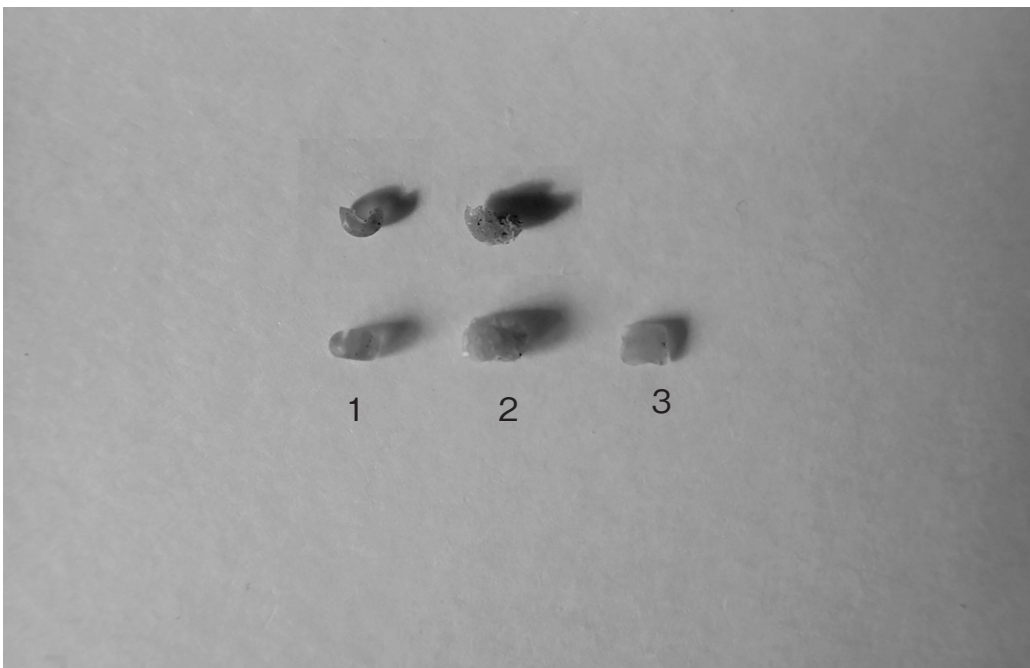
図版32 東地区出土石器3 (磨石)



図版33 東地区出土遺物（パイプウニ製品）



図版34 東地区出土貝製品（貝符）



図版35 東地区出土遺物（ガラス製品）

報告書抄録

ふりがな	そんないいせきはくつちょうさほうこくしょ1							
書名	村内遺跡発掘調査報告書1							
副書名	「具志原貝塚」内容確認に係る試掘調査概報							
シリーズ名	伊江村文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	玉榮飛道(編)、大城弘也、新美倫子、株式会社文化財サービス							
編集機関	伊江村教育委員会							
所在地	〒905-0501 沖縄県国頭郡伊江村字東江上75番地 TEL 0980-49-2334 FAX 0980-49-2503							
発行年月	2020(令和2)年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
具志原貝塚	沖縄県 伊江村川平	47315		26°42'30.3"	127°48'05.7"	201802~ 20190329	566.66㎡	史跡内容 確認
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
貝塚・墓・集落	弥生並行時代	貝塚		土器、石器、貝製品、ガラス製品、貝類、 獣魚骨			調査後、遺構保護を実施	
	グスク時代	埋葬遺構		人骨				
要約	<p>具志原貝塚は伊江村(伊江島)の南海岸の砂丘地に立地している遺跡で、これまで縄文時代前期~弥生並行期までの間に形成された複合遺跡であると把握されてきた。今回、北地区、南地区、東地区の3地区で内容確認のための試掘調査を実施した。</p> <p>北地区においては試掘坑1箇所を設定し、弥生並行期の貝溜りを検出した他、遺物包含層から尖底土器、貝製品等の出土を確認した。</p> <p>南地区においては平成29年度調査で人骨(頭骨、右腕骨等)を確認し、平成30年度調査において埋葬人骨の全身骨格及び埋葬遺構(土墳墓)の存在を確認できた。その後、人骨の年代測定の結果、グスク時代の人骨であることが判明した。調査時に検出した遺構は記録後、養生を行い、現地保存を行った。</p> <p>東地区においては、試掘坑1基を設定し、くびれ平底土器を伴う貝溜りを検出した。試掘坑南西隅において層序の確認を目的とした試掘トレンチを設け、地山層まで掘削を行った結果、遺構検出層の下層で尖底土器が出土する土層が確認された。東地区における遺物としてはくびれ平底土器と同じ層から貝符、ガラス小玉が出土した。下層からは尖底土器を主体とする土器が出土している。</p>							

伊江村文化財調査報告書第16集

村内遺跡発掘調査報告書 1

—「具志原貝塚」内容確認に係る試掘調査概報—

発行日 令和2年3月30日

発行 伊江村教育委員会
〒905-0501
沖縄県国頭郡伊江村字東江上75番地
TEL (0980) 49-2334

印刷 株式会社 ちとせ印刷
〒901-2131
沖縄県浦添市牧港2丁目1番5号
TEL (098) 879-5814
